

1 共同研究

【概 要】

「共同研究」は、歴博が大学共同利用機関として、国内外の研究者の参加を得て実施する研究プロジェクトであり、研究課題は日本の歴史と文化に関する今日の動向を踏まえて設定されてきた。その特徴は、1981年に歴博が設置されて以来、歴史学、考古学、民俗学及び関連諸科学の連携による学際的で実証的な研究に基本を置いてきた点にある。歴博が取り組む共同研究には、基幹研究（Principal Research Project：本館の取り組む中心的な研究）、基盤研究（Fundamental Research Project：考古・歴史・民俗の資料に基づく実証的で学際的な研究）がある。また、若手研究者育成という面から、開発型共同研究（Developmental Research Project：対象は本館の任期付き助教）および共同利用型共同研究（Collaborative Access Type Joint Research：若手を主体とする外部研究者を対象とした館蔵資料および分析機器・設備を利用した研究）を行っている。この他、人間文化研究機構が実施する基幹研究プロジェクト、共創先導プロジェクトおよびIU-REAL異分野融合・新分野創出プログラムを進めている。歴博は大学共同利用機関としての共同利用性を高め、大学等の研究・教育に供するため、2017年度から開発型共同研究を除くすべての共同研究（基幹研究、基盤研究、共同利用型共同研究）の全面公募を行っている。

【人間文化研究機構基幹研究プロジェクト】プロジェクトには「機関拠点型」、「広領域連携型」及び「ネットワーク型」がある。機関拠点型としては「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」、広領域連携型としては「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」、「同位体による年代・古気候・交流史研究」、「延喜式のデジタル技術による汎用化」、ネットワーク型としては「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」を実施しており、いずれも6年計画の4年目である。

【人間文化研究機構共創先導プロジェクト】研究資源や研究成果の共有化および地域との共創・協働等を通して社会に貢献するために2022年度から開始された。海外における日本研究者育成や日本文化理解を促進するための在外資料研究の一拠点として、「外交と日本コレクション—19世紀在外日本資料の世界史的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用」を実施している。

【IU-REAL異分野融合・新分野創出プログラム】大学共同利用研究教育アライアンス（IU-REAL）のもとに、4機関（人間文化研究機構、自然科学研究機構、高エネルギー加速器研究機構、情報・システム研究機構）間の連携により新たな分野の連携や創出を見いだすことを期待し、法人の枠を越えた異なる研究分野の研究者の自由な発想による研究を推進するもので2023年度から開始された。2025年度は3年計画で実施している「概念の多様性を包含するナレッジグラフによる分野横断型知識構築および活用に関する研究」の最終年度である。

【基幹研究】基幹研究は、本館の取り組む中心的な研究テーマのもとに、学際的研究を実施する共同研究である。2022年度から「環境や交流からみた日本歴史の動的研究」という研究テーマのもとで「平安期の社会の構造と変動を外的インパクトから捉える—交流・天災・疫病—」、「東アジアにおける文化の伝播と地域的展開に関する学際研究—「耕織図」の日報比較を中心として—」の2本のランチを開始した。また、2023年度から2025年度にかけて「生と死をめぐる歴史と文化」という研究テーマのもとに「高齢多死社会における生前から死後の移行に関する統合的研究」、「死者への行為が形成する認識と社会変容」の2本のランチを実施した。

【基盤研究】基盤研究は、基盤研究1（課題設定型）、基盤研究2（館蔵資料型）、基盤研究3（歴博研究映像）からなる。基盤研究1は、考古・歴史・民俗資料の研究資源化、高度情報化を主要な目的として実施する学際的な研究であり、新しい研究視点、研究手法などの研究基盤の新構築を目指す共同研究である。基盤研究2は、本館の収蔵資料を対象として研究計画を提案する共同研究である。そして、基盤研究3は、「歴博研究映像」の制作・研究活用に関する共同研究である。2025年度は、基盤研究2として「先端的同位体分析が拓く歴史資料研究の新展開」、「欧文資料にみる近世初期日本の国際交流と文化・美術との相関」の2件、基盤研究2として「近代暦知の総合的研究」の1件を3年計画で開始した。2026年3月に終了した研究課題は、「小渡遺跡を中心とする十腰内文化の研究」である。

【開発型】開発型共同研究は、若手研究者（本館の助教）を対象として、新規課題発掘と人材育成に取り組むものである。2024年度から「弥生時代の洪水災害に対する人びとの選択と社会の変化」「中世民衆生活史像の再構築―気候変動・自然災害と民衆生活との相関関係を探る―」の2件を3年計画で実施中である。

【共同利用型共同研究】共同利用型共同研究は大学院生やポストドクターなどを含む外部の若手研究者を対象として、館蔵資料および分析機器・設備を利用し取り組むものである。2025年度は「インドネシア・パチュアニ遺跡出土元様式青花に関する調査・整理及び研究」,「古代東大寺領北陸荘園の経営と地域社会」,「近世寺社建築における彫物評価に関する再検討―天沼俊一旧蔵資料に着目して―」,「葬儀用祭壇の意匠研究―歴史的・伝統的様式と現代的事例の比較・考察」,「漢代画像石墓の画題配置と墓室構造」,「近世社会における雅楽文化の拡がりと楽家」の6本を実施した。

共同研究担当 大串 潤児・小池 淳一・村木 二郎

2025年度 国立歴史民俗博物館共同研究計画一覧

研究種別	研究課題		年度（西暦）					
			'22	'23	'24	'25	'26	'27
機構基幹研究プロジェクト	(1) 機関拠点型基幹研究プロジェクト	日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究（本館研究部 准教授 後藤真）						
	(2) 広領域連携型基幹研究プロジェクト	(2)-1 横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して（主導機関：国立歴史民俗博物館、国立民族学博物館）フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発（本館研究部 准教授 川村清志）						
		(2)-2 人新世に至る、モノを通じた自然と人間の相互作用に関する研究（主導機関：総合地球環境学研究所）同位体による年代・古気候・交流史研究（本館研究部 教授 坂本稔）						
		(2)-3 異文化融合による総合書物学の拡張的研究（主導機関：国文学研究資料館）延喜式のデジタル技術による汎用化（本館研究部 教授 三上喜孝）						
	(3) ネットワーク型基幹研究プロジェクト	歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業（本館研究部 准教授 天野真志）						
機構共創先導プロジェクト	(4) 日本関連在外資料調査研究	外交と日本コレクション—19世紀在外日本資料の世界史的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用（本館研究部 教授 日高薫）						
基幹研究	(5) 平安期の社会の構造と変動を外的インパクトから捉える—交流・天災・疫病—（早稲田大学文学学術院 教授 田中史生）							
	(6) 東アジアにおける文化の伝播と地域的展開に関する学際研究—「耕織図」の日韓比較を中心として—（本館研究部 教授 松田陸彦）							
	(7) 高齢多死社会における生前から死後の移行に関する統合的研究（本館 研究部 教授 山田慎也）							
	(8) 死者への行為が形成する認識と社会変容（本館研究部 准教授 上野祥史）							
基盤研究	(9) 顔身体土器の通文化比較にみる身体・モノ認識（本館研究部 准教授 中村耕作）							
	(10) 「地域アーカイブ」の形成過程と郷土史家の役割に関する総合的研究（山形大学 准教授 小幡圭祐）							
	(11) 先端的同位体分析が拓く歴史資料研究の新展開（本館研究部 准教授 若木重行）							
	(12) 欧文資料にみる近世初期日本の国際交流と文化・美術との相関（本館研究部 准教授 鷺頭桂）							
	(13) 小渡遺跡を中心とする十腰内文化の研究（千葉大学大学院 教授 阿部昭典）							
	(14) 平田篤胤関係資料の漢籍受容に関する総合的研究（平成国際大学 客員講師 高田宗平）							
	(15) 近代暦知の総合的研究（青森公立大学 准教授 下村育世）							
	(16) アーカイブズ学との連携による映像資料の多角的価値評価と活用モデルの構築（本館研究部 教授 内田順子）							
開発型	(17) 弥生時代の洪水災害に対する人びとの選択と社会の変化（本館研究部 テニユアトラック助教 山下優介）							
	(18) 中世民衆生活史像の再構築—気候変動・自然災害と民衆生活との相関関係を探る—（本館研究部 テニユアトラック助教 土山祐之）							

研究種別	研究課題	年度（西暦）					
		'22	'23	'24	'25	'26	'27
共同利用型共同研究（当該年度実施）	館蔵資料利用型	(19) インドネシア・パチュアニ遺跡出土元様式青花に関する調査・整理及び研究（寧波大学 講師 張 睿帆）					
		(20) 古代東大寺領北陸荘園の経営と地域社会（岡山大学文明動態学研究所 特別研究員PD 村上菜葉）					
		(21) 近世寺社建築における彫物評価に関する再検討 —天沼俊一旧蔵資料に着目して—（日本女子大学大学院1年 松山奈穂）					
		(22) 葬儀用祭壇の意匠研究—歴史的・伝統的様式と現代的事例の比較・考察（芝浦工業大学 准教授 瓜生大輔）					
		(23) 漢代画像石墓の画題配置と墓室構造（岡山大学文明動態学研究所 准教授 岩崎志保）					
		(24) 近世社会における雅楽文化の拡がり（歴史学研究会 事務局員 五味玲子）					

【機構基幹研究プロジェクト】

（1）機関拠点型基幹研究プロジェクト 日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究 2022～2027年度 （研究代表者 後藤 真）

1. 目的

「日本歴史文化知」とは、地域における歴史資料（地域歴史資料）をはじめとする様々な歴史資料の多様なデータ構築とその高度なデータの研究を、歴史資料分析に即して進める「人文情報学的研究」と、そこから得られたデータを用いつつ、地域の人々と協働して資料の継承を考え、また地域歴史資料の研究を推進する「地域歴史協働研究」の相互連携にもとづく、研究プロセスと研究成果の総体を指す。

本プロジェクトの前身事業である「総合資料学の創成」事業（2016～21年度）の成果を継承しながら、歴史文化研究の課題意識にもとづいた人文情報学的な解析と、データネットワーク構築、そしてそれらを活用した地域との協働研究を推進する。

なお、本研究課題は、人間文化研究機構の中期目標・中期計画のうち、特にI-1-（1）「日本の歴史・文化の分野における基幹研究の推進：日本の歴史文化に関する「資源」「研究」「展示」の3つの機能を有機的に連携させる「博物館型研究統合」の理念のもと、歴史文化研究に基づくオープンな日本の歴史資料基盤構築に関する研究を実施し、歴史、考古、民俗、自然科学などに基づく資料データの横断的な統合をより促進させ、研究資源を一体的に公開・共有し、広くオープンサイエンスに寄与する。」を踏まえつつ実施するものである。

2. 今年度の研究計画

令和7年度は第4期後半初年度にあたり、研究の全体像を作り出す段階にある。令和6年度の国際シンポジウム、企画展示などの成果を踏まえつつ、より広いアウトプットを進めるとともに、国内外の関係者との連携がどのようなものであったのか、望むべき形はどのようなものなのかを、アドバイザーボードの意見を踏まえ、特に大きな研究テーマの一つ据えて研究を進める。関連する科学研究費の初年度にもあたるため、密接に連携させつつ研究を推進する。

令和7年度における両ユニットを貫く研究テーマとしては、6年度に引き続き「データの信頼」とする。令和6年度には特に3Dデータの取得や、そのデータがどのように安定的に利用可能かを、データの信頼にはどのような層があるかの検討を行った。その成果を踏まえつつ、引き続きデータそのものが「正しいか否か」のみならず「既存の資料からどれぐらいのデータを確保すべきか」「どのデータの取得精度はどれぐらいまで求めればよいか」「その資料自体を出すことで誤解を招かないか」「AIによる変換の妥当性をどのように担保するか」「データが他のポータルにアップされることにより、データの見え方が変わり信頼度が落ちるように見えるのはなぜか」「研究者が使いやすいデータと、パブリックな場において使いやすいデータとはどのようなものか」などの検討を引き続き進める。

上述に加え、基盤構築、研究活動、成果発信・普及活動として、次の事項を計画する。

- ① オープンサイエンス基盤構築については、目録情報システムの見直しを行い、より高度な情報発見可能なモデルを作る。システムの更新時期にかかるため、科学研究費等の費用を充当しつつ、遅滞なく更新作業を進めるとともに、館全体のシステムとの連携を進める。
- ② khirin-rの公開部分が完成したことに伴い、非公開部分のデータ構築方法を検討する。
- ③ データの信頼にかかる議論を実施し、その成果を広く学界に向けて発信する。
- ④ 人文情報ユニットを中心に、khirinのデータ充実を進める。
- ⑤ 引き続き、国際会議への参加を行い、研究成果を国際的に展開する。
- ⑥ これまでにも連携のある国内外の大学や自治体を中心にワークショップ等を実施し、研究成果の国際的な共有を目指す。
- ⑦ 地域のさまざまなステークホルダーとの実践による資料調査と、成果の共有を行う。
- ⑧ 千葉大学・長崎大学との協定、卓越大学院プログラムとの連携に基づいた教育展開を行う。
- ⑨ 予定される成果書籍出版への準備を進める。

3. 今年度の研究経過

(1) 研究会

昨年度の総括と、当該年度の研究の方向をディスカッションする全体集会（オンライン／東北大学）を5月に、科学研究費学術変革領域A「歴史情報学の創成」（以下「歴史情報学」）との併催にて実施した。その後、10月および3月における「歴史情報学」の国際シンポジウムを両ユニットと併催した。また、2月に「歴史情報学」と両ユニット合同研究会を併催、7月と1月に地域歴史協働ユニット研究会を実施した。「歴史情報学」との協力関係のもと、10月の国際シンポジウム（オンライン／東京都千代田区）では、国際DH学会で基調講演を行ったJavier Cha氏に講演をいただき、韓国を事例とするDH研究の最新事例のディスカッションを進めた。また、3月のシンポジウム「人文データ基盤の利用とその未来」（オンライン／東京都千代田区）では、文化遺産情報のデジタル化・構造化・連携を基盤に、歴史学の方法論を刷新し、AIやLinked Dataを活用した高度かつ開放的な研究基盤の構築を目指す議論が行われた。デジタル資料の長期保存や国際連携の重要性も確認され、人文学研究のインフラを、国境を越えて共有・発展させていく方向性が示された。例年通りとなるが7月には、多様な目的意識または所属組織のもと地域歴史資料にかかわる関係者による公開討論会「学術野営2025 in 和歌山」（オンライン／和歌山県田辺市）を実施、この討論会テーマの事前検討会やフォローアップイベントとして「火起こしの会（全4回）」「テント干しの会」も実施した。

国際連携としては、6月にバンドン工科大学を訪問し、現地学部長への表敬訪問を実施し、現地でのシンポジウムと学生向けワークショップを実施した。また、2月には同じくルーヴェン大学を訪問し、DH人材育成プログラムのカリキュラム構築状況をはじめとする同大学でのDH人材育成全般に関して情報交換を行ったほか、ワークショップを実施した。

また国内連携としては、12月に合同会社AMANE、奥州市教育委員会と「奥州ミュージアムラボ」（岩手県奥州市）を主催した。

これら研究会・国際研究集会等は計10回である。ほか、当該年度のプロジェクト全体の活動成果報告集会を2026年6月に実施予定である。

(2) 国内外での研究発表

特筆すべきものとして、The 35th EAJRS Conference（European Association of Japanese Resource Specialists, ドイツ、9月）、PNC 2025 Annual Conference（Pacific Neighborhood Consortium, ベトナム、9月）において報告と関連するディスカッションを実施した。

(3) 成果論文、成果論文を含む書籍など

研究代表である、後藤はSpringer Natureによる書籍に論文を掲載した。後藤論文は、AI時代におけるデジタル・パブリックヒストリーの意義を、歴史記述と専門性の再編という観点から論じた研究である。デジタルアーカイブ、資料共有、クラウドソーシング、生成AIの展開により、歴史資料へのアクセスや解釈の担い手は拡張している。一方で、歴史学の専門性は不要になるのではなく、資料批判、文脈化、記述の妥当性を支える知として、より重要になることを主張し、本研究の論点を整理したものとして位置付けられる。

他にも複数の研究成果が示された。学術資料3Dを公開・共有するためのメタバース展示空間を構築し、地域資料を仮想空間で展示・共有する可能性と課題を示すもの、写本の来歴情報を多様な史資料から抽出し、RDFによって構造化・関連付けるモデルを検討するものなどが成果として出されている。これらは、資料の由来や伝来過程を

機械可読な形で記述し、分散する情報を統合する試みである。

加えて、デジタル・ヒューマニティーズにおける基盤データの役割を論じ、日本の暦などの基礎データが検索、変換、メタデータ付与、他システム連携を支える研究、曖昧な時代表現を期間の長さに基づいて時間的位置として推定する研究などが出されており、これまでの研究傾向を引き継ぎつつ、歴史資料に頻出する不確定な時間情報を計算可能にする方向を示している。

全体に資料情報の構築、パブリックとの実践などの論文が館内外の共同研究員によって蓄積されている。

(4) 学術交流協定

学術交流協定に基づき、外部プロジェクトとの連携のもと、ルーヴェン大学の若手研究者を受け入れた（12月1日～27日）。

その他の協定締結大学等とも、共同研究や大学院教育だけでなく、地域資料保全や活用のための事業において連携した。

(5) 共同研究の公募

日本歴史文化知奨励研究の公募を行い、計6件を採択し、公募型共同研究を実施した。その成果は2026年6月に計画しているプロジェクト全体の活動成果報告集会において公表する。

(6) 広報

The 35th EAJRS Conferenceへの単独ブース出展、AAS 2026 Annual Conference（Association of Asian Studies, 2026年3月）への日本国内の出版社数社との合同ブース出展により、国内外の研究者へのアピールに努めた。

また鹿児島県与論町において「島の自然と暮らしのゆめぬ古写真展 vol.5 ～めぐる～」(2月5日～22日、砂美地来館)を実施した。

(7) その他(教育・若手育成・共同利用等)

9月には筑波大学大学院の院生6名を対象に、国立歴史民俗博物館未来世代育成プログラム(若手研究者教育プログラム)を実施した。また2月には、千葉大学の学部生40名を対象として、集中講義「博物館で歴史を読み解く」を実施した。

基盤システム・khirinについては、昨年度のアドバイザリーボードの意見を受け、「歴史情報学」の成果とあわせつつ、全面的な刷新を行った。目録システムをベースにIIIF画像データへのリンク、TEIデータへのリンクを行うようにするとともに、データセット(khirin-r)へのリンク、実験的サービス(khirin-labs)へも、目録システムのトップページからリンクすることとし、全体の入り口を一つにまとめることに成功した。

khirin-rについても画像データ、TEIデータなどの公開を進め、データ基盤として運用が軌道に乗りつつある。

総括

「歴史情報学の創成」事業の開始とともに、科研と深く連携しつつプロジェクトを進めることになった。とりわけ、基盤システム構築やデータ分析については「歴史情報学」との連携を軸としつつ、本プロジェクトでは地域連携・3Dデータの蓄積と展開・データの信頼性の議論を重点的に進める方針としている。地域との連携については、これまでに多く連携を進めてきた、岩手県奥州市・鹿児島県与論町に加え、岐阜県飛騨市のデータ連携なども進めることとなった。奥州市については、現地での資料情報のデータ化に加え、3Dデータの蓄積と展開を進めた。2025年度はこのデータ(現在は、耐震等の問題で入ることができない歴史的建造物の3Dデータ)の成果を地元の中学生・高校生に見てもらい、ゲームパッドで実際に中を歩いてもらう実践を「奥州ミュージアムラボ」の中で実施した。与論町においては、私設博物館にあった町指定の民具類のデータ化と保全活動を進め、保全がより容易な環境へと移動を行うこともできた。2026年度中にさらなるデータ化を進め、その資料の意義を広く理解してもらう活動を行う予定である。飛騨市については、民具カードのデータ化に着手、個人情報除去の作業を実施し、2026年度中に公開へと結びつける予定である。

3Dデータの蓄積については、先述の奥州市・与論町に加え、伊賀上野市などでもデータ取得を行った。これまでと大きく異なることは、データ取得から公開までを一貫してセンター内で行えるようにするとともに、バンダーロックインとなる仕組みを用いないようにし、将来へのデータ利活用の仕組み構築への道を開いた点にある。データの利活用の幅が広がることで、先述のような利活用事例も増えることとなった。今後は、これらのデータを公開し、アクセス可能な環境を整備していくことになる。

2024年度に引き続き、国際連携も進めた。ルーヴェン大学・バンドン工科大学とのさらなる緊密化を進めた。「歴史情報学」との連携も深めつつ、2025年度は両大学への訪問も実施し、ワークショップを行うなど現地での研究交流を進めた。それ以外にも複数の国際会議での報告・セッション(PNC)なども行い、ヨーロッパ・アメリカ・アジアと世界的にも日本歴史文化知の研究を広く知らせることができた。

ただし、進捗上課題となっている点が一つある。それは、ミシガン大学出版との研究成果書籍である。現時点においては、先方との交渉段階であり、その後の執筆取りまとめにまで至っておらず、この点については、遅れを取り戻すべく、準備を急ぐ必要がある。

データの信頼の課題については、AIおよび安定的なデータ基盤という両面からの検討が進んでいる。2月の研究会においては、時空間情報の基盤に関する議論を行ったが、そこで議論となったことの一つに、歴史学の知識や経験に基づいたデータの構造と、情報学的なデータの構造が異なるのではないか、というものがあつた。情報学的にデータの基盤構築を進めていく際に、歴史学的な文脈や知見がどこまで残るのか、あるいは、その文脈の違いをどのように理解してデータを使うべきなのか、といった論点につながる議論が行われた。これはまさに信頼の要素を分解したうち「解釈可能性」や「真正性」の議論とつながる論点であると整理できる。歴史学・情報学のいずれかの分野で「使える」「使えない」といった観点を超えて、そもそもどのような前提でデータが作られているのか、それはどのように使われるべきなのか（単に使うだけではなく、異なる分野の研究者が自分たちで使えるように再構成することも含めて）、それを相互理解していく「信頼構築のプロセス」を考えていくことが求められるようになる、今後の可能性を持つ研究会となった。

直接、本共同研究内の事業ではないものの、関連する事業と2025年度に位置付けて行ったものに、「正倉院文書複製事業」がある。当該事業は、歴博の創立当初から存在している事業だが、当初から目的は変わらないものの、媒体等を含め、その周辺環境が大きく変化している。その中で、2025年度からは、精度の高い複製という論点のもと、アナログ複製とデジタル撮影の関係を本共同研究と関連する課題として検討する方針とした。アナログ複製は、コロタイプ印刷で行われている。これは色の転写や印刷されたものの安定性という観点からは、極めて信頼度の高い複製となる。一方で、複雑な三次元情報の取得や、光の状況による「見え方」の変化、印刷では表現できない細かい情報などはデジタル撮影データが圧倒的に優位な状況となっている。媒体の特性に応じた複製などのあり方を考えることが、極めて重要な段階であり、日本歴史文化知の「信頼」の議論の重要な材料ともなり得るため、引き続き議論を合わせて進めていきたい。

若干の遅れを持つ項目はあるものの、研究そのものの進展、地域連携・国際連携・システム構築・関連事業など一連の進捗は極めて順調であるため、全体としては概ね順調に進行していると自己評価を付した。

4. 今年度の研究成果

(1) 研究成果の概要

昨年度に引き続き、人文情報学研究会を中心に複数の論文成果を出すことができた。地域歴史協働研究会においても、実際に地域と連携した幅広い研究・調査を実施するとともに、博物館資料の大学教育・社会教育への幅広い活用なども検討することができ、それぞれの側面から新たな展開を見せた。さらに、国際研究集会やワークショップの実施など、国際的な連携も更に進展し、プロジェクトを地域・国際の両面から進めることができている。

(2) 主な論文

MAKOTO GOTO (2025) . Advancing Digital Public History: Rethinking Historical Description and Expertise in the AI Era. In: Yokemoto, M., Hayashi, M., Okamoto, M., Gordon, A. (eds) Public History in Japan. Springer, Singapore. https://doi.org/10.1007/978-981-95-1316-1_5

松平拓也・笠原楨也・高田良宏・濱貴幸・長井圭治・蟹屋敷祐介 (2025) . コアファシリティにおける研究データ管理アーキテクチャの構築. 研究データエコシステム構築事業シンポジウム.

堀井洋・小川歩美・堀井美里・高田良宏 (2026) . 学術資料3Dの公開と共有を目指したメタバース展示共有空間の構築—AMANEにおける地域資料メタバース展示プロジェクトの実現と課題—. 情報知識学会誌, 35 (4) , 473-476.

KOKAZE, A., NAKAMURA, S., & YAMADA, T. (2025) . Uncovering Editors' Intentions and Implicit Historical Perspectives through TEI Markup: Case Study on Dai Nihon Shiryo. Proceedings of DH2025.

山田太造 (2025) . 前近代日本史に関わる史料画像の管理と利活用. 第8回東アジア史料編纂機関国際学術会議「アジア歴史資料の保全と学術資源化」予稿集, 3-8.

大月希望・小川潤・寺尾美保・井上聡・中村覚・大向一輝・山田太造 (2025) . 写本の由来を多様な史資料から探る: RDFを用いた来歴情報の構造化と関連付けのモデル検討. じんもんこん2025論文集, 349-356.

小風綾乃・中村覚・井上聡・金子拓・山田太造 (2025) . 一括処理を前提とした固有表現の関係づけ—TEI 版『言継卿記』を例に. じんもんこん2025論文集, 307-314.

中村覚・岡本真・小風綾乃・大月希望・山田太造 (2025) . TEI を用いたデジタル編纂ワークフローの検討: 史料編纂所の中世禅籍史料を事例として. じんもんこん2025論文集, 49-54.

関野樹 (2025) . デジタル・ヒューマニティーズにおける基盤データの役割. The Korean Journal of Japanology, 143, 15-35.

Sekino, T. (2025) . Estimation of Temporal Position for Ambiguous Periods Based on Their Duration. Proceedings of the 2025 Pacific Neighborhood Consortium Annual Conference and Joint Meetings (PNC) . DOI: 10.23919/PNC67749.2025.11245502.

松岡弘之 (2025) . ハンセン病療養所における記録の保存と活用のために. じゃんびん, 40 (1), 1.

原田寿真・小川千代子・下重直樹・松岡弘之・屋猛司・亀濱玲子・遠藤隆久 (2025) . 分科会B ハンセン病療養所の公文書の取り扱いについて考える. 差別の連鎖を断つ ハンセン病市民学会年報2023, 94-153.

原山浩介 (2025) . 生産地の報道に見る敗戦直後の「闇」: 『秋田魁新報』の米をめぐる記事から. 歴史評論, 906, 29-40.

原山浩介 (2025) . 大衆動員の成果と課題: 一九八〇年代の消費者問題「百花繚乱」をめぐる. 社会運動史研究, 6, 133-149.

(3) 主な研究会・シンポジウム等

全体集会 (2025年5月9日 於: オンライン／東北大学)

挨拶・趣旨説明 (後藤真)

成果報告 日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究 全体報告 (後藤真)

成果報告 歴史文化資料のデジタル化・公開に向けた地域連携と国際共同 (川邊咲子)

討論

奨励研究報告 移動する前近代文書への効果的調査手法の構築と情報共有基盤の確立に関する研究 (奥州市教育委員会事務局 高橋和孝)

奨励研究報告 人口減少社会における近現代政治史資料のデジタルデータ化と地域社会連携の促進 (東北大学大学院法学研究科 伏見岳人)

企画研究会 多様なステークホルダーの可能性 地域における実践とデータ活用

与論における実践 (後藤真)

宮崎における実践 (九州医療科学大学動物生命薬科学科 山内利秋)

奥州市における実践 (奥州市教育委員会事務局 高橋和孝)

ディスカッション

クロージング

学術野営2025 in 和歌山 (2025年7月4日～7月6日 於: tanabe en+)

7月4日 ナイトセッション

お仕事セッション 学術系お仕事マッチング【模擬】企業 (だけじゃない!) 合同説明会

7月5日

お仕事セッション 総括会: 学術系お仕事マッチング【模擬】企業 (だけじゃない!) 合同説明会

学術資料の保存・継承に関する報告・ディスカッション (下記「火起こしの会」の議論を受けて)

全体討論

7月6日

巡検 (南方熊楠記念館および周辺ジオパーク)

関連企画: 火起こしの会 (いずれもオンライン)

第1回 (2025年5月20日)

変形菌の標本から, 博物館について考える (日本変形菌研究会 川上新一)

和歌山県南部の地質遺産: ジオパークで進める学術資料の保全と活用 (和歌山県立南紀熊野ジオパークセンター/和歌山大学 本郷宙軌)

第2回 (2025年6月2日)

シチズンサイエンスを育てるには?: 実践を通じて見えてきたもの (金沢大学人間社会学域 一方井祐子)

第2.5回 (2025年7月1日)

歴史と神話/アート—熊野信仰と南方熊楠を巡る芸術実践— (紀南アートウィーク実行委員長 藪本雄登)

第3回 (2025年6月30日)

地域資料調査「奥州市モデル」の実践～閉校学校資料の取り組みから (奥州市教育委員会事務局 羽柴南枝)

和歌山県における地域歴史資料の災害対策をめぐる現状 (和歌山県立文書館 藤隆宏)

これなんだ? わからない民具を囲む会 in 飛騨市 (2025年7月12日 於: オンライン／飛騨みやがわ考古民俗館)

第1回地域歴史協働ユニット研究会「日本近世史データベースの可能性—国立歴史民俗博物館「江戸商人・職人データベース」を手がかりに—」（2025年7月20日 於：オンライン／国立歴史民俗博物館）

趣旨説明（天野真志）

基調講演 江戸商人名データベースの作成について—作成過程と若干の知見・課題—（『江戸商家・商人名データ総覧』編者 田中康雄）

報告 江戸商人・職人データベースの作成契機について（学習院女子大学国際文化交流学部 岩淵令治）

報告 大坂商人データベースの作成に向けて（神戸大学経済経営研究所 高槻泰郎）

報告「江戸商人・職人データベース」活用方法とその意義—「幕末維新期横浜売込商データベース」との連動性を中心に—（桜美林学園学園史編さん室 菊地悠介）

報告 ジェンダーと近世史データベース（横山百合子）

討論

学術変革領域研究（A）キックオフシンポジウム兼第1回人文情報学・第2回地域歴史協働ユニット研究会（2025年10月17日 於：オンライン／スタンダード会議室 神田店）

趣旨説明

研究報告

基盤研究S「史料データセンシングに基づく日本列島記憶継承モデルの確立」進捗報告（東京大学史料編纂所 山田太造）

史料の収集とデジタル化：岩倉具視関係史料を例に（東京大学史料編纂所 箱石大）

日本中世史料デジタルテキストの構造化（東京大学史料編纂所 小風綾乃）

講演

Automating the Past: Artificial Intelligence and the Next Frontiers of Digital History（The University of Hong Kong, Javier Cha）

歴史情報学の創成 その狙いと未来（後藤真）

ディスカッション

司会：小風尚樹

コメント：東京大学史料編纂所 大月希望

第3回人文学データシンポジウム「人文学データの多様性」（2025年11月14日 於：オンライン／東京大学本郷キャンパス）

趣旨説明（東京大学史料編纂所 山田太造）

多様な史資料が持つ可能性：周縁的／潜在的存在から活用へ（東京大学史料編纂所 大月希望）

震災資料の多様性—神戸大学附属図書館震災文庫から—（神戸大学人文学研究科 跡部史浩）

文化財デジタルデータの多様性と統合プラットフォーム構築—テキストから時空間情報まで—（奈良文化財研究所 高田祐一）

デジタル空間社会の基盤形成に向けた取り組み（東京大学空間情報科学研究センター 溝淵真弓）

音声・映像資料の共同利用—国立国語研究所の取り組み—（国立国語研究所 高田智和）

都城島津邸における収蔵史料の管理・活用について—デジタルアーカイブ構築事業を中心に—（都城島津邸 中嶋愛）

パネルディスカッション（司会：後藤真）

文化財体験型イベント「奥州ミュージアムラボ～文化財の実験室 歴史的建造物編～」（2025年12月21日 於：オンライン／水沢地区センター・奥州市武家住宅資料館 旧内田家住宅）

第3回地域歴史協働ユニット研究会「歴史文化知の社会発信に向けた連携」（2026年1月8日 於：オンライン／泉大津市立図書館）

図書館見学

趣旨説明（小野塚航一）

報告（泉大津市立図書館 河瀬裕子）

報告（天野真志）

「地域歴史協働研究」拠点としての図書館—体験の覚え書き（岡山大学学術研究院社会文化科学学域 松岡弘之）

討論（司会：小野塚航一）

学術変革領域研究（A）公開研究会兼第2回人文情報学・第4回地域歴史協働ユニット研究会「時空間情報基盤の現在地」（2026年2月2日 於：オンライン／アートホテル石垣島）

全体司会：後藤真

挨拶・趣旨説明

時間情報基盤構築のこれまでと現在（国際日本文化研究センター 関野樹）

歴史的空間情報基盤のこれまでと現在（ROIS-DS/CODH・国立情報学研究所 北本朝展）

ディスカッション

プロジェクト・開発状況報告

学術変革領域研究（A）2025年度国際シンポジウム「人文データ基盤の利用とその未来」（2026年3月28日 於：オンライン／イイノカンファレンスセンター）

オープニング

基調講演 Digital Humanities on the Semantic Web: from Infrastructure to Practical Applications, Data Analysis, AI-based Knowledge Discovery, and a Web of Wisdom（フィンランドAalto大学 Eero Hyvönen）

「歴史情報学」の基盤システムの紹介と歴史知識情報抽出の検討（後藤真）

歴史資料情報の高度化（川邊咲子）

近世日本の家譜史料データの構造化に向けて—一時空間・人名表現の認識と地名の座標推定—（京都大学学術情報メディアセンター 山下耕平）

デジタル時代の人文データ基盤に必要なこと～「残す」ことについて考える～（人間文化研究機構 金甫榮）

コメント（京都大学名誉教授 原正一郎）

ディスカッション（Eero Hyvönen, 後藤真, 川邊咲子, 山下耕平, 金甫榮, 原正一郎）

クロージング

5. 研究組織（◎は研究代表者）

阿兄 雄之 東京国立博物館学芸企画部博物館情報課情報管理室・室長

天野 真志 本館研究部・准教授

大井 将生 同志社大学文化情報学部・准教授

大向 一輝 東京大学大学院人文社会系研究科・准教授

小倉 慈司 青山学院大学文学部・教授

加納 靖之 東京大学地震研究所附属地震予知研究センター・准教授

亀田 堯宙 人間文化研究機構人間文化研究開発センター・研究員

川邊 咲子 本館・外来研究員

川村 清志 本館研究部民俗研究系・准教授

菊 凛太郎 与論民俗村・学芸員

北岡タマ子 人間文化研究機構人間文化研究開発センター・研究員

工藤 航平 本館研究部歴史研究系・准教授

久留島 浩 本館・名誉教授

小風 尚樹 本館研究部・特任准教授

◎後藤 真 本館研究部・准教授

佐藤 琴 山形大学学士課程基盤教育院・教授

関野 樹 国際日本文化研究センター総合情報発信室・教授

高科 真紀 国立民族学博物館人類基礎理論研究部・助教

高田 良宏 金沢大学学術メディア創成センター・准教授

高橋 和孝 奥州市教育委員会事務局歴史遺産課企画管理係・主任学芸員

高橋 そよ 琉球大学人文社会学部・准教授

徳竹 剛 福島大学行政政策学類・准教授

中川奈津子 九州大学大学院人文科学研究院・准教授

中村 覚 東京大学史料編纂所附属前近代日本史情報国際センター・助教

橋本 雄太 本館研究部・准教授

原 正一郎 京都大学東南アジア地域研究研究所・名誉教授

伏見 岳人 東北大学大学院法学研究科・教授

松岡 弘之 岡山大学学術研究院社会文化科学学域・准教授

三上 喜孝 本館研究部・教授

三村 昌司 早稲田大学教育・総合科学学術院教育学部・教授
 山内 利秋 九州医療科学大学薬学部・准教授
 山田 太造 東京大学史料編纂所附属史科学協創センター・教授
 吉賀 夏子 大阪大学大学院人文学研究科・准教授

(2) 広領域連携型基幹研究プロジェクト

(2)-1 横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して（主導機関：国立歴史民俗博物館，国立民族学博物館） フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発 2022～2027年度 （研究代表者 川村 清志）

1. 目的

本プロジェクトは、人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」の歴博ユニットとして組織された。本研究会では、地域の知恵や歴史が凝縮された伝統文化を取り入れ、持続可能で多様性にみちた社会のあり方を、保存科学，人類学，民俗学，歴史学，生態学，言語学などの横断的な領域から検証し，社会／文化の創発に積極的に参与することを目指している。

ここで本研究が対象とする地域文化とは，聞き取りや参与観察によって見聞きできる民俗文化だけではなく，文書・画像資料やデジタル資料を含めて同時代において潜在的に文化資源たりうる全ての領域を想定する。それらの文化資源を再発見したり，地域を活性化していこうとする実践と，そこに関わる研究者や学芸員などの営みを対象化しつつ，一連の文化の構築に協働で参画したいと考える。この作業の基盤として，個人や地域社会が有する文化資源のアーカイブ化を目指し，基礎資料の公開と活用への道筋を具体的に描くことを目的としている。

次に現代の文化表象の特質として，地域文化を「文化財」や「文化遺産」へと格付ける言説と社会制度を捉え直す。とりわけ，「世界遺産」や「無形文化遺産」などの世界システムと連携する文化をめぐるポリティックスが，個々の地域社会をどのように再編成していくかに着目する。研究会では，これらの言説空間を文化ナショナリズムや「伝統の創出論」に還元するのではなく，運動の総体を現代における文化の生成過程として客体化しつつ，そこで生まれる地域との往還や個々の主体的な営み，そこに関与する知識人の役割について検証していく。博物館や大学という文化の再編に関わらざるを得ない立場からの創造的な展開を目指していきたい。

第3に現代の地域文化のもう一つの特徴として，アートによる地域文化の再表象に注目し，実践的なアーティストとの協働作業を構想したい。アートという「外部の価値観」を持ち込む営みが，地域の文化資源を再発見し，地域の人たちとコラボレーションしていく可能性を検証する。アートをめぐる実践は，文化資源をめぐる言説とは一線を画するようでありながら，地域社会の現場では，しばしば同じ対象をターゲットとして展開したり，観光・開発といった「活用」の場においても相似的な表象を示すことがある。とりわけ，博物館・美術館に所属する立場からも，両者の差異と相同性について改めて論じる必要があるだろう。

2. 今年度の研究計画

2025（令和7）年度

- ① 研究会，3回程度（発表者：毎回，2～3人）の実施：7月・12月・1月
- ② 輪島市，穴水市，珠洲市において文化財レスキューならびに能登における無形文化財の現況調査の実施
- ③ 2024年能登半島地震に関する，珠洲市被災地における映像製作ならびにフォーラムでの発表
- ④ 地域の博物館との連携について，各所学芸員と研究会の開催

3. 今年度の研究経過

プロジェクトの開始4年目にあたる今年度は，石川県珠洲市との包括的な連携・協力を推進するための協定と研究計画にもとづき，2024年1月に発災した能登半島地震後の輪島市，穴水市，珠洲市において文化財レスキューを継続した。さらに「能登半島地震後の地域社会での文化的支援と保全のための活動」として2025年9月～3月までの事業予算を新たに申請し，地域社会における有形文化を中心とした地域文化の保全と継承，さらには再創のための拠点を確保するため，地域から寄贈を受けた生活用具の整理を行ったほか，地域での文化財レスキュー活動，復旧・復興活動についての研究映像を制作した。この過程で，珠洲市大谷地区で寄贈を受けた民具を用いたワークショップを実施し，地域内外の参加者をを募りつつ，地域文化の共創活動を実施した。また，東京文化財研究所か

らの依頼により、当該地域の無形文化財の現況調査も本格的に始動させた。

特に珠洲市における文化財レスキュー活動に関しては、国立民族学博物館との共同作業による研究映像『珠洲市の文化財レスキュー—能登半島地震と文化財』と、研究者・地域社会・アーティストとの連携作業による地域文化の共創活動についての研究映像『能登半島地震 復興の行方』の撮影・編集・製作を行い、国立歴史民俗博物館において第47回 歴博映画の会「能登半島地震・復興の行方」（2026年1月17日）で公開され、当日は80名の参加者があった。

また宮城県気仙沼市では、同市との包括的な連携・協力を推進するための協定にもとづく活動を継続しており、2024年9月に開催されたリアス・アーク美術館の開館30周年の記念シンポジウムでの成果発信として、『強く優しく美しいまちをデザインする～過去・現在・未来をつなぐ関係構築のために～』（山内宏泰・谷口大造・関口正洋・川村清志・志田淳・白田亜悠著、川村清志・真柄侑・萱岡雅光編、2026年2月）を刊行した。

そして地域の博物館の連携として、2025年12月に「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」研究会を開催し、気仙沼市のリアス・アーク美術館、香川県立ミュージアム、愛媛県の佐田岬半島ミュージアムの各学芸員より、県レベルあるいは基礎自治体レベルの博物館が抱える課題と実践、地域文化の共創について共有、議論を行った。

4. 今年度の研究成果

書籍・論文

胡 光「四国遍路研究の現在地」『山岳修験』76号、pp.23-38、岩田書院、2025年11月

胡 光『四国へんろ考—四国の歴史と文化—』、創風出版社、2026年3月

愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター（センター長：胡 光）編『四国遍路と世界の巡礼』第11号、愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター、2026年3月

大本 敬久「古代・中世における宇和海沿岸部の漁業」『よど』26号、pp.12-20、予土歴史文化研究会、2025年5月

大本 敬久「西日本豪雨からの復興と地域文化の再構築」『地域の歴史・文化とアーカイブズ～博物館の活動を中心に～』、国立歴史民俗博物館、pp.28-49、2025年6月

大本 敬久「災害と文化遺産—文化財レスキューと復興への活用—」『東温史談』21号、東温史談会、2026年3月

大本 敬久「風早出身・別当大師光定と弘法大師空海」『風早』95号、風早歴史文化研究会、2026年3月

大本 敬久「四国中央市の災害史」『宇摩史談』115号、宇摩史談会、2026年3月

川村 清志「祭りがデザインするコミュニティ・イメージ」『強く優しく美しいまちをデザインする～過去・現在・未来をつなぐ関係構築のために～』、pp.40-50、国立歴史民俗博物館、2026年3月

川村 清志、高科 真紀、西村慎太郎、真柄 侑編、『地域の歴史・文化とアーカイブズ～博物館の活動を中心に～』、国立歴史民俗博物館、2025年6月

川村 清志「残されたモノたちとの対話—STM（スズ・シアター・ミュージアム）分館での保全作業にむけて」『ネットTAM』<https://www.nettam.jp/society/yasserproject/2/>

佐々木重洋「人間と人形、そのあわい—序文—」『民族藝術学会誌 arts/』Vol.42、pp.25-31、民族藝術学会、2026年3月

佐々木重洋「巻頭特集「人間と人形、そのあわい」」『民族藝術学会誌 arts/』Vol.42、pp.7-97、民族藝術学会、2026年3月

佐々木重洋・井上宗一郎・山中海瑠・犬山市史編さん委員会専門部会『犬山市史 資料編』の民俗部門（祭礼等）執筆箇所29項目入稿済み（他の項目と調整中）、『犬山市史 平成篇』、編集中

島立 理子「千葉県立中央博物館の画像資料の整理と公開」『地域の歴史・文化とアーカイブズ～博物館の活動を中心に～』、国立歴史民俗博物館、pp.72-87、2025年6月

真柄 侑「農業における人と機械—岩手県紫波町志和地区における「農機クリニック」と治して使う農業機械を事例に—」『民具マンスリー』58巻10号、pp.1-8、神奈川大学日本常民文化研究所、2026年1月

田井 静明「コラム 変化する民俗資料コレクションの価値—瀬戸内海歴史民俗資料館の今—」金山喜昭編『博物館収蔵コレクションの新たな価値創造—公開・活用の可能性を探る』、雄山閣出版、2026年1月

山内 宏泰・谷口 大造・関口 正洋・川村 清志・志田 淳・白田 亜悠『強く優しく美しいまちをデザインする～過去・現在・未来をつなぐ関係構築のために～』、国立歴史民俗博物館、2026年3月

口頭発表

- 内山 大介「大災害時代における地域文化と博物館—震災被災地での経験から—」, 淑徳大学歴史学会特別講演会, 淑徳大学東京キャンパス, 2025年11月
- 内山 大介「フィールドワーク教育と民俗文化の継承—文化財レスキューと地域実習の実践から—」, 歴史文化資料保全首都圏大学協議会「地域歴史文化継承拠点としての大学の役割を考える」, 國學院大學栃木学園教育センター, 2025年11月
- 胡 光「四国遍路の世界遺産登録に向けて」, 国際シンポジウム四国遍路を世界遺産に, 香川県立ミュージアム, 2025年2月
- 胡 光「四国遍路とサンティアゴ巡礼」, 四国遍路・世界の巡礼研究センター公開シンポジウム, 愛媛大学, 2025年4月
- 胡 光「四国遍路の世界」, 日本磁気学会, 愛媛大学, 2025年9月
- 胡 光「四国遍路の世界遺産化に向けた取り組み」, 世界遺産研究協議会, 東京文化財研究所, 2025年12月
- 大本 敬久「災害と文化遺産—文化財レスキューと復興への活用—」, 東温史談会, 東温市中央港民会, 2025年4月
- 大本 敬久「博物館・大学の地域連携活動におけるまち歩きの可能性」, 現代民俗学会「公開シンポジウム「民俗学×まち歩き:「一緒に調べる」ことの協働性・創造性・権力性」, 立教大学, 2025年5月
- 大本 敬久「愛媛県南予地域の急傾斜地農業の成立と展開」, 2025年棚田学会現地見学会, 宇和島市歴史資料館, 2025年6月
- 大本 敬久「四国中央市の災害史—地震・水害—」, 宇摩史談会8月例会講演会, 四国中央市市民ホール, 2025年8月
- 大本 敬久「災害史研究成果の活用と文化財防災ネットワークの構築—愛媛県の事例—」, 人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」歴博拠点2025年度研究会, 三重県総合博物館, 2025年9月
- 大本 敬久「宝永・安政・昭和南海地震における道後温泉（愛媛県）の湧出停止・再開経過」, 第42回歴史地震研究会豊岡大会, 芸術文化観光専門職大学, 2025年9月
- 大本 敬久「南予における二地域居住の可能性—「移動」・「定住」の歴史・風土・未来—」, 南予フォーラム 2025special, 宇和島市役所, 2025年11月
- 大本 敬久「人口減少社会における祭り・行事の継承—愛媛県の事例—」, 四国民俗学会例会, 東温市中央公民館, 2025年11月
- 大本 敬久「地域協働と合意形成による歴史・文化の主體的継承—愛媛県の事例—」, 東京歴史科学研究会, オンライン, 2026年2月
- 兼城 糸絵「『〈文化的でローカルな記憶の器〉としての芸術大学アーカイブ』へのコメント」, 日蘭交流国際セミナー「文化の継承の在り方を考える—地域と協働したオランダと日本の事例」, 国立民族学博物館, 2025年10月
- 萱岡 雅光「美術館×民俗×地域社会—地方美術館の民俗担当として—」, 「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」研究会令和7年度第2回研究会, 国立歴史民俗博物館, 2025年12月
- 川村 清志「地域社会の自己表象としての故郷とその重層性—輪島市七浦小学校の事例から」日本民俗学会第77回年会, アマホームPLAZA, 2025年11月
- 川村 清志「ターミナルケアとしての文化財レスキュー—能登半島地震の被災地の事例より—」, 京都民俗学会第44回
- 年次研究大会, 佛教大学, 2025年12月
- 川村 清志「民俗映像のアーカイブズは可能か?—作品と資料, 全体と部分の相剋のロンド—」, 現代民俗学会研究会, 東京大学, 2025年12月
- 佐々木重洋, 「人間と人形, そのあわい」, 第41回民族芸術学会大会, 名古屋大学, 2025年4月
- 佐々木重洋, 「「はな」を継承すること—奥三河, 花祭と地域社会—」, 愛・地球博20周年特別企画 未来共想フォーラムⅡ「まつりの力と絆」, 愛・地球博記念公園地球市民交流センター, 2025年5月
- 佐藤 知久「『〈文化的でローカルな記憶の器〉としての芸術大学アーカイブ』, 日蘭交流国際セミナー「文化の継承の在り方を考える—地域と協働したオランダと日本の事例」, 国立民族学博物館, 2025年10月
- 高科 真紀「『島の宝』になった写真—阿波根昌鴻写真と伊江島の記憶」, 国立民族学博物館第562回友の会講演会, 国立民族学博物館/オンライン, 2025年7月
- 高科 真紀「『登録有形文化財建造物の指定に向けた京田辺市「伊東家住宅」の調査活動』へのコメント」, 日蘭交流国際セミナー「文化の継承の在り方を考える—地域と協働したオランダと日本の事例」, 国立民族学博物館,

2025年10月

真柄 侑「近代産業の導入と地域の変化—沖永良部島におけるユリ栽培の展開を通して—」, 京都民俗学会第44回年次研究大会, 佛教大学, 2025年12月

真柄 侑「海を越えるエラブの生業—沖永良部島和泊町における花卉・サトウキビ生産を中心に—」(グループ発表: アンチ・ジオポリティクスとしての民俗学に向けて —地方と南島をめぐる地政学的想像力—), 日本民俗学会第77回年会, アマホームPLAZA, 2025年11月2日

真柄 侑「二つの国際芸術祭巡見を通して」, 「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」令和7年度第3回研究会, 国立歴史民俗博物館, 2026年1月

研究映像

川村 清志(撮影・編集・製作)『珠洲市の文化財レスキュー—能登半島地震と文化財』, 国立歴史民俗博物館, 2026年1月公開

川村 清志(撮影・編集・製作)『能登半島地震 復興の行方』, 国立歴史民俗博物館, 2026年1月公開

5. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

- 天野 真志 本館研究部・准教授
- 磯本 宏紀 徳島県立博物館・上席学芸員
- 上野 祥史 本館研究部考古研究系・准教授
- 内田 順子 本館研究部民俗研究系・教授
- 内山 大介 淑徳大学地域創生学部・教授
- 胡 光 愛媛大学法文学部・教授
- 大本 敬久 愛媛大学地域協働推進機構・准教授
- 門田 岳久 立教大学観光学部・教授
- 兼城 糸絵 鹿児島大学法文学部・准教授
- 萱岡 雅光 リアス・アーク美術館・主任学芸員
- 川邊 咲子 本館・外来研究員
- ◎川村 清志 本館研究部民俗研究系・准教授
- 工藤 航平 本館研究部歴史研究系・准教授
- 佐々木重洋 名古屋大学大学院人文学研究科・教授
- 佐藤 知久 京都市立芸術大学芸術資源研究センター・教授
- 島立 理子 千葉県立中央博物館・資料管理研究科長
- 田井 静明 瀬戸内海歴史民俗資料館・専門職員
- 高科 真紀 国立民族学博物館人類基礎理論研究部・助教
- 蓮沼 素子 大仙市役所総務部総務課アーカイブズ・主幹
- 日高 真吾 国立民族学博物館学術資源研究開発センター・教授
- 真柄 侑 本館研究部・特任助教
- 皆川 嘉博 秋田公立美術大学美術学部・教授
- 山内 宏泰 リアス・アーク美術館・館長
- 山川 志典 国立民族学博物館・外来研究員
- 山田 慎也 本館研究部民俗研究・教授

(2)-2 人新世に至る, モノを通した自然と人間の相互作用に関する研究 (主導機関: 総合地球環境学研究所) 同位体による年代・古気候・交流史研究 2022~2027年度 (研究代表者 坂本 稔)

1. 目的

自然の中を生きる人類は, 環境中の多岐にわたる資源を利用して生活してきた。資源の中には, 食料資源となり身体に刻まれるものと, 人間により道具などに加工され利用される資源がある。古代においては, 身近な環境中か

ら得られた資源を利用し、食物資源や生活に必要な物品を得ていた。その後、交易を通して資源の移動が行われ、より広域から得られる資源を利用するようになった。産業革命を経て、化石燃料という時間軸をまたぐ資源を利用するようになり、現代ではグローバルな空間軸をまたぐ資源を利用している。

本研究では、身体や物質に含まれる元素の濃度および同位体比を分析することで、自然と人間の関わりについて時間軸と空間軸を横断する研究を行い、物質文化から見た現代の地球環境問題につながる人間の資源利用形態の変容について明らかにする。自然における元素の同位体分布は、地質および生態系の動態を理解することが必要である。資源の利用や移動を解析する手法としては、食料資源や水資源を象徴する身体に含まれる軽元素（炭素・窒素・硫黄・水素・酸素など）と、地質由来資源を象徴する身体や器物中に含まれる重元素（ストロンチウム・鉛・ネオジミウム・鉄・マグネシウム・亜鉛など）があるが、これらに含まれる同位体情報を用いて、自然と人間の相互作用を研究することができる。本研究においては、完新世以降の人間のあゆみを元にし、人新世（人類世）と称される現代における資源利用について考え、地球環境問題の根源となる自然と人間の相互作用を扱う新たな人間文化研究のプラットフォームを構築する。

本研究は、総合地球環境学研究所を主導機関とし、国立歴史民俗博物館を機構内参画機関とする。また、東京大学総合研究博物館をはじめとする機構外の機関・部局とも連携して研究にあたる。本研究においては、「テーマ研究」として国立民族学博物館との共同研究も合わせた「古代アンデス研究」を取り上げる。さらに、現在の共同メンバーだけでは想定できない幅広い研究を行うために、公募研究を行う。公募においては機構内を優先するが、機構内にとどまらず、大学共同利用機関法人の役割を果たすために機構外からも受け付ける。

2. 今年度の研究計画

歴博ユニット「同位体による年代・古気候・交流史研究」においては、時間軸に沿った高解像度同位体分析を実施し、緻密な時空間分布を人類史研究に応用する。酸素同位体比年輪年代法を充実させ、標準年輪曲線並びに炭素14年代法における校正曲線の整備に充てる。大気中の¹⁴C濃度の地域差と微細変動を解明し、炭素14年代測定の高精度化を実現する。食性および海産資源の見積に必要となる安定同位体比分析と各地の陸・海産物の炭素14年代測定を進め、人骨を含む動物資源の年代測定に資する。

データベースとしては「遺跡発掘調査報告書放射性炭素年代測定データベース」は元報告書の検索を目的としているが、報告書に掲載があれば炭素の安定同位体比、及び奈良文化財研究所の全国遺跡報告総覧に基づく位置情報が入力される。継続的なデータの投入を進め、アイソスケープへの展開やローカルリザーバー効果の評価に応用できないか、検討を進める。

3. 今年度の研究経過

過去の激甚災害の年代決定に関する研究に関連し、東京都伊豆大島ミュージアムジオノス駐車場埋没木、静岡県小山町須川橋埋没木、山形県真室川町埋没木、鹿児島県屋久島宮之浦川埋没木のサンプリング調査を実施した。資料は年輪計測の上、酸素同位体比年輪年代測定と炭素14年代測定を予定する。

2025年12月13日、本プロジェクトの第4回人・モノ・自然シンポジウム「同位体が拓く自然史・人間史」を、歴博ガイダンスルームで開催した。自然科学と人文科学、双方の分野から研究成果を共有し、同位体による歴史研究の可能性をさぐる機会となった。

4. 今年度の研究成果

完新世における世界最大の噴火として知られる鬼界アカホヤ噴火は、南日本の縄文文化に壊滅的な影響を与えたとされる。その年代を炭素14-スパイクマッチ法を用いて誤差0年で判定することを目的に採取した鹿児島県屋久島宮之浦川埋没木は、試験的な炭素14年代測定により、資料は紀元前5,000年代の炭素14スパイクを含む可能性があることが示唆された。今後、年輪1層ずつの炭素14年代測定からスパイクを検出し、噴火年代とされる樹皮直下の年代を判定する計画である。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

工藤雄一郎 学習院女子大学国際文化交流学部・教授
 齋藤 努 本館研究部情報資料研究系・教授
 ◎坂本 稔 本館研究部情報資料研究系・教授
 篠崎 鉄哉 東京大学大学院理学系研究科・特任研究員
 瀧上 舞 国立科学博物館生命史研究部・研究員

中塚 武 名古屋大学大学院環境学研究科・教授
 ○箱崎 真隆 本館研究部情報資料研究系・准教授
 平峰玲緒奈 本館・プロジェクト研究員

(2)-3 異分野融合による総合書物学の拡張的研究 (主導機関：国文学研究資料館) 延喜式のデジタル技術による汎用化 2022～2027年度 (研究代表者 三上 喜孝)

1. 目的

多様な情報を有し、「古代の百科全書」とも言える『延喜式』について、国際標準に準拠した写本画像・校訂本文・現代語訳・英訳が連動するデータベース「デジタル延喜式」を作成・発信し、日本古代史のみならず東アジア史や科学技術史等、様々な分野からの『延喜式』利活用を目指す。

本共同研究は、第三期「異分野融合による「総合書物学」の構築」の継続プロジェクトである「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」の歴博ユニットである。同プロジェクトは第四期では特に人文情報学に重点を置いて進めることとなった。そこで本ユニットでは『延喜式』の校訂本文作成・現代語訳・英訳に重点を絞り、TEIによるネット公開を第一の目標に掲げることとする。

構成メンバーは今期は若手中心とし、史料を写本にまで遡って検討したり、新たな史料を発掘する能力を持つ研究者の育成も心がけることにする。あわせて法政大学国際日本学研究所と連携して延喜式関係論文目録の充実も図っていく。『延喜式』をもとにした異分野研究についても進めていきたい。

なお、校訂本文は全巻のネット公開、現代語訳は4分の1程度、英訳については10巻程度の公開を目標とする。

2. 今年度の研究計画

本文検討・英訳・TEIの分科会を開催し、校訂本文作成、英訳作業を進める。今年度は校訂本文を6巻程度、現代語訳を2巻程度ネット公開することとする。またネット公開システム「デジタル延喜式」を改良し、延喜式関係論文目録データベースのデータ増補を進める。延喜式を用いた比較史的研究をテーマとして公開研究集会を開催する。

3. 今年度の研究経過

研究成果発信等に関わるものについては「今年度の研究成果」欄に譲り省略。

7月20日 本文校訂検討会 於歴博
 9月8日 資料調査 國學院大學図書館
 9月9日 鹿角・鹿皮研究会開催 於歴博・Zoom併用
 12月23日 校訂本文検討会 於歴博
 1月21日 資料調査 東京大学法学部研究室図書館
 2月10日 資料調査 東京大学総合図書館
 2月20日 TEI検討会 於歴博・Zoom併用
 3月2日 資料調査 慶應義塾大学三田メディアセンター
 3月11日 総合書物学3館合同会議 於国文学研究資料館
 3月19日 資料調査 慶應義塾大学三田メディアセンター
 3月26日 資料調査 静嘉堂文庫

4. 今年度の研究成果

5月17日 第138回人文科学とコンピュータ研究発表会 於慶應義塾大学三田キャンパス
 本プロジェクトより5名登壇
 渡邊美紗子・戸村 美月・三輪 仁美・後藤 真・三上 喜孝（・永崎 研宣）
 「歴史資料のTEIマークアップ：『延喜式』の校異注記述と固有名詞の一括処理」
 9月2日 デジタル延喜式更新 巻42左右京職・東西市司校訂文、巻32大膳職上現代語訳を新規公開
 12月16日 延喜式関係論文目録DB増補公開（第9次）

- 既公開データ補正のほか、9,334件を追加して計155,055件のデータを公開
- 2月23日 公開研究集会「古代資料からみる鹿—『延喜式』を中心に—」, 於歴博・Zoom併用 参加者数61名
 山崎 健「古代における鹿皮の利用と獲得」
 西川 明彦「正倉院宝物にみる鹿の利用」
 西宮 秀紀「古代史資料から見た鹿と神祇祭祀」
 鶴島 博和「中世イングランドにおける鹿の利用と社会的儀礼」(コメント)
 三舟 隆之「食用としての鹿」(コメント)
- 3月31日 デジタル延喜式更新 巻23民部省上, 巻27主税寮下校訂文を新規公開
 xmlファイル公開 用語検索・地図機能追加

〔論考〕

- 仁藤 敦史,『古代王権の成立と展開』, 八木書店, 2025/5/10, ISBN 978-4-8406-2606-4, 528p.
- 小川 宏和(井口 恵一郎, 村瀬 偉紀と共著),「平安時代の宇治川の網代で生業として漁獲された氷魚の実相推定」,『野生生物と社会』13, pp.27-32, 2025/5/23
- 小倉 慈司,「古代史研究と典籍研究—『延喜式』を中心として—」,『九州史学』200, pp.124-132, 2025/5/30
- 小倉 慈司(小林 和貴・能城 修一と共著),「金漆採取の候補植物であるウコギ科3種の樹皮組織の構造」,『植生史研究』33-2, pp.57-63, 2025/9/25
- 仁藤 敦史,「7世紀における古代国家形成論—理論と実証の距離—」,『歴史学研究』1067, pp.2-10, 2025/10/25
- 前野 智哉,「『延喜式』巻一の標注—「弘仁式」「貞観式」の神祇祭祀規定に関する新史料—」,『古代文化』77-3, pp.23-42, 2025/12/30
- 三舟 隆之,「日本古代の酒造の諸問題とその再現への試み」,『群馬文化』356, pp.5-13, 2025/12/30
- 小川 宏和,「伊弉屯倉設置の前史」,篠川 賢・大川原竜一・鈴木 正信編『国造制・屯倉制の研究』, 八木書店, pp.296-297, 2026/1/10, ISBN 978-4-8406-2654-5
- 小倉 慈司,「摂関期における『延喜式』の意義についての試論」, pp.475-498
- 神戸 航介,「摂関期の行事所」, pp.159-184
- 杉田 建斗,「御体御卜と天皇親祭・官社制」, pp.301-330
- 以上, 大津透先生退職記念論文集刊行委員会編『古代天皇制と政治・儀礼』, 吉川弘文館, 2026/2/27, ISBN 978-4-6420-4691-6
- 三舟 隆之,「古代の神饌の再現—鰻・酒・堅魚を中心として」,『皇學館史学』41, pp.117-147, 2026/3/30
- 三舟 隆之,「古代の食の再現の試み」,『東海史学』60, pp.1-13, 2026/3/30

〔口頭報告等〕

- 仁藤 敦史,「7世紀における国家形成論」, 駒澤大学, 2025年度歴史学研究会大会, 2025/5/24
- 三舟 隆之,「古代の食の再現の試み」, 東海大学, 東海大学史学会総会・大会, 2025/6/7
- 三舟 隆之,「日本古代の酒造の諸問題とその再現への試み」, 前橋国際大学, 群馬県地域文化研究協議会研究大会, 2025/6/15
- 三舟 隆之,「壺Gは果たして堅魚煎汁容器なのか?」, 國學院大學, 第66回考古学研究会東京例会, 2025/7/19
- 清武 雄二(荻野目 望, 石崎 早苗, 花森 功仁子と共同),「古代, 堅魚(かつお)・煮堅魚(にかつお)の再現試験」, 立命館大学びわこくさつキャンパス, 和食文化学会第8回研究大会, 2025/8/10
- 小川 宏和,「古代の鵜飼と鷹飼」, 国立民族学博物館, 国立民族学博物館共同研究「日本人にとって鳥とは何か」共同研究会, 2025/10/25
- 石川 智士,「持続可能な水産資源管理と海業」(基調講演), 認定NPO法人ソーシャルデザインセンター淡路, 淡路島でこれからの暮らしを考えるフォーラム, 2025/10/25
- 三舟 隆之,「古代の神饌の再現—鰻・酒・堅魚を中心として」, 皇學館大学, 皇學館大学史学会, 2025/11/6
- 前野 智哉,「律令制下における負名氏としての中臣氏—大中臣祭主家成立前史—」, 東京大学, 史学会第123回大会日本史古代史部会, 2025/11/9
- 石川 智士,「地域活性化と環境保全」, 独立行政法人国立文化財機構, 「無形文化遺産と生態系に関する予備調査」第2回ワーキンググループ会合, 2025/12/3
- 石川 智士,「地域資源を地域で活かす」, 一般社団法人津和野まちとぶんか創造センター, 2025/12/5
- 西川 明彦,「失われた塗料を求めて 古代の金漆ミステリー」, 当日発表者(登壇者), 京都府立京都学・歴彩館,

明日の京都 文化遺産プラットフォームトークイベント, 2026/3/28

5. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

- 石川 智士 京都府立大学農学食科学部・教授
 稲田奈津子 東京大学史料編纂所古代史料部門・准教授
 井上 正望 埼玉学園大学人間学部・講師
 小川 宏和 千葉県立中央博物館大利根分館・研究員
 小口 雅史 法政大学文学部・教授
 小倉 慈司 青山学院大学文学部・教授
 神戸 航介 本館研究部・准教授
 清武 雄二 葛飾区郷土と天文の博物館・歴史文化財専門調査員
 小風 尚樹 本館研究部・特任准教授
 ○後藤 真 本館研究部・准教授
 杉田 建斗 東京大学大学院人文社会系研究科・助教
 鶴島 博和 熊本大学・名誉教授
 中村 覚 東京大学史料編纂所附属前近代日本史情報国際センター・助教
 西川 明彦 宮内庁正倉院事務所・調査室員
 仁藤 敦史 本館・名誉教授
 古田 一史 東京大学史料編纂所古代史料部門・助教
 ◎三上 喜孝 本館研究部・教授
 三舟 隆之 立教大学文学部・特任教授
 三輪 仁美 本館研究部・プロジェクト研究員
 山口 えり 広島市立大学国際学部・准教授
 余語 琢磨 早稲田大学人間科学学術院人間科学部・准教授
 Alessandro Poletto セントルイス・ワシントン大学・専任講師
 Joan R. Piggott 南カリフォルニア大学・教授
 前野 智哉 本館研究部・RA
 篠崎 尚子 本館・資料整理等補助員
 戸村 美月 本館・資料整理等補助員
 中島 皓輝 本館・資料整理等補助員
 渡邊美紗子 本館・資料整理等補助員

(3) ネットワーク型基幹研究プロジェクト 歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業 2022～2027年度 (研究代表者 天野 真志)

1. 目的

本事業は、機構、東北大学及び神戸大学（以下「連携3機関」という）が事業の中核となり、日本各地の大学や地域に設立されている「資料ネット」等と連携して、災害時におけるレスキュー活動を含む歴史文化資料の保存・継承を実施する相互支援体制を構築し、地域の歴史文化資料調査・保存研究活動を軸とした全国広域ネットワークを構築するとともに、歴史文化研究分野における教育・人材育成促進に向けて環境整備を行う。また、これまで連携3機関が中核となって推進した高度な研究蓄積と多様なネットワークを活かして新たな地域社会の歴史文化研究を推進し、その歴史文化の基盤を、研究者だけでなく地域全体で認識する。併せて、資料保全の実践を通して地域社会の課題を抽出し、多様な資料の持続的な保存・継承・活用に向けた基盤構築を進め、歴史文化の継承と創成を担う研究・教育推進拠点を形成する。ネットワークを活用した研究成果を元に、全国の資料ネット等と連携して自治体や社会との協働・共創を推進し、地域と歴史文化の新たな関係を提起する。さらに、情報発信として展示活動を実施するとともに機構や機構内機関の情報基盤を中核としたデータ連携を促進し、新たな地域研究を担うプラットフォームを構築する。これにより、地域歴史文化の構築研究に資するとともに、資料保全の新たなあり方や、大学共同利用機関法人として、それらの地域文化基盤を研究者と地域で共有する事業へとつなげていく。さらに、研

研究成果の教育活動への活用を進めるとともに、地域を軸とした成果の発信を推進する。

2. 今年度の研究計画

各拠点で形成した大学・資料ネット等とのネットワークを基盤とし、地域における歴史文化の基盤を、研究者だけでなく地域全体で再認識する。これにより、地域歴史文化の構築研究に資するとともに、大学共同利用機関法人として、資料保全のあり方や、それらの地域文化基盤を研究者と地域で共有する事業へとつなげていく。さらに、研究成果の教育活動への活用を進めるとともに、地域を軸とした成果の発信を推進する。

本年度は、全国の資料ネットとの連携強化に向けて「全国史料ネット研究交流集会」を高知県で開催するとともに、大学等との連携・協議を進めるための「地域歴史文化大学フォーラム」を開催する。特に、南海トラフ地震を始め近い将来発生が予測される大規模災害への対応に向けて、ネットワークを活用した対策を協議するための研究会を開催する。また、2024年1月1日に発生した能登半島地震を始め、各地で発生した災害で救済された被災資料への対応として、国立文化財機構文化財防災センターや被災地大学、資料ネット等との連携を通して地域資料の保存・継承を進める。

継承された資料の地域社会における意義を検討するシンポジウムを開催し、地域歴史文化のあり方を議論するとともに、資料保全をとりまく課題抽出や問題解決にむけた各種研究会・ワークショップを開催し、地域歴史文化資料の保存・継承のための基盤整備を進める。

さらに、各拠点が主体となって首都圏・北日本・西日本各地域の歴史文化資料をとりまく諸状況を協議し、大学や博物館、資料ネット等と連携した地域研究・教育基盤の構築にむけた議論を進める。

3. 今年度の研究経過

①研究会・シンポジウム等

全国の資料ネット等と連携基盤を構築・運営するための全国資料ネット研究交流集会（1月）、各地の大学等との連携強化をはかるための地域歴史文化大学フォーラム（3月）を実施した。さらに、9月にプロジェクト研究会を三重県総合博物館で開催するとともに、泉大津市立図書館にて「地域歴史文化継承拠点としての大学の役割を考える」（1月）を共催として開催した。また首都圏大学関係者との連携協議を目的とした「歴史文化資料保全首都圏大学協議会」を11月に國學院大學栃木短期大学にて実施した。これら研究会・シンポジウムは計5回である。

②ワークショップ等

泉大津市立図書館と連携した公開講座「地域の歴史・文化再発見講座」を毎月実施し（12回）、山形大学と連携して山形文化遺産防災ネットワーク研修会を共催事業として実施した（5月、11月、3月）。また、防災関係者との連携および防災活動における本事業の役割を検討するために「第9回防災推進国民大会」（9月）に出展した。さらに、博物館関係団体と連携して自治体職員および学芸員等向けのワークショップを奈良（12月）・高知（3月）にて開催するとともに、学生や地域住民向けのワークショップも新潟大学との連携で実施し、神戸大学とも連携したワークショップも開始した（3月）。以上のワークショップ等は計20回である。

③調査活動

昨年度に引き続き、2024年1月に発生した能登半島地震に対して、被災地域関係者および文化財防災センターやいしかわ歴史資料保全ネットワーク等と連携して対応し、救済活動および技術的支援を実施した。また、2019年台風19号で被災した川崎市市民ミュージアム（神奈川県川崎市）被災古文書の救出・応急処置作業を支援した。同台風で被害を受けた資料の救済活動を実施する長野市立博物館に対しても応急処置の支援・技術指導をおこなった。2018年に発生した西日本豪雨により被害を受けた被災古文書等の持続的支援として広島県立文書館で技術指導をおこなった（1月）。

成田空港新滑走路の整備にともない区画整理が進められる千葉県芝山町等に対して、同地域に所在する多様な歴史資料の調査・記録化を進め、千葉大学・長野大学教員等で構成される北総地域資料・文化財保全ネットワークの取り組みを支援した。

2015年に関東・東北豪雨で被災した個人所蔵資料群の恒久的な保存・継承に向け、応急処置を終えた資料の本格修理を実施し、修理を終えた資料を通して、地域歴史文化の発信と継承に向けた取り組みを推進する基礎作りを完了させた。

④教育活動

福島大学行政政策学類が実施する「コア・アクティブ科目」に協力して授業を実施し、山形大学人文社会科学部課題演習とも連携して共催授業を実施することで、各地の大学教育における資料保存・継承の実務とその意義について解説をおこなった。

○研究会・シンポジウム等の開催

歴史文化NW歴博拠点「共創的資料保存の構築に向けたネットワーク研究拠点」第4回研究会（2025年9月3日・4日 於：三重県総合博物館）

第12回全国史料ネット研究交流集会 in 高知（2026年1月11日・12日 於：オーテピア・オンライン）

地域歴史文化大学フォーラム（2026年2月21日 於：オンライン）

歴史文化資料保全首都圏大学協議会（2025年11月29日 於：國學院大學栃木学園教育センター）

4. 今年度の研究成果

1) 研究成果の概要

これまで構築したネットワークを軸に、各地域における歴史文化継承の取り組みを展開し、ネットワークの社会実装に加えて新たな研究・教育活動の展開を見出すことができた。当初の予定していた以上の研究会やシンポジウム、ワークショップを実施するとともに、各大学や博物館・図書館等とより強固な連携による地域資料の保存・継承を軸に多角的な共創的事業を進めることができている。

2) 主な著書・論文

2026年1月 「地域歴史資料を取り巻くネットワーク―地域と大学・専門家をつなぐ取り組み―」, 天野真志, 日高真吾・小谷竜介編『必携文化財防災の手引き』丸善出版, pp.63-68

3) 主な研究会・シンポジウム等

・第12回全国史料ネット研究交流集会 in 高知（2026年1月11日・12日 於：オーテピア高知図書館・オンライン）

第12回全国史料ネット研究交流集会実行委員会との共同主催

高知地域資料保存ネットワーク, こうちミュージアムネットワーク, 科学研究費補助金学術変革領域研究(A)「歴史学研究成果の共有と「水平展開」」(課題番号25H01241, 研究代表: 天野真志) による共催

【1月11日】

木部 暢子（人間文化研究機構）「主催者挨拶」

筒井 秀一（第12回全国史料ネット研究交流集会実行委員会）「主催者挨拶」

第1セッション：これまでの災害経験と南海トラフ巨大地震

本多 俊彦（金沢学院大学）「能登半島地震における文化財レスキューの課題」

天野 真志（国立歴史民俗博物館）「東日本大震災における文化財レスキューの経過と現在」

楠瀬 慶太（高知地域資料保存ネットワーク／高知工業高等専門学校）「GISで読み解く高知県の民間所在資料―南海トラフ地震に備えてできること―」

【1月13日】

第2セッション：多様な地域資料と保存継承活動

田井東浩平（こうちミュージアムネットワーク／高知県立高知城歴史博物館）

「こうちミュージアムネットワークの歩みとこれから―来るべき自然災害に備えて―」

望月 良親（高知地域資料保存ネットワーク／高知大学）

「高知史料ネットの10年とこれから」

小林 和香（特定非営利活動法人地域文化計画）

「事業受託による資料保存活動―官と民のはざま―」

吉本 工心（土佐清水市立市民図書館職員）

「学校資料の保存と活用―土佐清水市の事例を中心に―」

小林 兆太（高知県歴史文化財課高知県史編さん室）

「高知県史編さんにおける民具調査―中土佐町久礼の事例から―」

谷地森秀二（越知町立横倉山自然の森博物館／高知に自然史博物館をつくる会）

「高知県に県立自然史博物館をつくりたい」

北山めぐみ（高知工業高等専門学校）

「歴史的建築総目録データベースと四国におけるワーキンググループの活動」

水松 啓太（高知県立高知城歴史博物館）

「南海トラフ地震をめぐる歴史研究と歴史実践—企画展「高知の地震災害史—紡がれた記憶と記録」の成果から—」

ポスターセッション

総合討論

小幡 尚（高知地域資料保存ネットワーク会長）

若尾 政希（人間文化研究機構）「閉会挨拶」

・地域歴史文化大学フォーラム「地域歴史文化をめぐる大学教育の展開」（2026年2月21日 於：オンライン）

若尾 政希（人間文化研究機構）「開会挨拶」

天野 真志（国立歴史民俗博物館）「趣旨説明」

高橋 陽一（宮城学院女子大学）

「女子学生が取り組む歴史文化継承の取り組み—古文書の保全活動から得られたこと—」

中村 只吾（富山大学）

「富山大学教育学部「子どもとのふれあい体験」の活動から」

小野塚航一（国立歴史民俗博物館）「歴史資料保全活動と学校教育」

千葉真由美（茨城大学）「コメント」

野本 禎司（開智国際大学）「コメント」

総合討論（司会・天野 真志）

・2025年度歴史文化資料保全首都圏大学協議会

「地域歴史文化継承拠点としての大学の役割を考える」（2025年11月29日 於：國學院大學栃木学園教育センター）

坂本 達彦（國學院大學栃木短期大学）

「人文系短期大学の文化財保全・活用活動と課題—一個人の実践例からv」

平野 哲也（常磐大学）

「栃木県における県史・自治体史編さんと史料調査・保存」

内山 大介（淑徳大学）

「フィールドワーク教育と民俗文化の継承—文化財レスキューと地域実習の実践から—」

土崎 雄祐（宇都宮大学）「コメント」

出水清之助（神戸大学）「コメント」

総合討論（司会：天野 真志）

閉会挨拶 若尾 政希（人間文化研究機構）

4) ワークショップ

・泉大津市立図書館主催「地域の歴史・文化再発見講座2024」（本事業協力 於：泉大津市立図書館）

4月10日 阿見 雄之（東京国立博物館・情報管理室長）

「文化財撮影画像の管理と利活用—東京国立博物館の場合—」

5月8日 甲斐由香里（三重県総合博物館・学芸員）

「博物館・美術館ってどんなところ？」

6月12日 小野塚航一（国立歴史民俗博物館・特任准教授）

「土地の売り買い，むかしはどうしてた？」

7月10日 今村 直樹（熊本大学永青文庫研究センター・准教授）

「お米が変えた江戸時代—熊本藩細川家と大坂—」

8月14日 渋谷 綾子（東京大学史料編纂所・特任助教）

「研究者の本棚」

9月11日 三村 昌司（早稲田大学・教授）

「明治維新を考える—地域に残された歴史資料をもとに—」

10月9日 森谷 朱（東北歴史博物館・学芸員）

「博物館の舞台裏—資料が展示室に並ぶまで—」

- 11月13日 安田 容子（安田女子大学・准教授）
「浜松図屏風の景物をよむ ～和歌と浜松と海辺に行く人々～」
- 12月11日 跡部 史浩（神戸大学・特任助教）
「震災資料」からわかること—神戸大学震災文庫の活動から—
- 1月8日 天野 真志（国立歴史民俗博物館・准教授）
「幕末政治を支えた人びと」
- 2月12日 東野 将伸（岡山大学・准教授）
「幕末維新期の地域社会と領主—御三卿—橋家領の事例から—」
- 3月12日 工藤 航平（国立歴史民俗博物館・准教授）
「本の“かたち”から歴史・文化を読み解く」

・山形文化遺産防災ネットワーク2024年度研修会（本事業共催 於：山形大学）

- 2025年5月10日 「襖の下張りはがし・整理」
- 2025年11月24日 天野 真志（国立歴史民俗博物館・准教授）
- 2026年3月6日 「襖の下張りはがし・整理」

・2025年12月12日 合同会社 結Creation 主催「水損資料レスキュー講習会」
天野 真志（国立歴史民俗博物館・准教授），甲斐由香里（三重県総合博物館・学芸員）
（本事業後援 於：なら歴史芸術文化村）

・2026年3月8日 新潟歴史資料救済ネットワーク主催「裏貼りはがしワークショップ」（事業協力 於：新潟大学）

・2026年3月20日 2025年度「兵庫県立御影高等学校との防災ワークショップ」（共催 於：神戸大学）

・2026年3月25日 こうちミュージアムネットワーク主催ワークショップ「被災資料を救済する—水損資料の対処方法と応急処置の実例—」（事業協力 於：高知県立高知城歴史博物館）

5. 研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

- 阿部 浩一 福島大学行政政策学類・教授
- ◎天野 真志 本館研究部・准教授
- 今村 直樹 熊本大学永青文庫研究センター・准教授
- 植松 暁彦 山形県埋蔵文化センター・総務専門員
- 岡田 靖 東京藝術大学大学院美術研究科・准教授
- 小野塚航一 本館研究部・特任准教授
- 甲斐由香里 三重県総合博物館・主査
- 河瀬 裕子 泉大津市立図書館・館長
- 川邊 咲子 本館・外来研究員
- 黄川田 翔 東京国立博物館学芸研究部保存科学課予測保存研究室・研究員
- 工藤 航平 本館研究部歴史研究系・准教授
- 久留島 浩 本館・名誉教授
- 小関悠一郎 千葉大学教育学部・教授
- 後藤 真 本館研究部・准教授
- 坂本 達彦 國學院大學栃木短期大学日本文化学科・教授
- 作間 亮哉 那須町教育委員会事務局生涯学習課文化財係（那須歴史探訪館）・学芸員
- 佐藤 琴 山形大学学士課程基盤教育院・教授
- 佐藤 宏之 鹿児島大学法文教育学域教育学系教育学部・教授
- 下向井祐子 広島県立文書館・文書等整理従事員
- 高科 真紀 国立民族学博物館人類基礎理論研究部・助教
- 高山 慶子 宇都宮大学共同教育学部・准教授
- 中尾真梨子 奈良県立橿原考古学研究所・主任研究員

中村 耕作 本館研究部考古研究系・准教授
 西村慎太郎 国文学研究資料館研究部・教授
 東野 将伸 岡山大学社会文化科学学域・准教授
 日高 真吾 国立民族学博物館学術資源研究開発センター・教授
 平野 哲也 常盤大学人間科学部・教授
 檜皮 瑞樹 千葉大学大学院人文科学研究院・准教授
 堀田慎一郎 東海国立大学機構大学文書資料室・特任助教
 堀野 周平 鹿沼市教育委員会事務局文化課文化財係・主任主事
 三上 喜孝 本館研究部・教授
 三村 昌司 早稲田大学教育・総合科学学術院教育学部・教授
 宮間 純一 中央大学文学部・教授
 山口 悟史 東京大学史料編纂所技術部史料保存技術室・技術専門職員

【機構共創先導プロジェクト】

(4) 日本関連在外資料調査研究

外交と日本コレクション—19世紀在外日本資料の世界史的文脈による
 研究と現地およびオンライン空間における活用

2022～2027年度

(研究代表者 日高 薫)

1. 目的

本研究は、19世紀に形成された欧米所在の日本資料コレクションを主な対象とし、それらを日本の歴史・文化資料としてのみならず、現地に移動し新たな文脈をもつに至った資料ととらえることにより、相互の関係性の歴史に注目することを目的とするものである。在外日本資料の多視点的調査研究を推進し、グローバルな文脈による新たな位置づけを与えるとともに、現地活用やリモート環境・オンライン空間における活用を促進する事業を展開する。

研究の実践にあたっては、とくに在外の日本コレクション形成史における外交的観点に着目する。欧米に所蔵される日本関係資料のうち、(a) 幕末の遣米・遣欧使節団関係品を中心とする外交上の贈答品、(b) 使節団や外交官などによる収集品、(c) その他、海外における需要に応じて収集あるいは輸出され、外交上重要な役割を果たした美術資料・民俗資料などを対象とし、それら日本の産物が、外交やそれに付随する文化・産業等の交流に活用された実態を、現存する《もの》資料と日欧双方の文献資料との実証的調査研究によって明らかにすることを目指す。

2. 今年度の研究計画

これまで、海外における《もの資料》の調査を主軸としつつ各国のパートナー機関や研究者と連携しながら調査研究を進めてきたが、2025年度は、調査の継続とともに、2022～2024年度の調査研究によって得られた中間的成果を総合化し発信することに重点を置く。具体的には、遣外使節関係資料の調査研究の深化をふまえ、現存の外交美術品に内在するグローバル・コンテクストを共有し議論を深めるために、国内各分野の専門家と海外のメンバーの視点、あるいは美術史研究者による《もの資料》調査と歴史研究者による文献資料研究とをつなぐ国際シンポジウムを開催する。また第3期プロジェクトからの継続事業であるシーボルト父子関係資料の調査研究および大学・博物館との連携事業に関して、ウィーン世界博物館・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家・ダラム大学等との連携により、現地調査・研究のみならず公開・活用事業を推進する。さらに、それらの成果のデータベースによる公開や、より効果的なアーカイブ構築に向けた諸作業を推進する。

3. 今年度の研究経過

(1) 遣米遣欧使節関係資料調査

- ① スミソニアン自然史博物館所蔵ベリー・コレクションの調査、2026年3月23・24日、26・27日、於：スミソニアン研究機構ミュージアム・サポート・センター

[参加者：日高薫、福岡万里子、澤田和人、酒井康平（以上、歴博）、荒川正明（学習院大学）、山崎剛（金沢美

術工芸大学)、ポール・マイケル・テイラー、ニコライ・ワクト、クエンティン・コール、バーバラ・ワタナベ、(以上、スミソニアン自然史博物館)、ジョーダン・サンド(ジョージタウン大学)]

2024年度に引き続き、スミソニアン研究機構が所蔵するペリー・コレクションの調査をおこなった。昨年度の台帳調査により、ペリー・コレクションの所在に関しては、自然史博物館所蔵品以外に、染織資料の大半がアメリカ歴史博物館所蔵となっていることが判明したため、同館所蔵の染織資料と関連資料の調査もおこない、全体像の把握に努めた。

自然史博物館所蔵分については、同館の幕末日本コレクションに含まれる個々の該当資料について、昨年度実施できなかった陶磁器関係の調査(荒川が担当)を中心に、品質・形状・法量等、資料の基本情報の確認とメモ写真撮影をおこなうとともに、史料の記載と照合し、日本側からの各種贈答品および米国側希望品などに分類・同定する作業を進め、コレクション形成の背景を明らかにするための基礎調査を実施した。

併せて、遣米使節団関係品とペリー・コレクションの中から重要な資料(馬具・蒔絵火桶・鞍鐙・料紙硯箱・磁器製灯籠・植木鉢等)について、プロカメラマンによる撮影をおこなった(酒井)。

②アメリカ歴史博物館所蔵ペリー・コレクション染織品の調査、2026年3月25日、於：アメリカ歴史博物館[参加者：日高薫、福岡万里子、澤田和人、酒井康平(以上、歴博)、荒川正明(学習院大学)、山崎剛(金沢美術工芸大学)、ローラ・ジョンソン、実藤典子、ケネス・コーエン(以上、アメリカ歴史博物館)]

アメリカ歴史博物館所蔵分については、染織資料27点(紅平絹裂1点、白平絹裂1点、紋縮緬裂3点、縮緬地紅板締裂1点、郡内縞裂16点、木綿地中型染裂2点、木綿地紺裂2点)すべての調査・撮影を実施した(澤田・酒井)。日本側史料の記載との照合に関しては、染織品は多くの場面で贈答されているうえに、文献上の説明が簡略であることから、いずれの機会によるものなのか確定できない資料が大半を占める。しかしその一方で、注目すべき資料も見いだせた。例えば郡内縞は江戸時代中期以来、上質な絹織物として著名であったが、国内の伝世例においては確実な実物の存在は知られていない。当該資料は、ペリー艦隊側から提出された希望品リストをふまえて安政元年(5月?)に下田で引き渡された品々のひとつであったことが、史料によって裏付けられる(『大日本古文書 幕末外国関係文書』第8巻230号)ため、新たに見いだされた基準作として大きな意義をもつ。

ところで、アメリカ歴史博物館は、ペリー・コレクション以外にも日本の染織資料を所蔵しているが、日本からの専門研究者による調査は過去に例がなかったとのことである。そこで、同館所蔵の他の染織コレクション(1915年パナマ太平洋万国博覧会に際する天皇の委任による寄贈品)に関しても熟覧調査をおこない、澤田が学芸員の質問等に対応するとともに、意見交換をおこなった。

同館では併せて、ペリー艦隊の会計係であったトーマス・C・ダドリーのコレクション(軍事社会部門)の中から、日本遠征に関する史料や日本から持ち帰った物品の調査もおこなった。ダドリーの個人的な持ち帰り品の中に、ペリー・コレクションと類似する蒔絵椀が含まれることは、収集経緯を知るうえで興味深い。

今回の調査をもって、スミソニアン研究機構が所蔵する250件あまりのペリー・コレクションのほぼ全体の調査を終了した。ペリー・コレクションは、公式・非公式レベルでの各種贈答品や米国側の要望品によって構成されるが、その内容は極めて多岐にわたる。今後、調査結果を整理し関連文献を精査することにより、本コレクションの全体的把握や、ペリー艦隊来日時の贈答の実態とその役割の解明に大きな進展が見込まれ、幕末の外交を《もの》を通じてとらえ直すことが期待される。

③遣欧使節関係資料の所在情報の追加

[情報提供関係者：日高薫、福岡万里子(以上、歴博)、エルテル・ボエール(ギメ美術館)、ダン・コック(オランダ世界博物館)、保谷徹(東京大学)]

遣欧使節団関係品については、プロジェクト発足前のフォンテヌブロー宮殿所蔵品に関わる日仏の研究者による調査研究と、その後の英国・オランダ・ポルトガル等の研究者による所在確認作業により、プロジェクト開始初年度までに、各国における多くの伝世例を確認することができた。さらに今年度、フランス、ロシア、オランダ宛の贈答品に関して、追加の情報が得られたことは研究の進展にとって重要である。

④国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション—使節団の贈答品を探して—」の開催、2026年1月10日・1月11日、於：一橋講堂(オンラインとのハイブリッド開催)、主催：国立歴史民俗博物館、参加人数：のべ587人[登壇者：日高薫、西谷大、鷲頭桂、福岡万里子(以上、歴博)、吉崎雅規(横浜開港資料館)、エステル・ボエール(フランス国立ギメ東洋美術館)、レイチェル・ビーター＝アンダーヒル(ロイヤル・コレクション・トラスト)、アレクサンドラ・クルヴェロ(リスボン新大学)、ダン・コック(オランダ国立世界博物館)、高岸輝(東京大学)、鄭美娟(韓国国立晋州博物館)、荒木和憲(九州大学)、ジラルデッリ青木美由紀(イスタンブール工科大学)、黒川廣子(東京藝術大学大学美術館)、荒川正明(学習院大学)、松島仁(静岡県富士山世界遺産センター)、佐藤寛介(東京国立博物館)、三浦篤(大原美術館・館長)]

幕末の遣外使節団が条約締結国の君主に贈った美術品に関する本プロジェクトの中間報告として、これまでに得られた成果を総合化し、広く国内外の研究者や市民に向けて公表・発信するために、国際シンポジウムを開催した。プロジェクトに参画した修好通商条約締結国（米国・英国・フランス・オランダ・ポルトガル・ドイツ、ただしロシアを除く）の研究者と日本の研究者が登壇し、王室関係機関や大統領府等に現存する実物資料と国内外に残る史料との両面から考察した成果の全貌を始めて世界に向けて発信した。1860年および1862年の遣米・遣欧使節団関係品を主たる対象として、従来知られていなかった使節団贈答品の7カ国における伝世状況や、贈答品選定・制作の具体的経緯と外交的背景、海外における受容・分配・離合の実態、外交儀礼における贈答の伝統と変容などについての報告がおこなわれた。各分野の研究者や市民、報道関係者から大きな反響があり、未確認の関係資料についての新情報など現在進行中の調査研究を進展させるフィードバックも多数寄せられた。また、プロジェクトが推進するグローバルな視点による在外日本関係資料調査の実践例として、在外調査の新たな方法をアピールすることができた。対面、オンラインを含めて、のべ587人、欧米・アジア・中東を含む15カ国の視聴・参加者を得た。

なお、本シンポジウムの内容は、日本語版と英語版とに分け、2027年度以降に報告論集として刊行することが計画されている。これら二冊の報告書刊行が実現すれば、日本における外交贈答品に関する初の本格的な研究書となることから、近年盛り上がりを見せる海外における贈答品研究の空白部分を補うものとして注目される。

プログラム

[総合司会：鷺頭 桂（歴博）]

1月10日（土）

13：30～13：40 開会挨拶 西谷 大（歴博・館長）

13：40～13：50 趣旨説明 日高 薫（歴博）

第1部：幕末使節団と各国にのこる贈答品

[司会：日高 薫]

13：50～14：15 ①吉崎雅規（横浜開港資料館）

幕末期幕府の遣外使節と江戸の世相

14：15～14：40 ②福岡 万里子（歴博）

幕末期徳川外交と遣米使節贈答品

14：40～15：05 ③エステル・ポエール（フランス国立ギメ東洋美術館）

遣欧使節団関係の調査研究現状—フランスのコレクションを中心に

15：05～15：20 （質疑応答）

15：20～15：30 （休憩）

[司会：高岸 輝]

15：30～15：55 ④レイチェル・ピート＝アンダーヒル（ロイヤル・コレクション・トラスト）（ビデオ発表）

江戸幕府からヴィクトリア女王への贈答品（1860・1862・1864年）—展覧と分配

15：55～16：20 ⑤アレクサンドラ・クルヴェロ（リスボン新大学）

ア19世紀における日本からポルトガルへの外交贈答品

16：20～16：45 ⑥ダン・コック（オランダ国立世界博物館）

文化価値の誤解—オランダにおける日本外交贈答品の受容

16：45～17：00 （質疑応答）

1月11日（日）

第2部：外交贈答品について考える

[司会：福岡 万里子]

9：30～9：55 ⑦高岸 輝（東京大学）

幕末画壇の展開と文久遣欧使節（1862）—徳川家茂から欧州君主に贈られた絵画を中心に—

9：55～10：20 ⑧日高 薫（歴博）

幕末遣外使節がもたらした漆工芸品

10：20～10：45 ⑨鄭 美娟（韓国国立晋州博物館）

近世幕府外交と朝鮮国王に贈られた屏風—韓国での再発見と玉里島津家模本の新出を機に

10:45～11:00 (質疑応答)

11:00～11:15 (休憩)

11:15～11:40 ⑩荒木 和憲 (九州大学)

近世日本の外交文書における金銀装飾料紙の使用

11:40～12:05 ⑪ジラルデッリ青木 美由紀 (イスタンブール工科大学)

「エジプト王」への贈答品—スエズ運河開通前夜のカイロとオスマン帝国・日本の最初の接触

12:05～12:15 (質疑応答)

(昼食)

総合討論

[司会: エステル・ボエール、高岸 輝]

13:30～15:10

パネル発表①黒川 廣子 (東京藝術大学美術館) 使節団贈答の置物 (主に金工と水晶について)

パネル発表②荒川 正明 (学習院大学) 使節団贈答の陶磁器

パネル発表③松島 仁 (静岡県富士山世界遺産センター) 狩野董川中信筆「富士飛鶴図」と徳川将軍の外交贈答品としての絵画

パネル発表④佐藤 寛介 (東京国立博物館) 日本甲冑の象徴性

全体討論 登壇者全員

15:10～15:15 閉会の挨拶 三浦 篤 (大原美術館・館長)

[使用言語: 日本語および英語 (同時通訳あり)]

(2) 国内外の外交関係史料の検討

昨年度に引き続き、福岡万里子 (歴博)、小野将 (東大史料編纂所)、立石了 (東大史料編纂所) と吉崎雅規 (横浜開港資料館) が、幕末期の幕府外交について、東京大学史料編纂所所蔵の維新関係貴重史料群 (特に外務省引継書類) を基軸史料として研究を行い、1860年代に派遣された遣米・遣欧使節団に関する史料や、安政期の開港に伴い創設された外国奉行・神奈川奉行に関係する史料群に関して、調査・収集整理と研究資源化を図る作業を進行中である。横浜開港資料館所蔵・寄託の神奈川奉行関連史料など関係史料の調査と連携しながら作業を進め、幕末期幕府の外交および関連組織の実像を解明するための研究基盤構築を目指している。

(3) シーボルト父子関係資料の調査研究 (第3期プロジェクトからの継続事業)

①ドイツ所在シーボルト父子関係資料調査

2025年9月10日～9月15日、於: ブランデンシュタイン城 (ドイツ・シュルヒテルン市)

2025年9月16日～9月18日、於: ヴュルツブルク大学文書館、バイエルン州立ヴュルツブルク公文書館、ヴュルツブルク市立公文書館

[参加者: 日高薫、工藤航平 (以上、歴博)、宮坂正英 (長崎純心大学)、堅田智子 (関西学院大学)、松井洋子 (東京大学名誉教授)、コンスタンティン・フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン (ブランデンシュタイン城城主)、マルクス・ホルツ (ヴュルツブルク大学文書館)、ヨハネス・ケーニッヒ (バイエルン州立ヴュルツブルク公文書館)]

ドイツ・ヘッセン州シュルヒテルン近郊のブランデンシュタイン城を訪問し、同城シーボルト・アーカイヴ所蔵のシーボルト父子関係史料およびもの資料の調査・撮影をおこなった。フィリップ・フランツおよびアレクサンダー、ハインリッヒに関する史料については、約8割の撮影を終了し、データベース公開に向けて作業を進行中である。今後は引き続き、未撮影のもの資料および関連資料の撮影をおこなう予定である。

また、ヴュルツブルク市内の関連諸機関においてシーボルト関係史料の調査・撮影を進めた。ヴュルツブルク市立公文書館においては、昨年度のヴュルツブルク大学文書館における履修記録の調査において新たに判明したシーボルトの学生時代の住所に基づき、当時の古地図や古写真から当該住所に相当する資料を抽出し、調査・撮影をおこなった。

②ウィーン所在ハインリッヒ・コレクション調査

2026年3月2日～3月7日、於: ウィーン世界博物館 (オーストリア)

2026年3月3日，於：オーストリア応用美術博物館・MAK（オーストリア）

[参加者：日高薫，鷺頭桂，工藤航平，酒井康平（以上，歴博），佐々木守俊（清泉女子大学），伊藤紫織（尚美学園大学），ベッティーナ・ツォルン，クラウディア・バンツ館長（以上，ウィーン世界博物館），脇田美央（オーストリア応用美術博物館）]

ウィーン世界博物館所蔵ハインリッヒ・コレクションの調査を実施し，彫刻を佐々木，絵画（主に粉本類）を伊藤・鷺頭，工藤，その他の工芸品・民俗資料等を日高が調査し，酒井が撮影をおこなった。不明資料を除く約600点の未調査資料の期間内終了を目指している。併せて，佐々木がウィーン応用美術博物館所蔵の彫刻4点を調査した。

③データベース作成・公開

もの資料 新規追加レコード：2件，更新：37件 計39件

[執筆者：佐々木守俊（清泉女子大学），伊藤紫織（尚美学園大学），堅田智子（関西学院大学），松井洋子（学識経験者），日高薫，工藤航平（歴博），DB作成：鈴木卓治，協力：平田由紀，斉藤汐里，小浜寿美子，山本紀久子（以上歴博）]

ウィーン世界博物館所蔵もの資料について，彫刻の資料のレコードを画像付きで新規に追加した（佐々木）。絵画，漆工等の資料のデータを作成中（伊藤・日高）であるが，公開には至らなかった。

ブランデンシュタイン城所蔵シーボルト父子関係文書については，ブランデンシュタイン城アーカイブの司書アーデルマン氏が急逝したため，氏が死の直前に付け直した資料番号の対照が困難となり，ひとつひとつの照合作業を進めている（堅田・松井・工藤）。今年度は，上記作業に加えて，日本語訳のないデータ項目の追加入力作業（小浜）を進めたが，データ公開までには至っていない。

ウィーン世界博所蔵資料のデータベースと，ブランデンシュタイン城所蔵文書データベースの両者とも，データ作成は進行しているが，新規の公開は僅かしかおこなえなかった。

（4）エジプト所在日本美術品の調査研究

2023年度から着手した中東における在外日本資料の調査に関しては，エジプト・トルコに焦点を絞り，研究計画全体に支障を及ぼさない範囲内での活動を継続している。グローバルな視点による在外日本資料の調査研究は，日欧からのアプローチのみで完結するものではなく，両者の中間地点に位置する地域からの視点が不可欠であると考えからである。幸い科学研究費補助金基盤研究（A）「エジプト所在の日本美術品調査」（研究代表者：日高薫）が採択されたため，今年度からはエジプトの王室関連のコレクションを手始めに，将来的な展開を見据えつつ調査・研究，現地との交流を進め，マニアル宮殿における重点的調査のための準備研究を進展させた。

①エジプト・トルコにおける所蔵品概要調査・大学教育との連携

在エジプト日本美術調査 2025年11月8日～16日 於：スエズ運河博物館，国立スエズ博物館，イスラム美術館，旧エル・ゲジラ宮殿，アラブ音楽研究所，マニアル宮殿博物館，モハメッド・マフムート・ハリリー美術館，ガエル・アンダーソン美術館，JSPS日本学術振興会カイロ連絡センター，エジプト観光・考古省博物館局，在エジプト日本国大使館ほか

在トルコ日本美術調査 2025年11月18日，於：ドルマバフチェ宮殿美術館

[参加者：日高薫，ジラルデッリ青木美由紀，山崎剛，ムハンマド・カドリ（学識経験者），板東和美（JICA），中野正道（カイロ日本人会），アッバースヒルミ3世（マニアル宮殿振興会），モハメッド・ブディーニ（マニアル宮殿博物館），モアメン・オスマン（エジプト観光・考古省），岩井文男，伊藤聡史，緒方彩夏（以上在エジプト日本国大使館），長澤榮治（JSPS日本学術振興会カイロ連絡センター），橋本歩（国際交流基金カイロ日本文化センター）]

今年度のエジプト調査では，まず，スエズ運河開通前後の歴史的状況を把握するとともに，文久遣欧使節団（1862）および横浜鎖港談判使節団（1863）の足跡を辿るため，カイロからポートサイド・イスマイリア・スエズへと運河沿いの町を南下し，スエズ駅からカイロへ鉄道沿いに移動するルートの実地調査をおこなった。スエズ運河博物館においては，展示室において公開中の肥前磁器等（マニアル宮殿博物館からの寄託品・調査許可申請対象資料）を確認した。

また，カイロにおいては，マニアル宮殿を訪問し，エジプト観光・考古省への調査許可申請のための希望リスト完成のため，同宮殿博物館の所蔵品台帳を再確認し，不明点について学芸員に照会する作業をおこなった。その結果，2024年度に閲覧した所蔵品台帳とは異なる新たな台帳の閲覧を許されたため，ここから調査希望資料を追加抽出し所蔵番号を確認する作業を進めた。新しい台帳に記載される資料は膨大な数に上り，期間内に完了しなかったため，2025年12月および2026年1月～2月の2回にわたり，青木が再度カイロを訪問し，申請リストを完成させる

こととなった。

また、今後の調査申請、またその後のエジプトにおける調査研究や関連行事開催等に向けて、関係部署を訪問し、在エジプト日本国大使館特命全権大使、エジプト観光・考古省博物館局長、JSPS日本学術振興会カイロ連絡センター所長、国際交流基金カイロ日本文化センター所長、田辺太一の子孫などに面会し、今後の調査計画について説明・協議するなど準備をおこなった。

2026年度には、調査許可が得られ次第、マニアル宮殿所蔵品の調査を実施することになるが、それと同時進行で、次の調査対象資料のリストアップをおこない、許可申請の準備を進める予定である。次なる候補としては、アブディーン宮殿を最優先調査先として想定しているが、大統領府であり許可が得られるかは不明なため、個人コレクションを含め、その他の候補となるコレクションを選定するための予備調査も進めている。

在トルコ日本美術調査 2025年11月18日、於：ドルマバフチェ宮殿美術館

[参加者：日高薫（歴博）、ジラルデッリ青木由紀（イスタンブル工科大学）、山崎剛（金沢美術工芸大学）、パオロ・ジラルデッリ（国立ボアジチ大学）]

ドルマバフチェ宮殿所蔵の日本美術調査とともに、イスタンブル工科大学の学生25名を対象に宮殿内における日本美術の役割について理解を深めるための演習を実施した。

②JSPS日本学術振興会カイロ連絡センター11月定例懇話会における講演、2025年11月16日、於：JSPS日本学術振興会カイロ研究連絡センター

[発表者：日高薫、ジラルデッリ青木美由紀、参加者：山崎剛、長澤榮治、長澤美抄子（JSPS日本学術振興会カイロ連絡センター）、ムハンマド・カドリ、板東和美、中野正道、橋本歩ほか]

カイロ滞在中の11月16日に、JSPS日本学術振興会カイロ研究連絡センターより青木が講演を依頼され、あわせて日高がプロジェクトの趣旨説明をおこなった。

講演題目：「オスマン帝国と日本趣味/ジャポニスム — ボスフォラス海峡とナイル河」

講師①：ジラルデッリ青木美紀（イスタンブル工科大学）

講師②：日高薫（国立歴史民俗博物館）

③エジプト観光・考古省最高評議会（SCA）への調査許可申請書の提出

[参加者：日高薫、ジラルデッリ青木美由紀、ムハンマド・カドリ、モハメド・ブディーニ、マルワ・アブデルハミド（マニアル宮殿博物館）ほか]

マニアル宮殿博物館所蔵の日本美術調査を目指して、2024年度より、本格的な準備調査を実施してきた。エジプトにおける調査は、各所蔵先が調査の受け入れを承諾しても、エジプト観光・考古省最高評議会（SCA）の正式許可がない限り熟覧は許されない。また、所蔵品の資料番号は非公開であるため、内々にその情報を得るところから始めなくてはならない。

そこで、まずは在エジプト日本国大使の協力を得て、2024年度秋に、マニアル宮殿所蔵品台帳（アラビア語・手書き）の閲覧を許可され、その中から日本美術である可能性の高い資料（「中国製」と台帳記載の磁器等を含む）を抽出し、資料番号を付した調査希望リストを作成した。2025年11月、リスト内容の最終確認のためマニアル宮殿を再訪問した際に、追加の台帳の閲覧を許されたため、その後の青木の追調査を含めて希望リストを整備し直し、250点の画像付きアラビア語リストを作成、マニアル宮殿博物館学芸員による確認、エジプト考古・観光省博物館局長アハメド・ハミダン氏への報告等を経て、3月末にカイロを訪問してエジプト考古・観光省最高評議会（SCA）への正式申請を完了することができた。

今後、許可申請が承認されれば、2026年度より詳細な調査に着手することになるが、先述の通り、その他の調査先に関しても、同様のプロセスが必要となる。博物館局はこのプロジェクトに理解を示しているため、今後も日本大使館、博物館局との関係を保ちつつ手続きを継続していく予定である。

（５）その他の活動（第３期プロジェクトからの継続事業を中心に）

①ダラム大学東洋博物館との共催展示開催

特別展「Echoes of Friendship: The Squire Family in Meiji Japan ～A story of cultural exchange and enduring connection」

（邦題）「響きあう友情、明治期のスクワイア一家～文化をこえた揺るぎない絆の物語」、2026年11月25日～3月22日、会場：ダラム大学東洋博物館

[主催：ダラム大学東洋博物館、国立歴史民俗博物館、担当者：主催：レイチェル・パークレー（ダラム大学東洋美術館）、三木美裕（ダラム大学リサーチフェロー）、大久保純一、日高薫（歴博）]

1898～1905年に小倉千寿製紙より招聘され工場管理を担った英国人技師ジョージ・スクワイアおよび彼の家族に関する一括資料を紹介する展示をダラム大学東洋博物館にて開催した。この展示は、2024年度歴博において開催した特集展示「スクワイア家の記憶—ある英国人技術者の遺品から—」（2024年7月23日～10月6日、国立歴史民俗博物館第3展示室）と対をなす。企画・立案、展示品選定等の段階から日英の担当者の協議によって準備を進め、展示解説等も分担執筆した。

歴博展示とダラム大展示は、いずれもダラム大学所蔵の日本コレクションを初公開する展示であるが、それぞれ視点を変えた展示構成とした。歴博展示では資料が英国人によって持ち帰られた背景、ダラム大学展示では帰国後の家族の動向を、具体的資料を通じて可視化し在外資料の多面性に光をあてている。

<https://www.durham.ac.uk/things-to-do/whats-on/events-calendar/2025/11/echoes-of-friendship/>

（展覧会案内・ダラム大学Webサイト）

https://www.edinburgh.uk.emb-japan.go.jp/itpr_ja/11_000001_00858.html

（在エディンバラ日本国総領事館Webサイト）

②英国ダラム大学とのMOU締結、2025年11月25日

【参加者：山田慎也副館長（歴博）、カレン・オブライエン副学長、クレア・オマリー国際担当副学長、クレイグ・パークレー東洋博物館館長（以上、ダラム大学）、三木美裕（ダラム大学リサーチフェロー）、前田修司公使（在英日本大使館）】

ダラム大学とは2017年以降、MOU締結のもと、プロジェクトメンバーが現地で講義を行ったり、東洋博物館学芸部長レイチェル・パークレー氏を日本へ招聘したりするなど、多くの活動を通じて連携を深めてきた。2025年11月、有効期間を過ぎていたMOUを再度締結、歴博からは山田副館長がダラム大学を訪問し、署名式がおこなわれた。

なお、これまでの学術研究協力事業が高く評価され、レイチェル・パークレー氏は2026年1月に2025年度外務大臣表彰を受賞した。

<https://www.durham.ac.uk/things-to-do/venues/oriental-museum/international-partnerships/national-museum-of-japanese-history/>

（国立歴史民俗博物館との連携事業・ダラム大学Webサイト）

<https://www.durham.ac.uk/news-events/latest-news/2025/11/exhibition-and-mou-at-oriental-museum-november-2025/>

（MOU締結・ダラム大学Webサイト2025年11月25日）

<https://www.durham.ac.uk/news-events/latest-news/2026/04/durham-university-museum-curator-recognised-for-strengthening-uk-japan-cultural-ties/>

（外務大臣表彰と連携事業・ダラム大学Webサイト 2025年4月22日）

https://www.uk.emb-japan.go.jp/itpr_ja/260417commendation.html

（外務大臣表彰・在英日本国大使館Webサイト）

③ダラム大学東洋博物館展示関連行事「Lafcadio Hearn Project - Creating a World of Expression」の共催、2026年3月18日、於：帝京大学ラフカディオ・ハーン文化センター

【主催：ダラム大学東洋博物館、共催：国立歴史民俗博物館、帝京大学】

ダラム大学東洋博物館で開催中のスクワイア家の展覧会の関連行事として、朗読とピアノの公演を共催した。スクワイア家のコレクション中の、日本の物語を翻訳した「ちりめん本」シリーズにあるハーンの著作にちなみ、彼がダラム大学に在学したことから命名されたラフカディオ・ハーン文化センターにおいて、アイルランドと日本から招いた作曲家と音楽家によるコンサートを開催した。

④ルツェルン応用科学芸術大学との連携事業の成果報告

【執筆者：福岡万里子（歴博）、アレクシス・シュヴァルツェンバッハ（ルツェルン応用科学芸術大学）】

スイス、ルツェルン応用科学芸術大学との連携事業のもとおこなったスイスの絹産業史に関する研究プロジェクト（Silk Memory Project）の成果は2022年に論文集として公刊されたが、一般には入手しづらいため、この中のシイベル・ブレンワルド商会関連の論文を日本語論文として発表した（「貿易と外交の狭間で—スイス系生糸貿易商社シイベル・ブレンワルド商会の幕末明治初期の活動」『横浜開港資料館紀要』）

4. 今年度の研究成果

【学会・ワークショップ】

①国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション—使節団の贈答品を探して—」

会場：一橋講堂（オンラインとのハイブリッド開催）

日時：2026年1月10・11日

主催：国立歴史民俗博物館

【学術論文・口頭発表・その他刊行物等】

- ①（共編著）ジラルデッリ青木美由紀『オスマン帝国と日本趣味／ジャポニスム』, 2025年11月13日, 思文閣出版（論文）
 - ・ジラルデッリ青木美由紀「総論 オリエントの東-オスマン帝国と日本趣味／ジャポニスム」
 - ・ジラルデッリ青木美由紀「〔コラム4〕 イスタンブールのジャポニスムとアール・ヌーヴォー」
 - ・ジラルデッリ青木美由紀「〔コラム5〕 東から西から—イスタンブール来訪貴顕人名録」
 - ・ジラルデッリ青木美由紀「近代オスマン宮廷の美意識と日本」
- ②（共編著）Rosina Buckland, Oleg Benesch『Samurai』, 2026年3月10日, University of Washington Press
- ③（展示図録）『特別展 シリーズ江戸文化のなかの富士山7 転回点 幕末から明治へ-移動する徳川家茂, 和宮, 明治天皇, そして彼らのみた富士山-』, 2024年9月28日, 静岡県富士山世界遺産センター（論文）
 - ・松島 仁「徳川家茂から明治天皇へ-富士山イメージの転回点」
- ④（論文）高岸輝「日本中世におけるやまと絵屏風の展開と「耆英会図」（韓国国立中央博物館蔵）の画中屏風（일본 중세시대 야마토에병풍의 전개와 국립중앙박물관 소장 <기영회도> 속 병풍）」『第14回 国際学術講演会—美術史学者招待講演会: 東アジア美術における融合—陶と画（동아시아 미술의 융합 陶와画）』, 2025年9月6日, Lee & Won財団
- ⑤（論文）荒木 和憲「中世日朝交流における偽使と真使」『歴史学研究』, No.1063, 2025年7月, 続文堂出版
- ⑥（論文）福岡万里子, シュヴァルツェンバッハ・アレクシス「貿易と外交の狭間で—スイス系生糸貿易商社シベル・ブレンワルド商会の幕末明治初期の活動」『横浜開港資料館紀要』, 2026年3月31日, 横浜開港資料館
- ⑧（論文）宮崎克則, 森弘子「天保9（1838）年 幕府巡見使への小倉藩庄屋の対応—『巡見上使御通行一件』」『国際文化論集』, 第40巻1号, 2025年9月, 西南学院大学学術研究所
- ⑨（論文）宮崎克則, 森弘子「天保9（1838）年 幕府巡見使への柳河藩対応—『鑑備公御代御私領巡見使一件諸控目録下調』」『国際文化論集』, 第40巻2号, 2026年3月, 西南学院大学学術研究所
- ⑩（書籍分担執筆）鄭美娟「作品解説」『日韓国交正常化60周年 てくてくコリア—韓国文化のさんばみち—』, 2025年9月, 東京国立博物館
- ⑪（口頭発表）日高薫「国立歴史民俗博物館によるエジプト所在日本美術の調査について」日本学術振興会カイロ研究連絡センター「11月学振懇話会」, 2025年11月16日
- ⑫（口頭発表）日高薫「外交と日本コレクション-19世紀在外日本資料の世界史的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用」人間文化研究機構基幹研究プロジェクト等研究連絡会「基幹研究プロジェクト等中間報告-これまでの実績と今後の展望-」, 2025年12月19日
- ⑬（口頭発表）日高薫「開催趣旨」国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション—遣外使節団の贈答品を探して—」, 2026年1月11日
- ⑭（口頭発表）日高薫「幕末遣外使節がもたらした漆工芸品」国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション—遣外使節団の贈答品を探して—」, 2026年1月11日
- ⑮（口頭発表）福岡万里子「幕末期徳川外交と遣米使節贈答品」国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション—遣外使節団の贈答品を探して—」, 2026年1月10日
- ⑯（口頭発表）福岡万里子「Heusken's Life in Yedo 1858-1861」ヒュースケン慰霊祭2026, 2026年1月16日
- ⑰（口頭発表）小野将「幕末外交史料の編纂・研究から歴史把握へ—『大日本古文書 幕末外国関係文書』編纂の現場から」近世史研究会7月例会（講演会）, 2025年7月26日
- ⑱（口頭発表）堅田智子「呉秀三とハイデルベルク—『シーボルト先生其生涯及功業』をめぐるシーボルト家との交流—」洋学史学会若手部会2025年度4月例会, 2025年4月5日
- ⑲（口頭発表）堅田智子「『シーボルト先生其生涯及功業』をめぐる呉秀三とシーボルト家」六史学会（合同例会）, 2025年12月20日
- ⑳（口頭発表）エステル・ボエール「遣欧使節団関係贈答品の調査研究現状—フランスのコレクションを中心に」国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション—遣外使節団の贈答品を探して—」, 2026年1月10日
- ㉑（口頭発表）ジラルデッリ青木美由紀「Chinese and Japanese Porcelain and Objects at the Ottoman Court」

Constantinople/Istanbul: One Capital, Two Empires, 2025年10月29日

- ②② (口頭発表) ジラルデッリ 青木美由紀「オスマン帝国と日本趣味/ジャポニスム ― ボスフォラス海峡とナイル河」11月学振懇話会, 2025年11月16日
- ②③ (口頭発表) ジラルデッリ 青木美由紀「オスマン帝国のジャポニスムと万国博覧会」国際シンポジウム2025博覧会とジャポニスム, 2025年11月22日
- ②④ (口頭発表) ジラルデッリ 青木美由紀「『エジプト王』への贈答品―スエズ運河開通前夜のカイロとオスマン帝国・日本の最初の接触」国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション―遣外使節団の贈答品を探して―」, 2026年1月11日
- ②⑤ (口頭発表) ベッティナー・ツォルン「Database Presentation: Japanese Exhibits at the Vienna World Exhibition of 1873」万博・日本・シュトラウスー1873年ウィーンの出逢い 講演, 2025年10月1日
- ②⑥ (口頭発表) ベッティナー・ツォルン「第10回特別展示「開館5周年記念 ウィーン万国博覧会とアイヌ・コレクション」スペシャルトークイベント」国立アイヌ民族博物館, 2025年10月4日
- ②⑦ (口頭発表) 保谷 徹「1804年將軍宛贈答品の行方―レザノフ関連資料貼交屏風の「黄金の象の時計」について―」広島県立歴史博物館「守屋壽コレクション初公開記念 洛中洛外図屏風と古地図でたどる日本の歴史 関連イベント 開催記念講演会」, 2025年4月26日
- ②⑧ (口頭発表) 荒木和憲「九州国立博物館所蔵の清仁宗詔書写に関する考察」2025年 東国大学校文化学院HK+事業団・東京大学史料編纂所共同学会大会, 2025年8月
- ②⑨ (口頭発表) 荒木和憲「『前近代日本―アジア関係資料デジタルアーカイブ』が歴史をひらく」附属図書館所蔵「金光明最勝王経」重要文化財指定記念講演会「デジタルで歴史をひらく―これからの人文情報学―」, 2025年11月
- ③⑩ (口頭発表) 荒木和憲「日本におけるデジタル研究資源の現状―日韓関係史研究に即して―」韓日修交60周年記念「韓日関係史研究の回顧と展望」, 2025年11月
- ③⑪ (口頭発表) 荒木和憲「日本史学研究室所蔵資料のアーカイブ化―講座史から研究室史へ―」九州史学会大会日本史部会シンポジウム「九州大学日本史学研究室の100年」, 2025年12月
- ③⑫ (口頭発表) 荒木和憲「『前近代日本-アジア関係資料デジタルアーカイブ』における構造化の理念と実践」デジタルアーカイブ学会第10回大会サテライト企画セッション「テキストが拓くデジタルアーカイブの可能性 ―生成・構造化・活用の実践―」, 2026年1月
- ③⑬ (口頭発表) 荒木和憲「近世日本の外交文書における金銀装飾料紙の使用」国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション―遣外使節団の贈答品を探して―」, 2026年1月11日
- ③⑭ (口頭発表) 荒木和憲「『前近代日本―アジア関係資料デジタルアーカイブ』の紹介」九州大学歴史学・歴史教育セミナー, 2025年8月
- ③⑮ (口頭発表) 荒木和憲「『前近代日本―アジア関係資料デジタルアーカイブ』が目指すもの」DH国際シンポジウム「東アジア／日本における人文学向けテキストデータ構造化のためのガイドライン策定に向けて」, 2025年9月
- ③⑯ (口頭発表) 荒木和憲「『前近代日本-アジア関係資料デジタルアーカイブ』の開発」じんもんこん2025, 2025年12月
- ③⑰ (口頭発表) 高岸輝「幕末の外交戦略と美術―欧州列強に贈られた日本絵画の再発見」石橋財団フォーラム, 2025年7月9日
- ③⑱ (口頭発表) 高岸輝「大名美術史の目指すもの―日本美術史の時代区分および都鄙モデルの再構築―」第4回大名美術史研究会, 2025年8月7日
- ③⑲ (口頭発表) 高岸輝「日本中世におけるやまと絵屏風の展開と「耆英会図」(韓国国立中央博物館蔵)の画中屏風(일본 중세시대 야마토에병풍의 전개와 국립중앙박물관 소장 <기영회도> 속 병풍)」第14回 国際学術講演会―美術史学者招待講演会: 東アジア美術における融合―陶と画(동아시아 미술의 융합 陶와 画), 2025年9月6日
- ④⑩ (口頭発表) 高岸輝「幕末画壇の展開と文久遣欧使節(1862)―徳川家茂から欧州君主に贈られた絵画を中心に―」国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション―遣外使節団の贈答品を探して―」, 2026年1月11日
- ④⑪ (口頭発表) 荒川正明「磁器製大型盆器-園芸文化を牽引する徳川將軍家の象徴」国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション―遣外使節団の贈答品を探して―」, 2026年1月11日
- ④⑫ (口頭発表) 黒川廣子「使節団贈答の置物(主に金工と水晶)について」国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション―遣外使節団の贈答品を探して―」, 2026年1月11日
- ④⑬ (口頭発表) 松島仁「狩野董川中信筆『富士飛鶴図』と徳川將軍の外交贈答品としての絵画」国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション―遣外使節団の贈答品を探して―」, 2026年1月11日

- ④④ (口頭発表) 宮崎克則「シーボルト事件」福岡県柳川市大和町「ふるさと歴史講座」, 2025年9月27日
- ④⑤ (口頭発表) 山崎幸治「Indigenous people and museum」"GCTF Workshop: The Prosperity of Indigenous Peoples across the Indo-Pacific.", 2025年4月8日
- ④⑥ (口頭発表) レイチェル・ピート＝アンダーヒル「江戸幕府からヴィクトリア女王への贈答品(1860,1862,1864年)―展覧と分配」国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション―遣外使節団の贈答品を探して―」, 2026年1月10日
- ④⑦ (口頭発表) ロジーナ・バックランド「Staging the Samurai」New Perspectives on the Presentation of Japanese Art II, 2025年12月11日
- ④⑧ (口頭発表) アレクサンドラ・クルヴェロ「19世紀における日本からポルトガルへの外交贈答品」国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション―遣外使節団の贈答品を探して―」, 2026年1月10日
- ④⑨ (口頭発表) ダン・コック「文化的価値の誤解―オランダにおける日本の外交贈答品の受容」国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション―遣外使節団の贈答品を探して―」, 2026年1月10日
- ⑤⑩ (口頭発表) 三木美裕「Exhibiting Japan: Exploring how Japan is Curated and Presented in the UK」Exhibiting Japan: Exploring how Japan is Curated and Presented in the UK, 2025年5月19日
- ⑤⑪ (口頭発表) 佐藤寛介「日本甲冑の象徴性」国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション―遣外使節団の贈答品を探して―」, 2026年1月11日
- ⑤⑫ (口頭発表) 鄭美娟「朝鮮通信使に贈られた屏風にみる近世やまと絵 大画面の展開―古典主題の受容を中心に―」第78回 美術史学会全国大会, 2025年5月25日
- ⑤⑬ (口頭発表) 鄭美娟「文化度贈朝屏風(1811年)にみる公家主題とその浮上 ―「博雅琵琶伝授・時秋笙曲伝授図」を中心に―」第4回 大名美術史研究会, 2025年8月7日
- ⑤⑭ (口頭発表) 鄭美娟「近世幕府外交と朝鮮国王に贈られた屏風―韓国での再発見と玉里島津家模本の新出を機に」国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション―遣外使節団の贈答品を探して―」, 2026年1月11日
- ⑤⑮ (口頭発表) 吉崎雅規「幕末期幕府の遣外使節と江戸の世相」国際シンポジウム「幕末外交と日本コレクション―遣外使節団の贈答品を探して―」, 2026年1月10日
- ⑤⑯ (MISC) 日高薫「歴史研究フロンティア 在外日本資料から見る〈世界〉」『REKIHAKU』, 017, 2026年2月26日, 国立歴史民俗博物館
- ⑤⑰ (MISC) 高岸輝「復元・複製・修復から日本美術史を再構築する―東京大学駒場博物館 Reproductions展によせて」, 2025年5月号, 2025年5月1日, 岩波書店

【展示】

- ①共催展示「Echoes of Friendship: The Squire Family in Meiji Japan」
会場：ダラム大学東洋博物館
会期：2026年11月25日～3月22日
主催：国立歴史民俗博物館, ダラム大学東洋博物館
- ②展示関連行事「Lafcadio Hearn Project - Creating a World of Expression」
会場：帝京大学ラフカディオ・ハーン文化センター
会期：2026年3月18日
主催：ダラム大学東洋博物館
共催：国立歴史民俗博物館, 帝京大学
ダラム大学東洋博物館で開催中のスクワイア家の展覧会の関連行事として, 朗読とピアノの公演を共催した。

5. 研究組織 (◎は研究代表者)

(館外)

岩淵 令治 学習院女子大学・教授
 小野 将 東京大学史料編纂所・准教授
 堅田 智子 関西学院大学・准教授
 宮坂 正英 長崎純心大学・客員教授
 横山 伊徳 東京大学史料編纂所・名誉教授
 ラインハルト・ツェルナー ボン大学・教授
 湯川 史郎 ボン大学・専任講師

エステル・ボエール ギメ東洋美術館・学芸員
 ポール・マイケル・テイラー スミソニアン国立自然史博物館・アジア文化史プログラム長
 ロバート・ボンシオン スミソニアン国立自然史博物館・アジア文化史プログラム・フェロー
 ベッティナ・ツォルン ウィーン世界博物館・アジア部門長
 ハンス・トムセン 学識経験者（チューリッヒ大学・元教授）
 ジラルデッリ青木美由紀 イスタンブール工科大学・准教授補

（館内）

工藤 航平 本館研究部・准教授
 澤田 和人 本館研究部・准教授
 島津 美子 本館研究部・准教授
 鈴木 卓治 本館研究部・教授
 ◎日高 薫 本館研究部・教授
 福岡万里子 本館研究部・准教授
 鷲頭 桂 本館研究部・准教授

（協力者）

荒川 正明 学習院大学・教授
 荒木 和憲 九州大学・准教授
 大久保純一 すみだ北斎美術館・館長
 黒川 廣子 東京藝術大学大学美術館・館長
 小林 淳一 学識経験者（東京都江戸東京博物館・元副館長）
 鈴木 廣之 遠山記念館・館長
 高岸 輝 東京大学大学院・教授
 保谷 徹 東京大学・名誉教授
 松井 洋子 学識経験者（東京大学史料編纂所・元教授）
 松島 仁 静岡県富士山世界遺産センター・教授
 三浦 篤 大原美術館・館長
 宮崎 克則 西南学院大学・教授
 山崎 幸治 北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授
 脇田 美央 ウィーン応用美術博物館・アジア美術部長
 レイチェル・ピート ロイヤル・コレクション・トラスト 学芸員
 ロジーナ・バックランド 大英博物館・学芸員
 アレクサンドラ・クルヴェロ リスボン新大学・教授
 ダン・コック オランダ国立世界博物館・学芸員
 アレクサンダー・ホフマン ベルリン東洋美術館・教授
 ウド・バイライス シーボルト協会・会長
 ブルーノ・リヒツフェルト 学識経験者（ミュンヘン五大陸博物館・元副館長）
 三木 美裕 グラム大学・リサーチフェロー

【基幹研究】

（５）平安期の社会の構造と変動を外的インパクトから捉える—交流・天災・疫病— 2025～2027年度 （研究代表者 田中 史生）

1. 目的

平安時代は、古代から中世への移行期であり、いわば変動の時代である。しかし、前代と比べ大きく分節化・多様化した政治・社会状況と、国史後の時代という史料制約のため、その動きを構造的・通史的に捉えることは難しい。けれどもこうしたなか、近年、国際交流史や、災害史・疫病史、気候変動への関心が高まっており、これら

の研究が大きく進展している。いずれも現代的課題に対する歴史学からの応答として、また歴史社会に変動をもたらした外的要因として、特に注目されている研究テーマである。こうした新たな平安時代史研究の動向は、本館が2022年度から基幹研究のテーマとして掲げる「環境や交流からみた日本歴史の動的研究」とも親和性が高い。上記を踏まえ、本共同研究の目的は、社会変動の外的インパクトともなる交流・天災・疫病をキーワードに、平安期の社会の構造と変動を、特に地域社会の動きに注目しながら、通史的かつ具体的に捉えることにある。本研究では、文献史学・考古学を基礎として、現地調査をもとに地域の景観が古代から中世にかけてどのように変動したかを具体的に把握した上で、その歴史的背景を探る。また国際環境の変動や、災害・疫病の発生が、平安期の列島の諸階層・諸地域にどのように受け止められ、認識され、また社会変動をもたらしたかを、対外交流だけでなく、国内の交流状況や中央・地方のネットワークにも留意し検討する。これらによって、平安時代の列島社会において、外的インパクトが様々な歴史的主体に連鎖的に影響を与えていった構造を明らかにしていきたい。

2. 今年度の研究計画

本研究では、共同研究員・研究協力者による研究会を3回開催することを計画した。第1回研究会では、本共同研究の主題とかかわる各自のこれまでの研究蓄積と、具体的な課題を整理し、その共有をはかることを目的とし、第2回と第3回研究会において、各自の分担テーマのうち、9～10世紀に関する研究の報告を行い、画期や変化の時期・内容の共通性や関連性について探り、それによって発見された新たな知見と課題を共有することを目的とした。また、平安期の国際交流の拠点となった北部九州で交流実態や地域変動にかかわる現地調査を行い、あわせて、上記研究会の1回を福岡（福岡大学を予定）にて開催し、九州の研究者との意見交換も行うこととした。また韓国において、高麗時代の資料調査を通じて同時代の日本との比較を行うことも予定した。

3. 今年度の研究経過

①共同研究に向けた準備・検討会

3月13日（13：30～17：00）、本館において開催した。研究代表者が2025年度から開始される共同研究の趣旨・目的を説明し、具体的な作業や今後のスケジュールについて意見交換を行った。参加者は10名。

②第1回共同研究会

6月14日（13：30～17：30）・同15日（9：30～14：30）に本館において開催した。共同研究のメンバーが、各自の本プロジェクトとかかわる研究を紹介し、課題点・提言等を報告した後、意見交換によって共同研究の全体の論点や課題、役割の確認や調査等の方向性を具体的に整理した。参加者は10名。

③第2回共同研究会及び現地調査

8月28日～同30日に福岡において開催した。28日（13：30～17：30）は、久山町の首羅山遺跡を調査した。現地では、久山町教育課・江上智恵氏、九州歴史資料館・井形進氏による案内・解説を受けた。案内者を除く参加者は9名。29日（9：00～17：30）は福岡の研究者をゲストスピーカーとして迎えた研究会を福岡大学において開催した。報告は共同研究のメンバー2名（手嶋・村木）と、ゲストスピーカーの福岡市埋蔵文化財課・菅波正人氏、福岡市博物館学芸課・朝岡俊也氏、福岡大学人文学部・桃崎祐輔氏、古都大宰府保存協会・重松敏彦氏が行った。参加者は21名。30日（9：30～15：00）は朝岡俊也氏の案内で、那珂川市裂田溝と福岡市南区野多目地域について、水利関連の踏査を行った。参加者は9名。

④第3回共同研究会

2026年1月10日（13：00～17：30）・11日（9：30～17：00）・12日（9：30～15：30）に本館において開催した。9～10世紀を中心に検討を行い、報告は、共同研究のメンバーの8名（報告順に田中・蓑島・森田[RA]・小倉・笹生・堀・本庄・永田）と、ゲストスピーカーの青山学院大学文学部・岩井浩人氏が行った。参加者は11名。

⑤古代・中世の宗像に関する現地調査

2026年2月21日～24日に実施した。21日は小呂島、及び博多遺跡群の立地調査、22日は汐入川河口部周辺の遺跡・神社の立地に関する調査、23日は釣川流域の遺跡・神社の立地に関する調査、24日は在自西ノ後遺跡の立地、及び出土遺物の調査を中心に行った。また在自西ノ後遺跡の調査については、福津市教育委員会文化財課の高木慎太郎氏の協力を得た。参加者は5名。

なお令和7年度は、海外調査として韓国において高麗時代の資料調査を通じて同時代の日本との比較を行う予定であったが、担当メンバーと現地との間の調整に遅れが生じたため、最終年度に延期して実施予定である。

4. 今年度の研究成果

第1回研究会では、中央と地方の関係性、対外政策、神祇・仏教政策、疫病への対応策などが、いずれも時期を

重ねるように、9世紀後半から10世紀に段階的に変化していたことが確認されたことは、本共同研究の課題を絞り込む、重要な成果の一つである。また、8世紀後半から11世紀の西海道諸国や琉球列島、北海道の地域的な動きが、ユーラシア大陸東方の動きと連動して、同時的・段階的に変化していることも確認された。ユーラシアの政治情勢の変化や、交易者たちの活動の消長といった国際的な社会環境の変動が、「日本」の周縁地域の変動に影響を与えていたことが想定された。

第2回研究会は、福岡県在住の研究者をゲストスピーカーとして、主に平安時代の九州北部に焦点をあて、検討を行った。ここにおいて、文献史学からは、宗像氏の動向から、延暦期と9世紀後半～10世紀前半に氏族の変化が起こっていたことなどが指摘された。また考古学からは、福岡平野では9世紀初頭前後に比較的大規模な洪水が発生したとみられること、9世紀後半～12世紀の大宰府は遺構面が削られて検出が困難なほど、土地が安定しない状態が断続的に続いていたことが指摘された。また平安期の水利は5世紀の水利開発に規定されていることも指摘された。こうした北部九州の変動は、全国的な傾向と一致する部分と一致しない部分があり、この異同の背景の検討が今後の課題となる。また現地調査では、博多東方の首羅山遺跡の国際環境と結びついた特異性を具体的に把握できた。また那珂川市の水利の状況を踏査し、現在の地形に残された重層的な土地改変の歴史を確認できた。

第3回研究会は、9～10世紀を中心に検討を進め、地域社会の変動における10世紀の画期性と、その前提に9世紀の動きがあることが、共通して確認された。また文献史の分野では、王臣家の動きや受領制の地域的な展開、差異性の検討が、今後の課題として残った。一方、考古学の分野では、北東北地域の集落からみた地域変動が、関東の遺跡・遺構から捉えられる変動と、現象的・時期的に一致することが確認されたことが、重要な成果である。

古代・中世の宗像に関する現地調査では、小呂島において嶽宮神社の背後に石塁の列を確認し、七社神社の脇で近世以前の板碑を確認した。また、宗像においては、現在の地形や地形図から、河川河口部や内海の変化、砂丘列の形成等について、遺跡と対照した復元的調査を行った。在自西ノ後遺跡の遺物調査では、貿易陶磁に加え、中国産とみられる12世紀前後の大甕やすり鉢等、多数の雑器を確認した。

5. 研究組織（◎は研究代表者 ○は研究副代表者）

- ◎田中 史生 早稲田大学文学学術院・教授
 小倉 慈司 青山学院大学文学部・教授
 笹生 衛 國學院大學神道文化学部・教授
 手嶋 大侑 同朋大学文学部・専任講師
 永田 英明 東北学院大学文学部・教授
 堀 裕 東北大学大学院文学研究科・教授
 本庄 総子 京都大学大学院文学研究科・准教授
 蓑島 栄紀 北海道大学アイヌ・先住民研究センター・准教授
 村木 二郎 本館研究部・准教授
 ○三上 喜孝 本館研究部・教授

（6）東アジアにおける文化の伝播と地域的展開に関する学際研究―「耕織図」の日韓比較を中心として― 2025～2027年度 （研究代表者 松田 睦彦）

1. 目的

本共同研究は、ある地域の文化が他の地域に受け入れられ、その地域の事情を反映しながら独自の展開をとげていく様相を、学際的な手法によって明らかにすることを目的とする。具体的には、中国より伝わって以来、それぞれ独自の変化をとげた日韓の「耕織図」の比較をとおして、両国の「耕織図」がたどった様式や画題等の歴史的変遷と、そこから読み取ることのできる両国における社会的、文化的背景の特徴を明らかにする。本研究では、従来は等閑視されてきた、韓日双方における「耕織図」の比較研究を行い、東アジアに伝播した「耕織図」の受容の様相を明らかにすることを目指す。

2. 今年度の研究計画

歴博（F-161四季農耕図屏風、H-20蚕織耕絵巻等）や韓国民博（数十点を所蔵）の所蔵品をはじめ、日韓の博物館・美術館に所蔵される「耕織図」の調査を実施する。本共同研究では企画展示における成果の公開をめざす。し

たがって、とくに展示で活用する可能性の高い、日本に所蔵される朝鮮系の「耕織図」を中心に調査を実施する。また、「耕織図」に描かれた農具等については日本各地の収蔵機関での調査を実施するとともに、大阪の国立民族学博物館において朝鮮半島の農具等を調査する。当該年度の研究成果は、歴博または韓国民博で開催する研究会で共有する。

3. 今年度の研究経過

第1回研究会（韓国）10名参加

5月8日（木）韓国国立農業博物館にて耕織図調査（水原）

5月9日（金）牛耕調査・農具調査（洪川）

5月10日（土）農楽調査（原州）、麻織物調査（安東）

5月11日（日）絹織物調査（慶州）、農業村落調査（良洞）

第2回研究会（日本）10名参加

6月6日（金）佐賀県立博物館にて四季耕作図調査（佐賀）

6月7日（土）太宰府天満宮御田植祭調査・九州国立博物館展示見学（太宰府）

6月8日（日）絣工房調査（久留米）、農耕絵馬調査・うきは市新川田箆伝統的建造物保存地区見学（うきは）

6月9日（月）福岡市博物館にて農耕図調査（福岡）、宮地嶽神社民家村自然広苑見学（福津）

第3回研究会（日本）5名参加

10月22日（水）飯田市考古博物館見学（飯田）

10月23日（木）駒ヶ根シルクミュージアム見学・ふるさとあゆみ館見学・駒ヶ根市民俗資料館見学（駒ヶ根）、飯田市美術館見学（飯田）

10月24日（金）岡谷蚕糸博物館（岡谷）、諏訪市博物館・諏訪大社（諏訪）

第4回研究会（韓国）13名参加

11月6日（木）韓国国立民俗博物館坡州館見学（坡州）

11月7日（金）韓国国立民俗博物館・国立歴史民俗博物館 第4回韓日学術交流 国際学術大会「耕織図」韓日農耕生活文化を開催（ソウル）

第5回研究会（日本）14名参加

1月31日（土）研究会を開催（歴博）

2月1日（日）研究会を開催（歴博）

4. 今年度の研究成果

韓国においては朝鮮時代後期の耕織図および農耕文化の調査を実施した。また、日本においては近世後期の耕織図（四季耕作図）や農耕絵馬、田植神事や染織、養蚕および蚕糸生産にかかわる調査を実施した。その成果は11月にソウルで韓国国立民俗博物館との共催で開催された国際学術大会において発表された。また、1月には歴博において研究会を開催し、これまでの研究成果を4名による発表により共有した。

5. 研究組織（◎は研究代表者 ○は研究副代表者）

キム・ユンジョン 韓国国立民俗博物館・学芸研究官

ジョン・ヨンハク 韓国国立民俗博物館・学芸研究官

ヨム・フィジェ 韓国国立民俗博物館・学芸研究士

イ・スヒョン 韓国国立民俗博物館・学芸研究士

ジョ・スヒョン 韓国国立民俗博物館・学芸研究士

植松 瑞希 東京国立博物館学芸研究部・主任研究員

近藤 大知 飯田市美術館・学芸員

武井 弘一 金沢大学人間社会研究域学校教育系・教授

水野 裕史 筑波大学芸術系・准教授

大久保純一 本館 名誉教授

関沢まゆみ 本館研究部 民俗研究系・教授
 工藤 航平 本館研究部 歴史研究系・准教授
 ○鷲頭 桂 本館研究部情報資料研究系・准教授
 ◎松田 睦彦 本館研究部 民俗研究系・教授

(7) 高齢多死社会における生前から死後の移行に関する統合的研究 2023~2025年度 (研究代表者 山田 慎也)

1. 目的

本研究は、高齢多死社会に突入した現代において、老いを含めた生前から死後までの人々の営為を、統合的に捉えるために学際的観点から検討し、現代日本社会の生と死の観念と諸相を明らかにすることを目的とする。

日本では世界の中で最も高齢化が進行し、今後死亡人口は増大していくことが予測され、2040年には年間168万人が死亡する多死社会を迎えることとなる。同時に人口減少も進んでいき、高齢者の割合は今後もさらに増加していくことも予測されている。また生涯未婚率の上昇や家族観の変化によって、単身世帯が増加し、引き取り手のない死者の増大など、従来の高齢者と死を巡る文化は大きな変容を余儀なくされている。

こうした生前から死後の過程において、老年期となると介護者や福祉行政などの対応がなされ、さらに病気や障害となると医療者による治療が行われ、多数の人々は病院で死亡している。死亡後から葬儀まではおもに葬儀業者が対応し、納骨などは墓石霊園業者に依頼することとなる。このようにあらゆる過程において専門家への依存度が高くなっているのが、現代社会の特徴である。

そこで第1に、生前から死後の過程において専門家への依存度が高まった道程を明らかにし、その要因と包含する課題について歴史的に遡りつつ分析を行う。そこでは、専門性の深化と、家族や地域といった従来のコミュニティとの関係の変化に留意しつつ、その変容の実態を明らかにする。特に死にゆく過程については、従来ガン患者や小児患者などの研究に限定されており、高齢者の病院・施設死という最もメジャーな死を対象とすることで、その全体像を把握することが可能となる。

第2に、それぞれの過程における専門家の介在によって、より高度なケアなどの実践がなされるようになる一方、前後の段階の専門家との連携は必ずしも十分ではなく、時には分断が生じている。特に生前の段階では高齢者は地域包括ケアシステムにより介護や福祉、医療の連携は基本的になされるようになってきたがそれでも十分とは言いがたい。まして死後の段階では、基本的に近親者を通して葬儀業者の対応となり、例外的に身寄りのない場合に行政が関与する。しかし単身世帯の増加により、生前の介護の段階から死後の諸事も見据えた対応が必要となってきたが、現実には大きく分断されており、生前と死後を架橋する必要が実際には生じている。このような状況は研究分野においても同様で、生前は社会福祉学や医学、人類学、社会学等が、また死後は民俗学や宗教学、文化人類学などの葬送研究であり、相互の連関は十分ではない。よって統合的な検討が社会の実践においても、研究においても必要である。

第3には、このような架橋を行う新たな概念の構築である。今後の社会状況に合わせ、生前から死後への移行についての連続的、統合的視点が必要である。本研究では健康年齢がおわり、介護が必要となった時期から死に至り葬儀、埋葬、納骨の期間だけでなく、その後の供養や追悼までの、生前から死後の移行プロセスの包括的な概念の構築によって連携した対応が可能となり、安らかに老いと死を迎え、残された関係者も安心してその人を見送り、追悼していくことができる。これにより現代社会に生者と死者の新たな共同性を構築していくものである。

2. 今年度の研究計画

本研究の特徴は、生前から死後の過程について、民俗学、文化人類学、社会学、宗教学、歴史学、考古学、医学、死生学等、学際的視点から統合的にとらえ、専門化によって分断された人生の過程を連続的に把握することである。今年度は最終年度であり、それぞれの共同研究員が架橋を図りながら、とりまとめを行っていく。

3. 今年度の研究経過

今年度は3回の研究会を行った。第1回目は2025年7月19~20日に歴博にて開催した。松繁卓哉氏が「養老院の登場・終焉:高齢多死社会以前の「老」の社会制度」を、山田慎也氏が「高齢者施設での死者儀礼の取り組み」を、浮ヶ谷幸代氏が「死をめぐる語りが増殖する場:アミターバの遺族会〈偲ぶ会〉を中心に」報告を行い、それについて議論を行った。

第2回目は、2025年12月20日に歴博で開催した。徳野崇行氏「葬儀や供養をめぐる意識や実施状況の推移：仏教教団による宗勢調査の結果を中心に」を、土居浩氏が「表現文化社『SOGI』とその同時代」を、大場あや氏が「多文化社会カナダにおけるFuneral Homeの役割：宗教コミュニティとの関係に注目して」を報告の後、井口真紀子氏が成果報告への構想を発表し、その後討論を行った。

第3回は、2026年2月14日に歴博にして実施した。最終的な報告書について、田代志門氏、問芝志保氏、瓜生大輔氏、牛窪彩絢氏、朽木量氏、関沢まゆみ氏、浮ヶ谷幸代氏などが構想を報告し、議論を行った。

またそれぞれ必要に応じて現地調査なども行っている。

4. 今年度の研究成果

今年度は、研究のとりまとめを意識した研究会であった。高齢者施設について老人福祉政策との関連からその歴史の変遷について検討を行った。そこでは身寄りのない困窮高齢者の保護を目的としたものから、高齢者すべての対応に大きく変化しており、介護の主体が家族から社会へと変化していく様相について考察した。こうした介護の主体の変化については民俗レベルからの検討も行われ、近江地方の老人専用の隠居室が次第に使用されなくなる一方で、介護施設など専門家の利用が進んでいった事例も報告された。

さらに医療現場や介護現場などにおいて、死後の領域への業務拡張が生じていることが明らかとなった。医療施設によっては、日常的に臨床宗教師がおり、入所者が亡くなるとお別れ会を実施し、またその後の追悼会や遺族ケアの集会などを行う機関も出てきている。また介護施設においても、死亡時のお別れ会や葬儀を積極的に展開する業者の事例も報告された。

一方で、死後の対応としての葬儀に関しても、時間的短縮が行われていくことが、宗勢調査などからも把握できるが、こうした変容には火葬技術や造墓技術など近代産業の影響が大きいことが判明した。また墓じまいなどの現象が注目されているが、墓じまいが生じるだけの墓の増加する時代についての検討が不足しているなど、長期的視野を持つての検討が必要であるとの指摘があった。

5. 全期間の成果

今回、生前から死後への対応について、学際的な分野からの検討が行われたのはかつてない取り組みであり、刺激が多く、実り豊かな研究会であった。そのなかでもまず第1に生前から死後の対応における専門家への介在について検討を行った。そこでは医療と福祉の制度化により、介護保険制度など高齢者全てが社会的制度として介護を受け、必要に応じて施設利用できるようになり、死後の対応も葬儀産業や供養産業の利用が進み、家族の関与の度合いは縮小しているものの、その役割がなくなったわけではない。とくに近親者がいない高齢者については諸課題が生じて社会問題化しており、それらの対応にむけて、さまざまな取り組みが行われることが明らかとなった。

第2にこうした専門者間の連携も次第に構築され始めていることについて明らかとなった。高齢者施設においても、看取りが行われるだけでなく、その後の葬儀やお別れ会、また遺族ケアなども行われている。さらに葬祭業者が死後事務委任などの生前契約を行うようになっている。さらに寿陵という営みは相続税法の改定によるものが大きいとの考察もあり、これが現在の墓じまいの要因ともなっていることも明らかとなった。

第3には、生前から死後への移行に関する検討であるが、近代以前はエルツの指摘するように臨終後の死者儀礼によって、死が社会的に確定していくものであったが、近代以降、死が瞬間と捉えられ、死後の儀礼プロセスは短縮化していった。一方、医療化により死亡までのプロセスが長期化していくなかで、グレイザー、ストラウスなどのアウェアネス理論やサドナウの研究により、次第に社会から遮断され死者としての認識がとくに医療者の間で進んでいくことが明らかとなった。こうして移行期が生前にシフトしているのである。

しかし現在、在宅医療の現場などでは、死の確認も幅を持っており、死後も医療者などに影響を与えていることが判明した。さらに葬儀産業や宗教者による、生前から死後を見据えた関わりが生まれるとともに、死の幅の認識が必要であることが明らかとなり、その幅に多様な人々の連携が生じはじめていることも判明した。

6. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

井口真紀子 祐ホームクリニック大崎・院長
 浮ヶ谷幸代 相模女子大学・名誉教授
 朽木 量 千葉商科大学政策情報学部・教授
 小谷みどり 一般社団法人シニア生活文化研究所・代表理事
 田代 志門 東北大学大学院文学研究科・准教授
 問芝 志保 東北大学大学院文学研究科・准教授

土居 浩 ものつくり大学教養教育センター・教授
 徳野 崇行 駒澤大学仏教学部・准教授
 松繁 卓哉 追手門学院大学社会学部・教授
 上野 祥史 本館研究部・准教授
 内田 順子 本館研究部・教授
 関沢まゆみ 本館研究部・教授
 ○吉村 郊子 本館研究部・助教
 ◎山田 慎也 本館研究部・教授

(8) 死者への行為が形成する認識と社会変容 2023～2025年度 (研究代表者 上野 祥史)

1. 目的

死の扱いには、人間とはいかなる存在かという認識が反映されている。生と死が重層するなかで社会は形成され存続するため、死は社会を定義づける主要素だといえる。神への供犠や故人の神格化が象徴するように、死のとりえ方や人間のとりえ方は、死者とのかかわり—行為の実践—のなかで顕在化した。

死者とのかかわりは、葬送に限定してとらえることが多いものの、特定の時間には限定されない。行為（儀礼）や物証（遺品）を通じて、不可視な死者を実体化（物質化）させることも、死者とのかかわりの一つである。系譜・系統が権威を正統化する装置として機能したように、死者とのかかわりが生者の関係を新たに規定し、新しい社会を決定づけることは、家族から地域社会や国家に至るまでさまざまなレベルの共同体にみえている。死者とのかかわりが、社会の検討に重要な視点・論点を提供することは、言を俟たない。

死者をめぐる行為は、思想や信仰の体現・具現として理解される傾向が強いが、観念を先行させた理解のみでは不十分である。行為の実践や反復が認知や思考を形成し、その認知や思考が行為を決定づけるように、行為と観念の相互作用を動的にとらえる実践論の視点に立つことで、死者へのかかわりは社会を分析する有効な指標となる。

本研究では、死者をめぐる行為の実践に主眼を置き、神霊など不可視な存在の実体化（物質化）との比較を通して、認知や思考の形成と行為の実践・反復との関係を検討する。研究分野や対象時空間を横断した議論を展開し、人類史研究に有益な検討視点の確立を目指す。それは、長子相続や直系継承を自明の帰結とみるような、歴史のなかの変化を不可逆な発展や進化にとらえる現代的思考への人類学研究からの提言ともなる。

2. 今年度の研究計画

本研究では、日本列島を主たる対象としつつ、中国やラテンアメリカなど列島外を対照して、死者へのかかわりを実践論的にとらえる。多様な時空間での事例を対比することで、死者への行為の実践と認知の形成が社会の形成や維持・変革に果たした役割・作用を検討する。

今年度も、上記共通項目に沿い既存の議論や成果を整理し、共通の論点を形成することを目的に、3～4回の研究会を開催する。毎年一度は館外で開催する研究会は、日本列島内で予定している調査と関連した開催を計画している。基幹研究を構成する他の研究課題（申請課題「高齢多死社会における生前から死後の移行に関する統合的研究」）とは、情報や問題意識の共有を図り、研究成果の公開と情報発信の準備に取組む予定である。

前年度に引き続き、議論の対象となる資料については、基礎情報の共有のため、積極的に3Dデータの取得・作成に取組み、公開の形を意識したデータ制作に取組む予定である。

3. 今年度の研究経過

- 第1回研究会（2025年7月6日 於国立歴史民俗博物館・オンライン併用）
 フォーラム「さまざまな死から社会をよむ」に向けた検討
 上野 祥史・大西 秀之・川村 清志・中村 耕作・松本 雄一「2024年度ブルー調査の報告」
 今年度の研究計画の検討・確認
- 第2回研究会（2025年9月20日 於国立歴史民俗博物館・オンライン併用）
 仁藤 敦史「『日本霊異記』にみる他界観—黄泉の国から地獄への転換—」
 八木 春生「南北朝時代の仏教造像の制作と利用」
 上野 祥史「仏教信仰と造墓・他界（八木報告のコメント）」

○第122回歴博フォーラム（2025年9月21日 於国立歴史民俗博物

上野 祥史「社会をとらえる「死」という視点 — 松木武彦さんを偲ぶ—」

小倉 慈司「皇位の「継承」と過去の「記憶」

天野 真志「江戸時代の由緒探求と記憶の広がり」

山田 慎也「社葬のあゆみ」

川村 清志「集団の死とモニュメント— 現代日本における自然災害のモニュメントと死者の表象—」

松本 雄一「「過去」を埋込む先史アンデス社会」

中村 耕作「記憶なき過去に接点をもつ縄文社会」

土居 浩「多死社会からみるさまざまな死」

大西 秀之「さまざまな「死」と社会」

○第3回研究会（2026年1月30・31日、2月1日 於国立歴史民俗博物館）

吉澤 悟「火葬は死生観を変えたか？」

上野 祥史「中国における死者の物質化」

松本 雄一「死者が媒介するモニュメントと景観—ペルー、カンパナユック・ルミ神殿遺跡の事例より—」

中村 耕作「縄文時代における死者の物質化」

川村 清志「儀礼・記憶・モニュメント—死を反復し忘却するコミュニティ—」

大西 秀之「タテとヨコ—ふたつの集団出自論—」

小倉 慈司「追号に「後」をつけること」

天野 真志「近世期における由緒探求の行方」

山田 慎也「社葬に見られる死者の位置づけと会社組織の展開」

○東北における過去・死者・記憶の統合調査（2026年3月19日～21日）

リアスアーク美術館、気仙沼市・陸前高田市・南三陸町震災伝承館、多賀城跡

4. 今年度の研究成果

第1回研究会では、過去2年間の研究において提示された視座を集約し、さまざまな時空間への適応が可能な論点を整理した。「過去に接続し更新される現在」が共通のタームであり、「個別の死を契機とした継承」と「死＝過去を集合させて埋め込む更新」という二つのカテゴリーにわけてとらえ、通文化的な検討視点を提示した。

これをふまえて、研究成果公開の場の一つである歴博フォーラムでは、「継承される個別の死と社会」「モニュメント化する集団の死と社会」というテーマを準備した。そして、高齢多死の現代社会を対象とする研究課題と連携して、より広範な視点での総括を試みた。

第2回研究会および第3回研究会では、「現在に接続される過去」と「接続するメディア・実践」に注目して、過去への接続プロセスを分類し、各検討対象がいずれに該当するかを意識して各報告を展開した。

仁藤報告では、仏教的世界観の定着に伴う死者の身体や靈魂の認識の変容と葬送や死者（故人の人格）へのかかわりなど行為の変化との相関について検討された。そして、殯が重要な前代の日本列島と対照することで、死者をめぐる社会更新の質的变化を示した。

八木報告では、仏教が社会に定着してゆく中国南北朝期に注目し、石窟寺院という信仰の場での行動実践を整理し、不可視な存在たる仏（カミ）へのかかわりを示した。墓など不可視な存在である死者・故人へのかかわりと対照して、仏教信仰の導入と定着がいかに中国世界を変容させたのか、しないのかを展望した。

吉澤報告では、古代から中世の日本を対象として、火葬の普及が、死者に対する認識や行為をどのように変えたのか、造墓・葬送という行為の実践からとらえ、理念的に集約された文献記述との対照を試みた。墓は誰のために、なぜ存在するのか、死者・故人の物質化・可視化はいかにして実現するのか、意欲的な接近が図られた。

上野報告では、古代中国を対象に、死者へのかかわりと神へのかかわりを対照し、仏教の導入・定着が社会の継承や更新に与えた影響を検討した。明確に神を物質化し行為の対象とする仏教は、故人の人格や神を不可視なまま行為の対象とする古代以来の流れとは対照をなすことを示した。

小倉報告では、古代から近世に至る天皇を対象に、死後の名称付与を通史的にとらえ、その変遷過程と画期に注目して、追号に「後」を付けることの意義を探索した。諡号・追号は特定人格（個性）の付与であり、各時期の過去に対する認識が反映されている。より長期の時間幅で、過去を埋め込み現在を更新する動きをとらえた。

天野報告では、近世出羽における由緒探求に注目し、由緒の探求が同時期のいかなる社会要請を反映するのか、由緒の探求が創出する新たな社会関係に注目し、過去・系譜への接続を動態として描き出した。過去を実証するメディア、過去への接続を保証するメディアに注目し、過去への接続がいかに共有され意識と行為のなかに埋め込まれたのかを示した。

山田報告では、近現代社会の社葬変遷史を改めてとり、各時期の社会要請を反映した社葬の変化を評価した。特定個人の死を契機としつつも、社葬は一貫して公的人格を対象とする実践であり、社会と実践（儀礼）は相互に作用したこと、生者にとっては儀礼こそ重要であることを指摘し、世代継承における故人の象徴性を評価した。

松本報告では、古代アンデス社会において広域の社会連携を生じるチャビン現象下において、儀礼統合のメカニズムの解明と、その中で展開する過去への接続について検討がなされた。はじまりの死者と、行為・実践の反復が社会を更新する神殿更新なる特質をもつ社会との融合過程が示された。

中村報告では、死者の可視化装置に注目し、「遺体」「墓上構築物」「棺」「墓域」「遺体を伴わないモニュメント」「特定個人を記憶するモノ」など多様な対象に対して、行為・実践がいかに展開するかを示した。死者の物質化と実践行為を通文化的にとらえ、比較を通じて縄文時代社会の性格へと接近しようと試みた。

川村報告では、死者にかかわる儀礼と災害に関連したモニュメントを対照してとらえ、両者に通じる個別の死から共同体における死のコモレーションへの移行現象に注目し、儀礼とモニュメントの相補性について言及した。個別の死の忘却と共同化した死者の継承という相関を、物証と行為を交差させ評価する取り組みを展開した。

大西報告では、存在論・権力論の視点から死生観をとらえ、死が社会を規定することを改めて浮き彫りにした。社会を継承し更新する結合原理（出自集団論）がもつタテ（系譜・機能）とヨコ（関係・構造）という二つの側面を確認し、特定の脆弱な結合原理（地縁、血縁（生物的血縁と社会的血縁））を補強すべく世代継承をふくめた儀礼が創出されることを示した。

各報告は相互に補完しており、過去への接続を線形的な継承と集合的な死の二つの視座でとらえ、「直近の過去」「連続する過去」「隔絶する過去」など接続する過去の違いを意識するなど、「死者＝過去を埋め込み更新する現在」を相対的にとらえて評価した。

さいごに、個別の死と集合化した死者、儀礼とモニュメントの相補性を身体化することを目的として、さまざまな災害の痕跡と記憶、行為の実践が重層する三陸海岸南部での現地調査を実施した、

5. 全期間の成果

3年間の研究を通じて、死者へのかかわりを対象に、さまざまな時空の社会の特質を読み解き、それを比較する視座が形成された。日本列島を主たる対象としつつ、中国やラテンアメリカなど列島外を対照して、多様な時空間での事例を対比することで、死者への行為＝過去の埋め込み現在の更新が、社会の形成や維持・変革に果たした役割・作用を通文化的に検討する、という研究の目的を実現した。

古代の皇位継承、前近代の皇位継承、近世の家譜・由緒の探求、近現代の社葬の検討を通じて、日本列島における「世代継承を埋め込み更新された現在」の比較が可能となり、古代中国での神（仏）と故人への行為や仏教観念普及後の中世日本での死者への行為の検討では、恒常的世界観の普及と死者＝過去への接続の相関を明らかにし、死者へのかかわりにおける観念と実践との重なりやズレを鮮明にした。古代アンデス社会や先史縄文社会を対象とした検討では、死者・過去の物質化と行為の実践を対照させ、過去を埋め込み更新する社会の実態を相対的に描き出した。現代のエスニックグループや被災社会に注目した検討では、儀礼とモニュメントの相補関係あるいは、実践の反復と記憶・意識の形成との関係などが、包括的な視点で提示された。

いずれも、対象とする時空は異なるが、「死者・故人は如何なるメディアや行為・実践によって認識されたか」「行為・実践の背景にある意識と行為・実践を通じて形成される意識」を共通のタームとして、他の時空への適応が可能な視点を確立している。線形的な継承と集合的な死の二つの視座で「死者へのかかわり＝過去への接続」ととらえ、「直近の過去」「連続する過去」「隔絶する過去」など接続する過去の違いを意識するなど、「死者＝過去を埋め込み更新する現在」を相対的にとらえる視点を提示した。時空を横断する論点の提示は、統合・集約という方向性のみならず、個別研究を深化させるベクトルも備えた。集約と深化という二つの方向で、生と死をめぐる人類社会の比較研究を推進した。

その成果は、2026年度特集展示「モノと身体」において一部を公開する予定である。この展示は複数のテーマで構成しているが、「みえないものを形にする」「武装と身体」では不可視な存在や死者・故人の物質化と行為の実践、「災害と記憶とモノ」では、儀礼とモニュメントの相補関係について、共同研究で蓄積した議論を展示という形で情報発信する準備を進めている。

6. 研究組織（◎は研究代表者 ○は研究副代表者）

天野 真志 本館研究部

◎上野 祥史 本館研究部

大西 秀之 同志社女子大学現代社会学部

小倉 慈司 青山学院大学
 嘉幡 茂 京都外国語大学国際言語平和研究所
 川村 清志 本館研究部
 ○中村 耕作 本館研究部
 仁藤 敦史 本館名誉教授
 松木 武彦 本館研究部（～令和6年9月，副代表）
 松本 雄一 国立民族学博物館人類文明史研究部
 八木 春生 筑波大学大学院人間科学研究群
 山田 慎也 本館研究部
 吉澤 悟 奈良国立博物館学芸部
 （五十音順）

【基盤研究】

（５）顔身体土器の通文化比較にみる身体・モノ認識 2024～2026年度 （研究代表者 中村 耕作）

1. 目的

近年、文化人類学を中心に、広義のモノ研究やその拡張としての身体論研究への関心が高まっており、多様な視点による認知考古学的研究も増えてきている。本研究は、「ヒトとモノとの身体象徴認識を介した関係性」を大きな目的として目指しつつ、具体的な基盤研究として、顔・身体装飾を持った各地の土器（以下、顔身体土器）を取り上げ、出現プロセスや形状・用途などを統一した視点で比較することによって、身体・モノへの認識の普遍性と各文化の固有性を明らかにし、より広い比較のための研究視座を得ることを目的とする。

具体的には、象徴的意味において「顔・身体」が他の意匠と比べてどのような位置にあるのか？、顔・身体が付される「モノ」にはどのような特徴があるのか？という両面を問うことになる。

これまでも偶像（土偶・埴輪など）の検討が行われているが、それらが顔身体表現を第一義とし、具体的な用途が不明であるのと異なり、土器は煮沸・貯蔵・盛り付け・液体分配・棺などの機能的形状をもち、その用途達成が第一義である。顔身体表現が異なった器種に付されるとすれば、顔身体への特徴的な意識が、その土器が担った特定の行為に向けられたことを示す。つまり、顔身体・モノ（道具）双方から当時の象徴的認知を探ることが可能である。

研究代表者は、これまで縄文土器の各種顔身体土器の出現・展開プロセスを整理してきた。例えば縄文中期中部では、全身像造形から徐々に顔のみの造形に変化していく（＝胴と土器器体の融合）状況、後期東北では「器種の多様化→異形化→顔身体化」という複雑化の中で顔が表現されるというプロセス、さらには男性象徴である石棒と対峙させるために土器の突出部を打ち欠いて女性器形状とする事例などを明らかにしてきた。

本研究では、これを叩き台として弥生・中米・南米・中国・パプアニューギニアなどの各文化の専門家が、それぞれの社会背景や土器群全体の中での文化的コンテクストの中に顔身体土器を位置付けた上で、共通項目によるモデル間の相互比較を行うのが特徴である。例えば、縄文では鍋・皿・土瓶・壺・香炉形土器など多様な器種に顔が付されるが、他の文化では酒器や骨壺など特定の器種に偏る場合もある。上記のように、身体各部位と土器器体との関係性や、完成形だけでなく破壊行為その他の取り扱いも、文化によって異なる可能性が高い。さらに、日本列島では古墳時代以降に顔身体を付した容器は消滅するが、その意義についても検討を行う点に独自性があり、顔身体造形のもつメディアとしての意味の歴史性を問うことが可能である。

2. 今年度の研究計画

研究会・見学会を年3回程度実施し、顔身体をめぐる理論的検討や、各フィールドにおける顔身体土器をめぐる議論をおこなう。また、比較の基盤として縄文文化の顔身体土器の集成ならびに詳細未報告資料について新規図化を行い、資料集として刊行する。その際、館蔵の関連資料（複製品を含む）の活用を検討する。

3. 今年度の研究経過

【共同研究会】

第3回：國學院大學を会場に、同大学の「カミ学」プロジェクトと共同で、近年国内でも成果の紹介が増加してきた「宗教認知科学」について、考古学との連携を模索すべく研究会を開催した。宗教学の立場から本分野の分析を続けてきた藤井修平氏より、宗教認知科学の概要と、顔身体造形をめぐる議論を紹介いただいた上で、祭祀考古学の立場から笹生衛氏、認知考古学の立場から松本直子氏よりコメントがあり、共同研究メンバーを含む参加者との間で議論が行われた。「通文化比較」を行う本研究において、人類としての宗教的な認知の普遍的特性を理解すること、それをふまえた個別の歴史的評価を行うことの重要性が認識された。

第4回：早稲田大学本庄キャンパスの考古資料館を会場に、同所で保管されているパプアニューギニア資料をめぐって、見学会および高橋龍三郎氏、中門亮太氏からの報告をベースとした研究会を行った。これらは考古資料ではなく、現地の製作・使用状況がある程度まで民族誌的調査から判明している資料群であり、同じパプアニューギニアでも部族によって種類が異なり、用途や製作・使用の社会的性格なども異なることが示された。モデルとされるものの違いが、実際の造形の違いとして観察できるか、など考古資料の分析との整合性についても議論が行われた。

【合同調査】

上記第4回研究会に先立ち、中門氏と中村が資料群を調査し、今後3D化・図化する資料の候補選定やその方法について議論した。

【資料調査ならびに『縄文時代異形土器集成図譜Ⅲ顔身体土器2』の刊行】

昨年度に引き続き新たに図化するための資料の調査を行った。さらに、その報告ならびに既報告資料を含めた資料集成を行い、資料集を刊行した。特に近年新たな資料が注目されている福島県域については研究協力者の中野幸大氏によって事例集成ならびに編年的・系統的が初めて行われた。集成資料は、1990～2000年代の渡辺誠氏による約800点を大きく上回る1778点を収録しており、その変遷の概要をとりまとめた。基礎的資料として活用が期待される。また、昨年度にCT撮影を行った館蔵の小形遺跡の顔面付下部単孔壺について、これまでの経緯をまとめ、今後の展示活用が可能であると判断した報告を収録している。

【特集展示準備】

2026年度4月～5月に複数の関連プロジェクトと合同で、特集展示「モノと身体」が予定されており、その準備の過程で、モノ・身体論における顔身体造形の位置づけをめぐって議論が行われた。

【関連展示・講演会】

直接本プロジェクトとして実施したものではないが、上記パプアニューギニア資料については、山梨県立考古博物館において特別展「PAPUA×JOMON」が開催され、共同研究員でもある高橋氏・中門氏を含む講演会が開催された。また、神奈川県考古学会の講座として、座間市を会場に「縄文の顔を読み解く」が行われ、共同研究員の設楽博己氏と中村が登壇し、本プロジェクトの成果を踏まえた講演を行った。

4. 今年度の研究成果

中村耕作編2026『縄文時代異形土器集成図譜Ⅲ顔身体土器2』国立歴史民俗博物館 339頁＋カラー図版48頁

中村耕作2025「顔面把手付深鉢の胴部文様」『縄文時代』第36号

中村耕作2025「縄文土器の立体画とまつり」『土器の考古学』雄山閣

小林青樹2025「弥生土器の立体画とまつり」『土器の考古学』雄山閣

中村耕作2026「複数の顔をもった縄文土器—蟹ヶ澤例を考えるために—」『蟹ヶ澤遺跡出土資料調査・研究報告書』

座間市教育委員会

このほか、上記の講演会・講座を含む一般向けの講座等で本研究の成果を示している

5. 研究組織（◎は研究代表者 ○は研究副代表者）

◎中村 耕作 本館研究部・准教授

松本 直子 岡山大学文明動態学研究所・教授

光本 順 岡山大学社会文化科学研究科・教授

設楽 博己 東京大学・名誉教授

小林 青樹 奈良大学文学部・教授

松本 雄一 国立民族学博物館・准教授

渡部 森哉 南山大学人文学部・教授

今泉 和也 明治大学研究・知財戦略機構・客員研究員

今村 佳子 成城大学民俗学研究所・研究員
 高橋龍三郎 早稲田大学・名誉教授
 中門 亮太 早稲田大学文学部・准教授
 ○上野 祥史 本館研究部・准教授（令和6年9月より副代表）
 ○松木 武彦 本館研究部・教授（令和6年9月まで副代表）

(10) 「地域アーカイブ」の形成過程と郷土史家の役割に関する総合的研究 2024～2026年度 （研究代表者 小幡 圭祐）

1. 目 的

本研究は、地域のなかで重要性が認知された地域資料群＝「地域アーカイブ」の収集・整理・保存・提供に関する「地域アーカイブズ学」の構築の第一歩として、「地域アーカイブ」の収集・保存の歴史的経緯を考察するとともに、その中における郷土史家の役割を検討するものである。

現在、急激な少子高齢化にともなう人口減少、あるいは大規模災害などによって地域の存続は危機に瀕している。しかし、地域に危機がもたらされているのは、何も現代だけにとどまらない。近世以前においては、支配者間の戦争が後を絶えず、近世においては、転封・改易などによって、支配者がおびたしく交代した。さらに、近代においては、中央集権国家が成立するとともに、職業選択の自由化により人口が流動化した。そのような社会の激変の中にあっても、各地域にはさまざまな経緯によって「地域アーカイブ」が残されてきている。本研究では、古代・中世において幾度の大規模戦争にさらされ、近世には頻繁に領主が交代するとともに非領国支配が行われ、近現代においては、大規模火災や高度経済成長にともなう変化の著しかった山形県を事例として、地域に実際に残った、もしくは残らなかった「地域アーカイブ」の歴史的変遷を考察することで、「地域アーカイブ」の残存における通時的・時代的特質を明らかにしようとするものである。

また、本研究においては、「地域アーカイブ」の収集・保存における郷土史家に着目する。「地域アーカイブ」の収集は、史料保存機関や研究者、もしくは自治体のみが担い手であったわけではない。前近代において「地域アーカイブ」の保存・活用を担っていた藩校や藩の文庫が、近代になり解体されていく中で、史料の流出を防ぎ、また地域を基盤として活動を行った郷土史家の役割も見逃すことができない。彼らの活動の結実として県市町村史などが編纂され、それが現在の地域史の基盤になっているからである。

山形県においては、郷土史家の伊佐早謙（1858～1930）が収集した「林泉文庫」、経済学者で実業家の三浦新七（1877～1947）が収集した「三浦文庫文書」、豪農で知られた半沢久次郎為親（1770～1856）が蔵書1万冊を誇る私設図書館として明治期に開設した「曳尾堂文庫」などが、激変する時代の中で「地域アーカイブ」の収集・保存に尽力してきたことが知られているものの、彼らがどのような思想で収集・保存活動を行ったのかは必ずしも明らかになっていない。また、彼らが収集・保存した「地域アーカイブ」も、時代の変遷の中で散逸・分散したケースが多く、現状が当時の状況を示しているとは必ずしも言えない状況にある。そこで、本研究においては、山形県で活躍した郷土史家の活動の具体相とその活動を支えた思想を検討することで、「地域アーカイブ」の収集・保存に果たした郷土史家の役割を解明する。さらに、彼らが収集・保存し、現在散逸した「地域アーカイブ」の構造の復元を行うことで、彼らの目指した「地域アーカイブ」像の実態を精緻に解明する。本研究は山形県の「地域アーカイブ」の構築過程や郷土史家の活動を研究対象とするが、他の地域においても汎用性が高いテーマだと思われる。これらをモデルケースとし、他の地域にも敷衍できるような「地域アーカイブ」像の構築をめざす。

2. 今年度の研究計画

おもに、山形市出身の実業家・歴史家である三浦新七が収集した「三浦文庫文書」（山形大学附属博物館所蔵）の形成過程の解明、また三浦の影響のもとに創設された郷土博物館・郷土室の所蔵資料の復元を行う。それにより、近代山形の経済基盤を構築しながらも「山形県郷土研究会」を立ち上げ、地域史研究に尽力した三浦の功績とその思想を包括的に検討する。さらに、三浦の思想に影響を受けた郷土史家の後藤嘉一（1905～1990）の思想と「地域アーカイブ」蓄積に果たした役割について考察を行う（主な担当：天野・小幡・三上・沢山）。なお、研究会を歴博・山形大学・山形県立米沢女子短期大学などを会場として3回程度行い、進捗に応じて山形県外からゲストスピーカーを招聘して検討を加える。資料調査は、山形県内を中心に関連資料の所在する東京都などで適宜実施する。

3. 今年度の研究経過

(1) 研究会

第1回研究会 日時：2025年7月30日（水）13：30～17：00

会場：山形大学文社会科学部1号館演習室25教室 参加人数：8人

・ 沢山美果子（岡山大学）「三浦文庫文書が拓く可能性：性と生の視点から」

小幡圭祐（山形大学）「三浦新七・後藤嘉一と地域アーカイブ」

概要：共同研究において構築を目指す「地域アーカイブ」の射程と対象資料群の把握をおこない、これまでの研究蓄積によって解明された地域歴史文化像の課題と「地域アーカイブ」として提起する地域像の展望を議論した。

第2回研究会 日時：2025年10月13日（日）14：30～17：00

会場：国立歴史民俗博物館第1会議室 参加人数：7人

・ 佐藤琴（山形大学）「長井政太郎と山形大学附属博物館創設期に関する聞き取り調査（中間報告）」

・ 小幡圭祐（山形大学）「蔵書印から見た「三浦文庫文書」

概要：近世以来各地で集積される知的体系としての蔵書群とその近代的展開について検討するとともに、それらと平行して広がる郷土史家の活動について、他地域の状況を踏まえて議論した。

第3回研究会 日時：2026年2月23日（日）14：00～17：00

会場：山形大学小白川キャンパス人文社会科学部1号館1階101教室 参加人数：9人

・ 長南伸治（上山城郷土資料館）

「庄内の郷土史家 国分剛二の活動に関する一考察～国分旧蔵書簡群の分析を通じて」

・ 宮腰直人（同志社女子大学）「国分剛二の執筆活動と人物交流―郷土史家が拓いた可能性をめぐって―」

概要：近世以来各地で集積される知的体系としての蔵書群とその近代的展開について検討するとともに、それらと平行して広がる郷土史家の活動について、他地域の状況を踏まえて議論した。

(4) 資料調査

日時：2024年7月30日（土）10：00～12：00 参加人数：7名

調査対象：山形大学附属図書館所蔵三浦新七文庫

日時：2025年12月17日（水）～19日（金） 参加人数：1名

調査対象：沖縄県所在伊佐早謙関係資料（那覇市歴史博物館，琉球大学附属図書館，沖縄県立図書館）

日時：2025年12月19日（金）13：00～16：30 参加人数：1名

調査対象：宮内庁図書寮所蔵旧林泉文庫明德記

日時：2026年2月23日（月）10：00～12：00 参加人数：6名

調査対象：文翔館所蔵長井政太郎文書

日時：2026年3月27日（金）9：30～12：00 参加人数：1名

調査対象：東京大学史料編纂所蔵山形県探訪関係資料

4. 今年度の研究成果

今年度は伊佐早謙，三浦新七，後藤嘉一，長井政太郎，国分剛二といった，近代以降山形県の地域資料の保存・継承に影響を与えた人物の関係資料調査を重点的に実施し，各人物が集積した資料群の特質から彼等が見出そうとした地域像・歴史像について，研究会のなかで議論を重ねた。さらに，山形大学が所蔵する関連資料群の整理をおこない，幅広い利活用を促進するために山形大学が附属博物館が運営する「山形アーカイブ」<https://cherry.yum-archives.net/yamagata-archive/>にデータを掲載した。

5. 研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎小幡 圭祐 山形大学人文社会科学部・准教授
 石黒 志保 山形大学人文社会科学部・講師
 佐藤 琴 山形大学学士課程基盤教育院・教授
 新宮 学 山形大学・名誉教授
 小林 文雄 山形県立米沢女子短期大学・教授
 宮腰 直人 同志社女子大学・准教授
 沢山美果子 岡山大学・客員研究員
 堀井 美里 合同会社AMANE・業務執行社員

三上 喜孝 本館研究部・教授
○天野 真志 本館研究部・准教授

(11) 先端的同位体分析が拓く歴史資料研究の新展開 2025～2027年度 (研究代表者 若木 重行)

1. 目的

本研究では、同位体分析を利用した歴史資料研究の対象を拡大することを目的として、多様な材質の歴史資料に対して微量金属元素の同位体分析を正確に行うための分析手法の開発を主体とした方法論的な研究を行う。同位体分析の目的はいわゆる産地推定にとどめず、資料製作地の推定や食性の解析など人間活動により直結した問題に対して、エビデンスとなる基礎データを十分に取得し科学的な議論に基づいた研究の方法論を確立することにプライオリティを置く。

2. 今年度の研究計画

本研究では、具体的な研究項目として以下の課題を設定する：①古代漆製品の製作地推定、②火葬骨資料の食性分析、③貝資料の生息地分析、④木材資料の産地分析、⑤管玉等の材料である石材資料の原産地分析。研究期間を通して上記の5つの研究項目を並行して実施し、主たる分析となる各種の同位体分析は歴博の設備・機器を利用して行う。また、年2回の研究会を開催し、各研究項目間で問題点・解決法の共有を図る。

3. 今年度の研究経過

R7年度の研究会は、10月5日および2月22日に実施し、ゲストスピーカーとして名古屋大学の橋口准教授、東北大学の高柳准教授、スウェーデン自然史博物館の加藤博士を招聘した。また、RAとして筑波大のラウ・シンイー氏を採用し、東南アジア地域の沈没船の積荷であった鉛ガラス製品やビザンツ帝国で発行された銀貨に対する鉛同位体を利用した産地推定研究を追加で実施することとした。すべての課題で、歴博の機器・設備を利用した実験・分析に取り掛かるとともに、漆資料に対する分光分析や電子顕微鏡を利用した全域マッピング分析等、歴博で実施できない実験の必要が生じたため、他機関（名工大・KEK・関西学院大・北大）における分析実験も行なった。

4. 今年度の研究成果

本年度は、課題①・③・④・⑤について歴博の機器を利用した研究が開始し、進展は順調と言える。課題①については、同位体分析の前段階として電子顕微鏡分析による漆塗膜のキャラクタリゼーションを行うことで、漆器の製作技法や製作地に関連する情報を引き出しうることがわかってきた。今後は、同位体分析の前に漆塗膜薄片の十分な電子顕微鏡分析を行うこととし、分析計画を大きく変更することにした。課題①に関連する研究成果として2件の学会発表を行なった。また、2026年3月刊行の高松塚古墳出土品再整理報告書にて漆塗木棺の漆塗膜構造調査結果を報告した。

5. 研究組織（◎は研究代表者 ○は研究副代表者） ※令和7年度委嘱時点の情報です

谷口 陽子 筑波大学・准教授
高畠 孝宗 オホーツクミュージアムえさし・館長
成瀬 正和 東北芸術工科大学・客員研究員
岡田 文男 京都芸術大学・客員教授
大谷 育恵 京都大学・特定助教
南 雅代 名古屋大学・教授
佐藤 亜聖 滋賀県立大学・教授
田副 博文 弘前大学・准教授
大山 幹成 東北大学・助教
藤井佐由里 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館・学芸員
◎若木 重行 本館研究部・准教授
齋藤 努 本館研究部・教授
佐野 雅規 本館研究部・特任准教授

○坂本 稔 本館研究部・教授

(12) 欧文資料にみる近世初期日本の国際交流と文化・美術との相関 2025～2027年度 (研究代表者 鷲頭 桂)

1. 目 的

15世紀初頭以降、ヨーロッパ諸国は交易圏の拡大を目指して世界進出を本格化させ、各地の自然風土や生活習慣、政治および文化などについて多くの記録を著した。そのなかには、来日した商人やキリスト教宣教師らによる旅行記・書簡類・辞書のほか、ゴアやマニラなどの赴任地で日本の動向に接した人々の報告等、日本に関係する記録も多く見られる。これらの資料は、日本側の文献等には記録されていない情報を含んでおり、当時の日本社会、および国際的な日本の位置づけを理解する上で、多角的かつ補完的な視点を提供するものである。

本研究では、欧文資料を熟知した研究者と歴史学、美術史学、情報学など様々な領域の専門家が共同で、文献や実物資料から得られる歴史文化的情報を分析し、16世紀から17世紀における日本の社会・文化や、同時期の国際交流が日本に与えた影響を、とりわけ文化的・生活的側面に焦点を当てて解明する。

具体的には、日本における活動記録が豊富で研究蓄積も大きいイエズス会資料と、スペイン帝国圏の行政官・商人による報告書およびフランシスコ会関連資料より、対外交渉・物流・信仰・風習・文化に関する史料を選び、日本側の史資料および現物資料と対比しつつ分析する。以上を通して、16～17世紀の日本をめぐる人・モノ・情報の流通を学際的視点から把握することを目指す。そして、研究成果の一部を展示という形で一般に還元することを目指す。

2. 今年度の研究計画

本プロジェクトの初年度となる今年度は、16～17世紀日欧交流史に関する最新の研究動向を把握・共有するとともに、専門分野の異なる共同研究員間で研究史、研究課題、資料の所在等についての共通理解を構築する。その検討を踏まえて、文献、美術工芸品、地図といった資料そのものに加え、それらが収集された経緯についても調査を行う。

なかでも、1609年（慶長14年）にヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）へ帰任する途中の千葉県沖で難破し、御宿の漁師らによって救援されたロドリゴ・デ・ビベロ（1564～1636）が執筆した『日本見聞記』に注目したい。ビベロはフィリピン臨時総督を務めた高位行政官であり、約1年の滞日中、大多喜、江戸、駿府、畿内、豊後を訪問して徳川家康、秀忠らと面会した後に、メキシコに帰還した。1611年には返礼使節が来日し、家康に洋時計（重文、久能山東照宮所蔵）を献上した。さらに使節の帰国（1613年）に際しては支倉常長を正使とする慶長遣欧使節が同一船で太平洋を横断した。このように16世紀以来、対外交渉の先進地域であった九州・畿内に対し、徳川幕府成立後には江戸・駿府が政治的・外交的存在感を高めていく過程において、ビベロ来日は重要な出来事であったはずである。しかしながら、ビベロに関しては一定の研究が蓄積されつつあるものの、なお断片的な段階にとどまっている。そこで、本プロジェクトの導入段階として、ビベロの著作を元にスペイン帝国領（スペイン、ヌエバ・エスパーニャ、フィリピン）と日本との交易に関する記述を精査する。

研究の進捗に合わせて、考古学、歴史学などの研究者をゲストスピーカーとして適宜加えることを検討する。

3. 今年度の研究経過

国内研究会・資料調査、国外研究会・資料調査を各1回実施した。キリシタン史、日本近世史、ガレオン貿易、美術史の観点から、欧文日本関連資料等に記録された人・モノ・情報・技術の移動について報告した。また、研究会を通じて、スペイン帝国領と日本との交流の様相を解明する上で極めて重要なフィリピン（マニラ）における資料の所在情報および研究動向を把握したほか、日本と比較可能な同時代の国外における事例についての知見を得るなど、新たな視点を獲得した。これらの成果を、次年度の研究会・資料調査計画に反映させる。

【第1回研究会・資料調査 2025年10月10日～11日 仙台市博物館】

・研究会

報告1：鷲頭桂「欧文史料にみる16世紀～17世紀日本の絵画受容」

報告2：森脇優紀「在日イエズス会員が用いた日本のモノーイエズス会史料にみる日本の工芸品に対するヨーロッパ人の評価と受容（実用）の痕跡」

報告3：阿久根晋「欧亜の知・美・富の集積庫としてのマカオ・コレジオーアジュダ図書館所蔵マヌエル・パレトの「覚え書」(1616年)より—」

・資料調査

アマーティ『伊達政宗遣欧使節記』イタリア語版2冊, 同『伊達政宗遣欧使節記』ドイツ語版1冊
伊達家寄贈文化財「御物之帳」「伊達譜下巻」, スカッキ『健康的飲み物に関する論文』他

・展示見学

特別展「徳川十五代将軍展」

【第2回研究会・資料調査 2026年2月11日～14日 シンガポール・Asian Civilisations Museumほか】

・研究会

報告1：Clement Onn, “Across the Pacific: Art and the Manila Galleons—Concept and Structure”

報告2：鷺頭桂「南蛮美術を超えて—国際交流と表象の展開—Nanban Art and Beyond: International Exchange and the Expansion of Visual Motifs」

報告3：佐々木徹「慶長遣欧使節と南蛮貿易—The Keicho Mission to Europe and Namban Trade—」

・資料調査

聖母子像聖龕, 三連祭壇(磔刑)他

・展示見学

Asian Civilisations Museum, NUS Museum, National Gallery Singapore

4. 今年度の研究成果

第1回研究会においては、本プロジェクトの概要、計画を共有した。阿久根氏、森脇氏の報告では、イエズス会関連資料の成立背景が概略されたほか、贈答品・実用品にまたがる日本産品を記した個別の資料の紹介があった。鷺頭は日本語訳日本関連欧文資料をもとに、日本側の日記、旅行記、絵画資料との比較を行った。第2回研究会では、ACMで開催された“Christianity in Asia”展(2016)と“Across the Pacific: Art and the Manila Galleons”展(2023-2024)、メキシコシティColegio de San Ildefonsoに巡回中の“Somos Pacifico”展(2025-2026)を企画担当されたClement Onn氏より、16～17世紀の東西交易について、東南アジアからの視点から最新の研究動向を伺った。また、佐々木氏は慶長遣欧使節に見る貿易活動、特にアカプルコーメキシコシティー—マニラ間での商業活動の様相について報告した。鷺頭はACM所蔵品とビオンボに共通する図像の分析を試みた。その他には、鷺頭は今年度の研究成果の一部を、「日本絵画史にみる「鎖国」前夜の東西交流—『跨・1624：世界島臺灣』を受けて—」と題して国立台湾歴史博物館研究会(2025年5月31日)にて口頭発表し、「並笛図屏風」『国華』1561号(国華社, 2025年11月)に報告した。阿久根氏は『美術の窓』No. 502(2025年7月号)の巻頭特集「祈りに呼応する芸術 キリスト教美術の現在」において、初期洋風画の代表作品として知られる「萬国絵図屏風」および「元和8年、長崎大殉教図」の作品解説を執筆した。また、東洋文庫の欧文ジャーナル Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, No. 83(2026年3月末)に論文“António Francisco Cardim at the Conjunctions of the Far East and Portugal: Procurador, Propaganda, and the Surviving Presence of the Jesuit “Japan” Province”を発表した。ここではイエズス会による日本殉教者の証言調査とそれに基づく絵画・銅版画制作との連関を論じている。

また、今年度の調査研究を踏まえて、次年度にはゲストスピーカーを迎えた研究会や、一般向け講演会を行なう予定である。

5. 研究組織 (◎は研究代表者 ○は研究副代表者)

- 佐々木 徹 仙台市博物館・学芸員
- 阿久根 晋 日本学術振興会特別研究員PD
- 森脇 優紀 東京大学経済学部資料室・特任助教
- 小出麻友美 千葉県立中央博物館・研究員
- 天野 真志 国立歴史民俗博物館・准教授
- 橋本 雄太 国立歴史民俗博物館・准教授
- 日高 薫 国立歴史民俗博物館・教授
- 澤田 和人 国立歴史民俗博物館・准教授
- ◎鷺頭 桂 国立歴史民俗博物館・准教授

(13) 小渡遺跡を中心とする十腰内文化の研究 2023～2025年度 (研究代表者 阿部 昭典)

1. 目的

本研究は、館蔵小渡遺跡出土品を中心に、東北北部に展開した「十腰内文化（十腰内Ⅰ式文化）」の実態を解明することを目的とする。「十腰内文化」は、北東北から北海道西南部に広がる後期前半期の文化で、世界遺産に登録された環状列石の造営や多様な儀器が発達するなど独特の文化であり、配石や再葬など縄文後・晩期を特徴づける精神文化を考えるうえで重要な意味を持つ。しかし、これらの文化の内実については、分かっていないところが多い。十腰内文化には、土器装飾・儀礼具の種類や有無、環状列石の有無などいくつかの点で地域差が想定されるが、小渡遺跡資料は、周辺遺跡の実態が不明瞭な五戸地域において有数の資料数を誇る。

本研究は、「十腰内文化」の実態解明のために、地域間の併行関係、植生・生業の解明、モノや人の動き、儀礼行為の復元の4つの研究視点から研究を構成する。

2. 今年度の研究計画

小渡遺跡資料については石器の実測図作成を継続するものの、科学分析のための現地調査をほぼ完了しており、今年度はその成果を他の遺跡と比較検討する。小渡遺跡の地域的特色を明らかにするための周辺地域の調査は継続する。具体的には、青森県内（八戸市立博物館、青森県埋蔵文化財調査センター）、岩手県埋蔵文化財センターなどでの資料調査を計画しており、①土器付着物の年代測定、②炭素・窒素同位体分析、③土器胎土分析、④製作・使用痕跡の観察を進める。対象資料のうち、十腰内Ⅰ式土器は、広範囲に広がっており、地域間の時期的併行関係や、地域間交流を検討するため、より広い範囲での検討が必要である。分布圏の状況を確認し、関東地方出土の十腰内Ⅰ式土器（埼玉県・千葉県）についても、観察と胎土分析を進め、東北北部のものと比較検討を行う。最終的な研究成果をまとめるにあたり、歴博において小渡遺跡出土品の検討会を開催して、内外の研究者から意見をいただく機会を持ちたい。

3. 今年度の研究経過

【小渡遺跡出土品検討会】2025年7月13日 国立歴史民俗博物館において、関連プロジェクトと共催で、共同研究メンバーならびに十腰内Ⅰ式土器の研究者等に呼び掛けて実施し、本資料群の特徴を確認した。

【小渡遺跡資料調査】2025年9月16日・2026年3月22日国立歴史民俗博物館

【合同資料調査・研究会参加】2025年9月18日～20日に青森県佐井村、11月1日に青森県埋蔵文化財調査センター、11月2日に十腰内Ⅰ式土器編年シンポジウム、2026年2月16・17日に岩手県埋蔵文化財センター、3月4日～5日に弘前市、3月10日に八戸市博物館で合同の資料調査を実施した。

【石器実測委託】中島が所属する井草文化財研究所に委託し、石鏃の実測図を作成した。

4. 今年度の研究成果

論文・研究ノート・資料報告

- ・阿部昭典「縄文中期と後期の境界問題—大木10式土器と称名寺Ⅰ式土器の関係性—」『人文研究』第55号 39-61頁
- ・阿部昭典「歴史研究フロンタイン 小渡遺跡を中心とする十腰内文化の研究」『REKIHAKU』016 80-84頁
- ・永瀬史人・國木田大・米田穰・工藤司「三沢市猫又（2）遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定」『青森県考古学』33, pp.19-34, 青森県考古学会。（査読有）
- ・永瀬史人・國木田大・藤澤珠織・米田穰・市川健夫「松ヶ崎遺跡の廃屋墓から出土した貝・獣骨の年代」『八戸市博物館研究紀要』39, pp.1-6。
- ・吉川耕太郎「東北地方北部の縄文石鏃に関する一試論」『実験痕跡考古学者御堂島正先生古稀記念論集』343-352頁
- ・上條信彦「米山（2）遺跡出土礫石器の詳細観察と付着物分析」『米山（2）遺跡X』青森県埋蔵文化財調査センター
- ・長谷川大旗「小牧野3式と十腰内Ⅰ式第1段階の構造とその変遷」『十腰内Ⅰ式土器編年シンポジウム』
- ・折登亮子「弥栄平（2）式・沖附（2）式」『十腰内Ⅰ式土器編年シンポジウム』

口頭発表・講演

- ・ 國木田大・長谷川大旗・阿部昭典・中村耕作・米田穰「縄文時代後期前葉十腰内Ⅰ式期の食性分析（２）——七戸町鉢森平（７）遺跡を中心に——」『日本文化財科学会第42回大会』ポスター発表, pp.198-199, 2025年7月・青山学院大学
- ・ 阿部昭典「環状列石と縄文社会—明らかになった姿と残された謎—」『大湯ストーンサークル縄文祭 シンポジウム 環状列石に挑む—わかったこと, まだわからないこと—』2025年9月・大湯ストーンサークル館
- ・ 阿部昭典「講演 環状盛土遺構と環状列石の構造と景観」『令和7年度 山野貝塚シンポジウム 山野貝塚のムラの形の意味を探る』2026年2月・袖ヶ浦市
- ・ 吉川耕太郎「環状列石と縄文時代人の精神世界を探る」2025年10月・明治大学博物館
- ・ 吉川耕太郎「秋田の縄文石器」2025年12月・秋田市農山村活性化センター
- ・ 吉川耕太郎「ブナ林帯と縄文世界文化遺産」2026年1月・秋田森づくり活動サポートセンター
- ・ 吉川耕太郎「秋田の縄文文化と世界遺産」2026年3月・秋田市中央公民館

5. 全期間の成果

この3年間で、小渡遺跡ならびに青森県・岩手県等で資料調査を行い、十腰内Ⅰ式土器とその前後の時期の資料を熟覧し、土器編年、石鏃の型式学的検討、放射性炭素年代や同位体による食性分析、種実の同定、土器圧痕による環境の検討、蛍光X線による胎土分析、磨石・石皿の使用痕観察・残存デンプン分析などを実施してきた。現在検討中の事項も多いが、これまでに判明してきた代表的な成果は以下のとおりである。

土器編年については、従来の研究史を踏まえて共伴資料を中心に検討し、後期初頭～中葉を1期から5期に区分した。また、東北部や関東地方、新潟県などの土器型式との広域編年を整理し、東日本における広域研究の基盤を整備した。環状列石も、十腰内文化を象徴する構築物の一つであるが、この文化範囲の一部でだけ広がった可能性がある。本質は、広場を中心に掘立柱建物が環状配置する構造であると考えられる。さらに、これらは小規模集落の「葬祭センター」や「集落ではない場所」ではなく、より広範囲に居住域を展開するようになった「拡散型居住」であると推測される。この時期の気候環境は、冷涼化した気候悪化の時期ではなく、比較的狩猟採集に適した気候であったと推測される。これは、食性分析や植物利用の研究成果からも肯定できる。年代測定の結果、十腰内Ⅰ式期の年代は、約4150～3650年前の約500年間になることがわかった。また、遺跡の立地を反映した多様な資源利用が明らかとなった。

石器のうち、石鏃については小渡遺跡を含む関連資料の検討により、「小渡型」を含む複数の特徴的型式を抽出した。また、磨石・石皿類については、後期前葉に盛行する有縁石皿の使用痕の特徴を把握することができた。また残存デンプン粒分析の結果、出土後の現生種子による汚染を確認したものの、汚染の場合のデンプン検出の程度などの指標を策定することができた。併せて、有縁・有脚石皿の北東北における型式的研究を進め、より詳細な編年を作成、型式差が用途に由来するかを検討するために典型的な事例について使用痕・残存デンプン分析を実施した。こうした植物加工具の比較分析例は、本研究が初めてである。使用痕の傾向を把握するとともに複数の遺跡からデンプンを検出することができ、植物の微粉化と根茎類の食品利用が背景にあることを突き止めた。

土器圧痕の調査からは、土器表面からアサやヌスビトハギなどを検出した。植物利用や土器製作季節、周囲の環境等を検討できる。また、小渡遺跡の土器底部圧痕についても検討しており、籠を再利用した可能性が高いものを確認した。

6. 研究組織（◎は研究代表者 ○は研究副代表者）

- ◎阿部 昭典 千葉大学大学院人文科学研究院・教授
 吉川耕太郎 秋田県埋蔵文化財センター・副主幹（兼）調査班長
 中島 将太 井草文化財研究所・研究員
 上條 信彦 弘前大学人文社会教育学系・教授
 佐賀 桃子 山梨県埋蔵文化財センター・文化財主事
 佐々木由香 金沢大学古代文明・文化資源学研究所・特任准教授
 國木田 大 北海道大学大学院文学研究院・准教授
 建石 徹 皇居三の丸尚蔵館・学芸部長
 菅頭明日香 青山学院大学文学部・教授
 村本恵一郎 五戸町教育委員会・教育課課長補佐
 折登 亮子 青森県埋蔵文化財調査センター・文化財保護主査

長谷川大旗 青森県埋蔵文化財調査センター・文化財保護主事
 ○中村 耕作 本館研究部・准教授
 山下 優介 本館研究部・テニユアトラック助教

(14) 平田篤胤関係資料の漢籍受容に関する総合的研究 2024～2026年度 (研究代表者 高田 宗平)

1. 目的

本研究では、平田篤胤の漢籍受容という新たな視点から平田篤胤関係資料（以下、平田本）へアプローチして調査・研究を進めることで、篤胤がどのような漢籍を利用し、その思想を形成したかを解明し、更にそれに伴う人物交流を明らかにすることを目的とする。

平田篤胤に関する従来の研究は、主に日本近世史・近代史、日本思想史、神道学の諸分野から古道学（国学）へのアプローチに依るものである。一方で、篤胤は自身が伝授し得る学問分野として「古道学」「暦学」「易学」「軍学」「玄学」を示し、このうち古道学以外は漢籍由来であることから、篤胤の学問・思想解明には漢籍利用の痕跡の分析・検討は不可欠であるものの、これまで篤胤の学問への漢籍の影響に注目する研究は殆どない。本研究の主な対象となる平田本は、平田篤胤以下三代にわたる収集品および著作、私塾気吹舎に関する資料群であり、平田篤胤関連の諸研究では不可欠の存在である。近年、目録の刊行や画像化など、研究資源として活用の基礎が整備され、全体的な活用が容易になった。

以上を受けて、本研究では平田本を総体的に把握することで、篤胤の思想形成過程のパラダイムを捉え直し、その思想の形成過程における漢籍受容の様相及び人物交流の解明を目指す。そして幕末期の知識人の思想形成について、漢籍受容に注目して調査・研究を行うとともに、先行研究を踏まえて総合的・復元的に検討する。

2. 今年度の研究計画

本年度は折り返しの2年目となるため、中間の成果評価が課題となる。前年度に引き続き、資料の調査、分析・検討を加えるために用いる資料を撮影して、画像データの入手・蓄積と共有を図りつつ、各共同研究員は分担課題の調査・研究に基づいた中間の成果評価を行う。7月、8月、12月、3月に本館で研究会と熟覧調査を実施する。このうち8月には海外から研究者を招聘して国際ワークショップを開催し、国際的な視点に立った中間報告の場を設け、招聘者からの批判を仰ぎ、議論する。併せて西尾市岩瀬文庫所蔵の平田篤胤の門人羽田野敬雄旧蔵本を調査する。また研究会・資料調査には積極的に研究協力者を招聘し、この分野における研究交流の場を創出することを目指す。

3. 今年度の研究経過

○研究会

・第1回研究会（7月5日 本館第1会議室）

共同研究員11名参加（うちオンライン参加2名）、ゲストスピーカー（研究協力者）1名（高橋あやの氏）招聘。
 高橋あやの：題目「平田篤胤『太皐古暦伝』にみる漢籍との距離感」（大東文化大学東洋研究所・准教授）ほか
 共同研究員2名報告。

・第2回研究会「国際ワークショップ 平田篤胤と漢籍・中国学術」（8月21日・22日 本館大会議室）

共同研究員12名参加（うちオンライン参加1名）、ゲストスピーカー（研究協力者）4名招聘。

ゲストスピーカーとして徐興無氏（南京大学文学院・教授）、童嶺氏（南京大学文学院・教授）、内山直樹氏（千葉大学大学院人文科学研究院・教授）、張名揚氏（実践女子大学文芸研究所・客員研究員）を招聘した。

8月21日 題目：徐興無「<春秋命暦序>与三正論」・共同研究員2名報告、8月22日 題目：童嶺「武則天与日本、朝鮮漢文化圏——兼及平田篤胤の玄奘<大唐西域記>解説」・共同研究員2名報告ほか。

・第3回研究会（12月13日 本館第1会議室）

共同研究員7名参加。共同研究の成果の可視化について議論し方針を定めた。

・第4研究会（2026年3月20日 本館第1会議室）

共同研究員11名参加、ゲストスピーカー（研究協力者）3名招聘。

相澤みのり：題目「平田篤胤の漢籍受容—キリスト教・霧島山の天逆鉾—」（佛教大学総合研究所・特別研究員）。
 永塚憲治氏（公益財団法人研医会・研究員）、路勝楠氏（北海道大学大学院・専門研究員）はコメントを担当した。

○資料調査

- ・ 7月3日 本館第1調査室, 4日 本館第2修復室
第1回研究会に合わせ9名(うち1名研究協力者)で平田本の調査を実施した。
- ・ 8月20日 本館第1調査室
第2回研究会(国際ワークショップ)に合わせ10名(うち研究協力者3名)で平田本の調査を実施した。研究協力者の徐興無氏・童嶺氏から資料について提言・助言を受けた。
- ・ 9月4日・5日 西尾市岩瀬文庫
6名で平田篤胤の門人羽田野敬雄旧蔵本の調査を実施した。
- ・ 12月12日 本館第1調査室
第3回研究会に合わせ5名で平田本の調査を実施した。
- ・ 2026年3月18日・19日 本館第1調査室
第4回研究会に合わせ10名(うち研究協力者2名)で平田本の調査を実施した。研究協力者の永塚憲治氏・路勝楠氏から資料について提言・助言を受けた。

4. 今年度の研究成果

各共同研究員は着実に調査・検討を進めているが、以下の点について顕著な研究成果を挙げた。

①書籍(単著)

頼思好『東アジアにおける女仙信仰と女仙伝 ―その起源と展開, 伝播』(汲古書院, 2026年)

②論文(単著)

末永高康「循甲故実稿と二つの循甲故実——平田篤胤遁甲学初探」(『東洋古典学研究』第60号, 2025年, pp.24~40)

③国際学会における発表及び講演

頼思好「平田篤胤の道教經典重構:《葛仙翁文粹》中の跨文化詮釋與童蒙教育實踐」(東亞宗教與文藝的生活世界國際學術研討會, 台湾台北市, 台湾大学, 5月22日)

頼思好「道教宇宙觀域外接受」(華東師範大学哲学系學術講座, 中国上海市, 華東師範大学, 6月18日)〔講演〕

頼思好「東亞文獻中登涉思想的跨域流轉——日本, 朝鮮的敘事重構」(東亞海域交流青年學者論壇, 台湾台北市, 中央研究院歷史語言研究所, 7月24日)

頼思好「懷中の聖山: 道教『五嶽真形圖』在東亞登涉思想中的流轉」(宗教生活實踐研究群演講, 台湾台北市, 中央研究院民族學研究所, 2026年3月2日)〔講演〕

末永高康「平田篤胤の易學」(思想的傳播: 儒學, 島鏈與東亞世界的形成國際學術工作坊, 台湾嘉義県, 中正大学, 12月13日)

④本館で開催の国際ワークショップ(8月21日・22日)における発表

末永高康「循甲故実稿と二つの循甲故実」, 大形徹「扶桑と大扶桑国考」, 石橋賢太「平田篤胤と山鹿流兵学」
末永氏は, 篤胤の学問や思想の枠組みを現している『道統礼式』の奥書部分に着目し, 奥書の「天禽日, 天禽時」の意味や篤胤の暦学の実態について検討した。また末永氏は, 篤胤の遁甲術の著作『循甲故実』の成立過程を検討し, 篤胤の軍学実態の一端を明らかにした。大形氏は, 篤胤の『大扶桑国考』に見える中国の地理書や道経を手がかりに, 篤胤の扶桑解釈について検討し, 篤胤の玄学理解の一端を明らかにした。石橋氏は, 篤胤と山鹿流兵学との関係について検討し, 篤胤における軍学の位置付けを明らかにした。

5. 研究組織(◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

石井 行雄 学識経験者(～令和7年3月)

石橋 賢太 中央大学文学部・兼任講師

伊藤 裕水 山口大学人文学部・講師(～令和7年3月)

浦山 きか 東北大学学術資源研究公開センター・史料館・協力研究員

大形 徹 立命館大学衣笠総合研究機構・招聘研究教員(教授)

長田 直子 山梨大学医学部・非常勤講師

末永 高康 広島大学大学院人間社会科学研究科・教授(令和7年4月～)

成 高雅 立命館大学衣笠総合研究機構・専門研究員

◎高田 宗平 平成国際大学・客員講師

武田 時昌 関西医療大学保健医療学部・客員教授

陳 捷 東京大学大学院人文社会系研究科・教授
 奈良場 勝 國學院大學栃木短期大学・非常勤講師
 水上 雅晴 中央大学文学部・教授
 頼 思好 台湾 中央研究院民族学研究所・博士後研究人員
 劉 青 弘前大学人文社会科学部・助教（令和7年6月～）
 天野 真志 本館研究部・准教授
 ○工藤 航平 本館研究部・准教授

(15) 近代暦知の総合的研究 2025～2027年度 （研究代表者 下村 育世）

1. 目的

研究の全体構想と目的

本研究は近世から近現代における暦や時間をめぐる知識の系譜と展開について、学際的かつ総合的に調査、分析を行なうものである。暦に関するさまざまな知識と技術、社会通念や習俗をここでは一括して「暦知」として扱う。

近代日本は、近世までの太陰太陽暦を太陽暦に改める試みを東アジア世界で最初に貫徹したことで注目される。以降、帝国日本の拡大とその暦の普及の過程で、日本の暦知が大きな意義を持ったことと考えられる。こうした「時間の近代化」の展開の背景とそこから惹起されるさまざまな問題系の広がり可能性とを、歴史学、民俗学、宗教学を取り込んだ広義の宗教史的な視点で解明するのが本研究の目的である。かかる目的のために歴博蔵の「大雑書コレクション」をはじめとする暦知関係資料を対象として、以下の課題を設定する。

1) 前近代における暦をめぐる知識の系譜と近代における変容

近代日本の改暦は、前近代におけるさまざまな暦とその運用をめぐる蓄積と模索の上に成り立っている。宣明暦を中心とする時代には陰陽寮が関与した一方、貞享暦以降の幕府天文方の暦算とその改良への努力は、西洋天文学の知見も踏まえ、中国の暦の動向をも視野に入れていた。また大雑書をはじめとする暦注書の盛行は暦知を生活と接続することを可能にした。歴博蔵の69冊にのぼる大雑書コレクションは、近世から近代までカバーするもので、暦をめぐる知識の変容を歴史的に捉えるにあたり好個の史料群といえる。そうした動きを総括し、近代への展開をとらえる。

2) 明治改暦の基盤と背景

明治改暦は欧米に伍する太陽暦の採用とされるが、その実現は暦算と頒暦に関する前近代からの組織と経験に基づく。また儒学、国学などでは暦を文化的な観点からとらえ、神話や支配思想と関連づける志向があった。これらは明治国家によってどのように遇され、国家神道との関連はいかなる位相を呈するのか、技術史的な検討と思想史的な検討を並行して行なうことでその実像を定位する。

3) 奈良暦師・吉川家文書調査の成果を踏まえた、他の暦師との比較検討

歴博館蔵資料型共同研究（2018～21年度）における「奈良暦師吉川家文書」の分析成果と、三嶋暦師・河合家や奈良暦師・中尾家（上記共同研究終了後に見出された資料群）などと比較し、全国の暦師についてより多角的な実像把握を行う。

4) 帝国日本形成過程における暦・時間認識

帝国日本の拡大や植民地支配の文化的な側面において暦に内包されたイデオロギーが果たした役割は大きい。しかしながら、その展開過程については資料の所在の確認や基礎的な整理が充分ではない。その空白を意識して埋めつつ、帝国主義的局面における暦の広がり・バリエーションと象徴的な機能についての調査検討を進めていく。

5) 近現代庶民生活における暦知の形成と流通

昭和戦前期まで暦は国家統制下におかれていた。しかし、庶民生活のなかでは「お化け暦」と呼ばれる擬暦が広く受け入れられ、また易占と結びついた「高島暦」も刊行されていた。こうした生活に密着した暦が戦後の暦の自由化のなかで、どのように変容していったかは明らかにされていない。現代でも暦とカレンダーは多様な版元が関わっており、その志向は多元的である。こうした暦の製作と受容の諸側面を資料の収集を行ないつつ、民俗学的に進める。

歴博所蔵の資料群には、暦に関わる資料群とは目されていなくても、山形飛鳥鈴木家資料、水木家資料、幕府

儒学者杉原平助関係資料など、暦知にかかわるものが少なからず含まれている。本研究では、そうした歴博蔵資料の調査と整理、分析をする志向性を有する。

2. 今年度の研究計画

本共同研究は、明治改暦を基準に前近代から近現代におよぶ暦の諸相とその利用について、①暦知を集約した書籍類（大雑書など）、②生活次元での暦知の評価と流通、③植民地等における暦の様相とその意義の3つの視点を意識して研究を進める。今年度の計画は以下の通りである。

- ・館蔵の暦知関係資料の調査整理と分析
- ・近現代生活における暦知の展開に関する考究（高島暦、お化け暦等）
- ・各地の暦師の資料調査と分析
- ・明治改暦の基盤と背景についての考究
- ・東アジア（外地、特に台湾、韓国）における暦政策の展開と受容をめぐる調査および資料収集

3. 今年度の研究経過

1) 第1回（5月4日（日）・5日（月・祝日））於・国立歴史民俗博物館

5月4日（日）

- ・午前中：資料調査・熟覧（「大雑書コレクション」・「奈良暦師吉川家文書」の一部と、新規購入資料）
- ・14：00～17：00：研究会

研究概要説明、歴博蔵の暦資料の概要説明、日本宗教学会での暦パネルの回顧と展望

研究発表：小池淳一「暦をめぐる民俗学的視座」

5月5日（月）

- ・午前中：研究会および今後の方向性（各自の構想発表）
- ・13：00～15：00：研究会および今後の方向性（続き）
- ・15：00～17：00：資料調査・熟覧（同上）

2) 第2回（9月17日（水）・18日（木））於・国立歴史民俗博物館

9月17日（水）

- ・午前中：資料調査・熟覧
- ・13：30～17：00：研究会
- 研究発表：城地茂「台湾民暦の時代区分」
- 研究発表：宮川卓也（ゲストスピーカー・広島修道大学）「植民地朝鮮における新旧暦書をめぐる相克」
- ・17：00～19：00 研究打合せ（台湾調査の計画など）

9月18日（木）

- ・9：30～12：00 研究会
- 伊藤優「歴博館蔵の暦知関係資料と検索について」
- 研究発表：宮川卓也「沖縄の暦研究の課題」
- 研究打合せ

3) 第3回（3月4日（水）～8日（日））

台湾（台北）における「台湾民暦」の資料調査をおこなった。共同研究員の城地茂氏のほか、第二回研究会のゲストスピーカーの宮川卓也氏、国立清華大学の英家銘氏に現地で協力いただき、戦前の日本にかかる資料を所蔵する機関で資料調査を行った。

- ・3月5日：国立台湾大学図書館（台北市羅斯福路四段1号）
- ・3月6日：国立台湾図書館（新北市中和区中安街85号）
- ・3月7日：国立故宫博物院（台北市士林区至善路二段221号）と総統府（旧・総督府）（台北市中正区重慶南路一段122号）などへの巡検を行った。

当初は初年度（2025年度）に海外調査を考えていなかったが、台湾民暦、朝鮮民暦の研究者による研究報告が第2回研究会（9月）にて行われたので、資料の所在を把握し今後の研究に資するためにも、早めに台湾現地に赴き調査を行うことにした。戦前の帝国日本の肝いりで制作された「台湾民暦」や「朝鮮民暦」などと、日本の暦政策とのかかわりについて理解を深め、従来にはなかった研究へと発展させていきたい。3月5日には、『日本帝国主義下台湾の宗教政策』を刊行した蔡錦堂氏と面会することができ、台湾の史料の所在など貴重なアドバイスを受けることができた。

来年度には共同研究員を拡充し、研究の幅を広げ、近代日本の暦についての多角的なアプローチをさらに進めていく。

4. 今年度の研究成果

- ・館蔵「大雑書コレクション」の資料的な価値について多角的に検討を加えた。特に巻頭の須弥山図と仏暦との関係、月蝕の記述と俗信との関係が注目される。また大雑書には写本が少ないこと、館蔵の「吉川家資料」、暦占関係資料との比較検討も行なわれた。さらに伊勢参宮に関する吉凶の知識がこうした大雑書とどのような関係を形成してきたのかについても議論が行なわれた。
- ・いわゆる「お化け暦」の分類については、メンバーそれぞれの専門領域からの提言がなされ、その可能性についての議論が積み重ねられている。記載内容から受容した階層の想定や仏教、新宗教の側からの暦作成の動きなどにも注意を払うべきであるという提言がなされた。
- ・三島暦については前近代からの資料の所在についての報告が行なわれ、調査遂行上の留意点について広範な議論がなされた。
- ・海外に所在する帝国日本の暦についてはメンバーの持つ情報をすり合わせる必要があることが確認された。特に台湾大学の暦算資料については目録作成中であることをふまえ、現地調査や研究交流を積極的に行なうべきであることが確認された。
- ・小池淳一「月光をめぐる伝承」（『西郊民俗』270号、2025年）
- ・岡田正彦・林淳・下村育世の3名は、2025年8月にポーランドで開催されたIAHR国際学会にて以下の暦にかかわるパネル発表を行った。

Calendar and Religion in Japanese Tradition : Buddhism, Shintō, and Onmyōdō., the XXIII International Association for the History of Religions World Congress, 2025年8月, Kraków.

—Masahiko Okada, Calendar and Buddhism in Japan.

—Makoto Hayashi, Onmyōdō and Calendar.

—Ikuyo Shimomura, Calendar and Shintoism in Modern Japan.

5. 研究組織（◎は研究代表者 ○は研究副代表者）

- ◎下村 育世 青森公立大学経営経済学部・准教授
 林 淳 愛知学院大学文学部・客員教授
 岡田 正彦 天理大学人文学部・教授
 城地 茂 大阪教育大学多文化教育系・元教授
 全 勇勲 韓国学中央研究院・教授
 藤本 頼生 國學院大學神道文化学部・教授
 今井 功一 國學院大学日本文化研究所・共同研究員
 小田島梨乃 東京大学大学院博士課程
 馬場真理子 高崎経済大学経済学部・講師
 ○小池 淳一 国立歴史民俗博物館研究部・教授
 松田 睦彦 国立歴史民俗博物館研究部・教授
 天野 真志 国立歴史民俗博物館研究部・准教

(16) アーカイブズ学との連携による映像資料の多角的価値評価と活用モデルの構築

2025～2027年度

（研究代表者 内田 順子）

1. 目的

本研究は、歴博が制作してきた民俗研究映像と、調査ノート・写真・視聴覚資料などの関連資料を、アーカイブズ学の観点から統合的に整理・分析し、映像資料の歴史的・文化的価値を多角的に評価することを目的とする。とくに、沖縄県の民俗文化・歴史を対象とした研究映像を中心に、映像と関連資料の相互関係を明らかにし、地域文化の理解を深める資料活用の方法を検討する。あわせて、映像資料等のデジタル化、持続可能な保存・公開・活用

の仕組みを検討し、利用者にとってアクセスしやすい環境の整備を目指す。さらに、この研究過程を映像として記録・編集し、映像資料と関連資料を統合的に分析する方法と、その学術的・社会的意義を示す研究映像を制作することで、今後の映像アーカイブ研究および研究・教育への活用に資する基盤を構築する。

2. 今年度の研究計画

本研究では、共同研究会を年3回実施し、歴博研究映像『黒島民俗誌』および『沖縄・糸満の門中行事』を主対象として、制作担当研究者が残した研究資料・データの調査方法を検討するとともに、各調査の成果を報告・共有する。また、フィルムのデジタル化公開を通じてメタデータを充実させた実践例について、ゲストスピーカーを交えて検討する。

現地調査では、『黒島民俗誌』に関連して沖縄県立博物館・美術館所蔵の録音テープを調査し、『沖縄・糸満の門中行事』については、糸満市立中央図書館の比嘉政夫文庫に含まれる書籍、論文、調査ノート、写真、ビデオ等を調査する。さらに、7期共同研究で進めた福地唯方フィルムコレクションのデジタル復元成果を発展させるため、比嘉康雄アトリエ所蔵の同時代の写真・調査ノート・映像・録音資料等についても、所蔵者の了承を得て調査を行う。これらの調査で確認された資料のうち必要なものは、デジタル化、整理、内容分析を進め、あわせて研究プロセスを映像で記録する。

研究成果として、7期共同研究で制作した「糸満の門中行事の現状との比較」をテーマとする研究映像をさらにブラッシュアップし、「歴博映像フォーラム」で公開する。

3. 今年度の研究経過

【研究打ち合わせ】

- 『沖縄・糸満の門中行事』に係る研究映像の研究及び編集打ち合わせを実施し、研究映像「墓をまもる—糸満・門中のいま—」を完成させた。
 - ・7月26日 10時～17時、ビジョンセンター東京日本橋、3名参加
 - ・8月30日 10時～17時、ビジョンセンター東京日本橋、2名参加
 - ・10月4日 国立歴史民俗博物館 ※歴博映画の会開催
 - ・10月18日 ビジョンセンター東京日本橋、10時～17時、3名参加
 - ・11月3日 ビジョンセンター東京日本橋、10時～17時、2名参加
 - ・11月7日～10日 国立歴史民俗博物館・公益財団法人放送番組センター/放送ライブラリー、4名参加
 - ・12月7日 ビジョンセンター東京日本橋、10時～17時、2名参加
 - ・1月12日 ビジョンセンター東京日本橋、10時～18時、3名参加
 - ・1月18日 ビジョンセンター東京日本橋、10時～20時30分、3名参加
 - ・1月31日 ビジョンセンター東京日本橋、10時～18時、2名参加
- 比嘉アーカイブが所蔵するテキスト資料についての研究のまとめかたについて検討した。
 - ・12月20日 国立民族学博物館、5名参加（「東アジア祭祀記録を軸とした共創型アーカイブズ活用モデルの開発」(代表：高科真紀)と合同)

【現地調査】

- ・7月11日（10時～18時）・12日（10時～12時）比嘉アトリエ（沖縄市）にて、比嘉康雄氏の未発表原稿調査の方法説明・承諾取得、テキスト化打合せ、関連資料の確認・撮影を行った。2名参加
- ・10月8日 糸満市APセンター南斎苑、幸地腹赤比儀腹門中墓にて幸地腹門中の葬儀調査を実施した。1名参加
- ・10月19日～21日 宮古島市地下農村環境改善センター「苧麻糸シンポジウム」に参加するとともに、研究映像についての研究打ち合わせを実施した。1名参加。
- ・12月13日～14日 幸地腹・赤比儀腹両門中墓に関する調査・撮影を実施した。2名参加。
- ・3月5日～10日 宮古織物事業協同組合、宮古島市歴史文化資料館、宮古伝承文化研究所、研究映像の撮影・調査協力者宅、研究映像に関連する拝所・墓跡。宮古島各所にて、研究映像上映会や制作に関する打ち合わせ、協力者への聞き取り、拝所・墓所・苧麻畑等の巡検調査を実施した。1名参加。
- ・3月14日～15日 くくる糸満・幸地腹門中宗家・赤比儀腹門中宗家にて、糸満での研究映像上映会の打ち合わせのほか、研究映像の内容についての打ち合わせを実施した。3名参加。

【資料のテキストデータ化】

比嘉アーカイブが所蔵するテキスト資料について、テキストデータ化の方針を検討し、テキストデータ化を実施

した。

【過去の歴博研究映像撮影素材の活用検討】

『黒島民俗誌』で撮影された西表島の映像素材について、制作を担当した研究者および出演者と、編集・活用方針について検討を進めた。

4. 今年度の研究成果

- ①『沖縄・糸満の門中行事』（1996年）以降の門中の変容をテーマとする新たな研究映像を編集・完成した。歴博映像フォーラム19「同じ墓に入る人びと—沖縄県糸満の門中行事」（2026年2月7日）で公開した。
- ②比嘉アーカイブが所蔵するテキスト資料の調査・研究に向けて研究方法を検討し、テキストのデータ化を進めることができた。
- ③研究映像『黒島民俗誌』の制作の際、西表島で撮影された映像素材について、制作を担当した研究者および出演者と、編集・活用方法について協議を進めた。

5. 研究組織（◎は研究代表者 ○は研究副代表者）

大湾 ゆかり 沖縄県立博物館・美術館・主任学芸員

春日 聡 多摩美術大学・非常勤講師

高科 真紀 国立民族学博物館・助教

分藤 大翼 信州大学全学教育機構・教授

◎内田 順子 本館研究部・教授

川村 清志 本館研究部・准教授

工藤 航平 本館研究部・准教授

○山田 慎也 本館研究部・教授

【開発型共同研究】

(17) 「弥生時代の洪水災害に対する人びとの選択と社会の変化」

2024～2026年度

（研究代表者 山下 優介）

1. 目的

本研究は、弥生時代の洪水災害の実態や、それに対する人びとの行動選択の内容、あるいは、その選択によってどのような社会変化が生じたかを考察するものである。目的達成のため、集落遺跡、植物遺体、弥生土器を対象とする多角的な分析を基礎として、洪水の発生時期やその前後に生じた集落の変化、あるいは地域をまたいだ土器の移動現象を把握し、それらの連動性や関係性について詳細に検討する。本研究の土台となる基礎的な分析の対象を近江地域（滋賀県域）とし、周辺地域との比較検討を進める。

2. 今年度の研究計画

開発型共同研究の2年目にあたる令和7年度は、第一に、令和6年度に着手した、①滋賀県内の弥生時代の洪水痕跡例の集成、②滋賀県内の弥生時代集落動態の把握、③酸素同位体比年輪年代法による分析と炭素14年代測定、④近江地域外部へ移動した弥生時代中期～後期の近江産（系）土器の集成といった4つの調査・分析を継続する。第二に、研究会を通じて集落動態の分析を担当する共同研究員が成果を報告し、総括に向けて地域間の比較検討に関する議論を進める。さらに、中国漢代や中世の洪水被害に関する文献を扱った研究をふまえ、考古資料のみからは把握することが困難な対応のあり方について理解を深める。

3. 今年度の研究経過

3か年にわたって実施する開発型共同研究の2年目である本年度は、3回の研究会の開催と、滋賀県や三重県、石川県などの遺跡出土土器を中心とした考古資料調査を計画通り実施できた。各研究会では3名程度が研究報告を行い、活発に議論した。また、昨年度の調査で採取した年代測定資料に対する分析を進め、その成果を公表した。令和7年6月13日・14日と12月4日に、三重県埋蔵文化財センターや長浜市文化財保護センターなどで研究会を開催した。共同研究員に加え、一般の研究者が参加した。令和8年2月27・28日には、開発型共同研究「中世民衆生

活史像の再構築—気候変動・自然災害と民衆生活との相関関係を探る—」（代表：土山祐之氏）との合同研究会を本館にて開催した。

4. 今年度の研究成果

研究会における共同研究員の研究報告によって、近江地域や伊勢湾沿岸地域の集落動態に関する知見が得られた。集落遺跡やその動態、年代や古気候データといった本研究に関わる最新の調査・分析成果に対する議論のみならず、中国漢代の災害記事や中世の地域社会を扱った研究報告をふまえて、3年目の総括に向けて研究を深めた。また、彦根市と栗東市の遺跡出土木材を対象とした酸素同位体比年輪年代法と炭素14年代測定と実施し、結果を公表するとともにその年代的位置付けを明らかにした。

5. 研究組織（◎は研究代表者）

石井 智大 三重県埋蔵文化財センター・課長
 佐々木仁志 守山市都市経済部農政課・主事
 篠崎 鉄哉 東京大学大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻・特任研究員
 戸塚 洋輔 彦根市役所 文化財課・副主任
 中野 咲 奈良県立橿原考古学研究所・主任研究員
 村上由美子 京都大学総合博物館・教授
 若林 邦彦 同志社大学歴史資料館・教授
 ◎山下 優介 本館研究部・テニュアトラック助教
 上野 祥史 本館研究部・准教授
 坂本 稔 本館研究部・教授
 佐野 雅規 本館研究部・特任准教授
 土山 祐之 本館研究部・テニュアトラック助教
 箱崎 真隆 本館研究部・准教授
 松本 武彦 本館研究部・教授（令和6年9月まで）

(18) 開発型共同研究「中世民衆生活史像の再構築—気候変動・自然災害と民衆生活との相関関係を探る—」

2024～2026年度

（研究代表者 土山 祐之）

1. 目的

本研究は、気候変動や自然災害などの環境的要因と民衆生活（生業・経済・信仰等）との相関関係を検証した上で、気候変動や自然災害に応答する民衆生活の実態を解明し、中世民衆生活史像を再構築することを目的とする。

戦後の日本中世史研究において、民衆は「被支配者」として対領主関係の文脈で検討が進んできた。そうした民衆の主体的な側面に注目し、彼らの生活を追究したのが1980年代以降の中世民衆生活史研究である（網野善彦『日本中世の民衆像』（岩波書店、1980年）／木村茂光『中世の民衆生活史』（青木書店、2000年）／藤木久志『中世民衆の世界』（岩波書店、2010年））。網野や藤木は支配—被支配関係に収斂されない民衆生活の多様な実態を解き明かし、木村は一年間の農事サイクルを文献資料から復元した。こうした中世民衆の生活に注目する研究が登場するきっかけは、考古学による遺跡調査にある。高度経済成長にともない実施された遺跡調査では、中世の生活空間が発掘され、遺跡・遺物から当時の生活を視認できるようになった（例えば越前一乗谷、備前草戸千軒）。その結果、民衆は生業や経済・文化の担い手として位置付けられるようになった。

その一方で、民衆生活史研究には現在まで解明されていない大きな問題が残されている。それが、自然災害や気候変動といった環境的要因が民衆生活にいかに関与したのかという問題である。これまでの民衆生活史研究では、方法論の限界から環境的要因と民衆生活との相関関係についてはほとんど検討されてこなかった。その結果、民衆生活史叙述において環境的要因を織り込めていないという重大な問題を抱え続けている。

本研究はこの問題に対し、近年飛躍的に進展した高分解能古気候データや堆積物マーカーといった自然科学的解析結果を歴史資料の一部として採用し、①民衆生活（生業・流通・信仰など）と環境的要因との相互関連性の追究、

②環境的要因に応答する民衆生活の実態究明、の2点を中心に研究を進めていく。具体的には、流通・経済の結節点で、稲作や山野河海における生業が展開され、かつ異なる宗派の信仰拠点が確認される福井県九頭竜川河口域

一帯を検討フィールドに設定し、文書調査やフィールドワーク、堆積物調査等を実施する。その上で、人文科学分野の分析結果と自然科学分野の分析結果とを突き合わせ、相互検証して、環境的要因に回答する民衆生活の実態を明らかにする。

2. 今年度の研究計画

本研究は、A：北陸地方における古気候データの精緻化 B：災害イベントの発生と集落景観の変遷 C：集落立地環境と地域社会の形成 D：環境的要因と信仰の拡がりとの相関関係 という4つの検討テーマを中心に研究を進めていく。今年度は以下の通り研究テーマを設定した。

A：季節ごとの降水量変動を調べるために年輪年層内の分析を実施する（佐野・箱崎）。

B：昨年度採集した三国港周辺における堆積物を分析し、イベント層の年代を比定する（篠崎）。近世における三国港再編について検討する（三好）。

C：福井県あわら市細呂宜一帯での調査を実施し、GISを用いて用水路の灌漑域を可視化する。同時に聞き取り調査を展開し、生業や慣習について把握する（赤松・田中・土山・黒滝）。豊原寺関係史料から14～16世紀における九頭竜川河口域の経済活動について検討する（角）。

D：内閣文庫所蔵大乘院文書を用いて河口荘の荘園領主たる興福寺大乘院の動向を追う（林）。瀧谷寺文書を検討し、同寺の中世における信仰圏と生活圏とを比較する（藤井）。

全体としては、3回の合同研究会（うち1回は現地巡見含）を開催する。

3. 今年度の研究経過

今年度の研究経過については以下の通りである。

第4回研究会 令和7年7月16～17日 国立歴史民俗博物館

報告：村木二郎「中世初頭の北陸のモノの流れと在地の人びと―越前・若狭を中心に―」

長谷川裕子「河口荘域の村々の生業と生活―福井大学附属図書館所蔵「小島家文書」を中心に―」

第5回研究会 令和7年10月3～5日 福井市地域交流プラザ、および三国港・細呂宜一帯の巡見

報告：藤井雅子「越前三国港と瀧谷寺」

小野正敏「阿波賀・街道と宿、渡」

第6回研究会 令和8年2月26～27日 国立歴史民俗博物館

報告：篠崎鉄哉「堆積物記録に基づく過去の治水復元：福井県坂井市三国町を中心に」

土山祐之「『中世民衆生活史の再構築』の方法と実践」

共同研究員の年間活動報告

現地調査 令和7年6月5日～7日 あわら市郷土歴史資料館、細呂木駅周辺

現地調査 令和7年9月25日～26日 九頭竜川鳴鹿土地改良区坂井支局

現地調査 令和7年10月16日～18日 福井県あわら市細呂木一帯

現地調査 令和7年11月6日～8日 福井県あわら市細呂木一帯

なお、第6回研究会は、災害対応という共通した視角を有する開発型共同研究「弥生時代の洪水災害に対する人びとの選択と社会変化」（代表：山下優介）との合同で開催した

4. 今年度の研究成果

本年度も本共同研究を構成する4つのグループにわかれて研究を進めた。いずれのグループもほぼ計画通り研究が進んでいる。また、各グループ間での理解促進、共通認識を形成するために、計3回の研究会を開催している。

以下、それぞれのグループにおける今年の成果を記す。

A：北陸地方における古気候データの精緻化

…13世紀前半の年輪を用いて季節内降水量変動を分析した。その結果、春・秋季の降水量変動は年ごとに大きく異なること、春から秋にかけての降水量変動には複数のパターンがあることなどが明らかになった。

B：災害イベントの発生と集落景観の変遷

…地質堆積物を分析し、津波とみられる複数のイベント層を確認した。イベント層の年代測定の結果、イベントの発生時期は本研究の対象年代とは大きく異なることが判明したが、当該地域における津波イベント層の発見自体は、地質学上極めて重要な知見である。

C：集落立地環境と地域社会の形成

…福井県あわら市細呂宜一帯でフィールドワークを実施し、水利調査および聞き取り調査を通じて、各集落に

における水利灌漑体系の類型と習俗・慣行を把握した。また、GISを用いて福井県坂井市上兵庫・下兵庫地区の地籍図のジオリファレンスを実施し、景観復原に取り組んだ。

D：環境的要因と信仰の拡がりとの相関関係

…瀧谷寺文書の検討を進め、同寺の中世における信仰圏が地域生活圏に基づいて形成されていた可能性を見出した。あわせて、経塚および勧進の実態についても検討をすすめ、モノの移動やモノに対する人のアクセス、在地僧侶と広域活動僧侶との役割の差異などを明らかにした。

5. 研究組織（◎は研究代表者）

赤松 秀亮 別府大学・講師

角 明浩 坂井市教育委員会・学芸員

林 遼 東京大学史料編纂所・助教

田中 大喜 日本大学・教授

藤井 雅子 日本女子大学・教授

三好 志尚 京都大学大学院人間環境学研究科・研究員

篠崎 鉄哉 東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻・特任研究員

黒滝 香奈 一橋大学・特任講師

◎土山 祐之 本館研究部・テニュアトラック助教

箱崎 真隆 本館研究部・准教授

佐野 雅規 本館研究部・特任准教授

【共同利用型共同研究】

(19) 「インドネシア・パチュアニ遺跡出土元様式青花に関する調査・整理及び研究」

（研究代表者 張 睿帆）

1. 目的

貿易陶磁の優品として、元代中国産の青花磁に関する研究はすでに多く行われている。その中で、特に中国以外での元青花の分布については、近年以来研究者の注目を集めている。また、産地である景德鎮では、最近の発掘調査により、湖田窯遺跡、珠山御窯場遺跡、落馬橋遺跡など、元青花の生産遺跡が次々に確認され、消費遺跡から出土したものとの比較研究も可能となっている。したがって、本研究では、国立歴史民俗博物館に収蔵されている「A-372 インドネシア・パチュアニ遺跡出土中国青花」を対象とし、この14—15世紀を中心とする青花磁資料群について調査・整理・研究を行うことによって、その詳細を明らかにする。

2. 研究経過

本年度には、計四回にわたる資料調査を実施した。

まず、初回の資料調査は、5月12日から同16日までの5日間にわたり実施し、当該資料群のうち既に分類済みであった1124点（資料番号A-372-1～A-372-26）について、熟覧および記録撮影を行った。また、二回目の資料調査は7月22日から同25日までの4日間で、中国側窯跡出土品ならびにインドネシア、シンガポール、ホンコン各機関所蔵されているマジャパヒト期の青花磁器資料を参照した上で、前回調査対象資料の再精査を行った。さらに、三回目の資料調査は、1月26日から同29日までの4日間、四回目は2月2日から同10日までの7日間にわたり実施した。これら二回の資料調査では、主にこれまで未分類であった797点の資料（資料番号A-372-27）を対象に、型式分類および記録撮影を行った。

以上のとおり、本年度における調査日数は延べ20日間に及ぶ。

3. 研究内容

近代以来、地元では盗掘が盛んに行われてきたため、現在、マジャパヒト期の遺跡から出土された青花磁器の分布状況については、インドネシア国内では国立考古研究センター、ジャカルタ国立博物館、トロウラン博物館などの考古・収蔵機関に所蔵されている一方で、シンガポールのシンガポール国立大学（NUS）東南アジア研究室お

およびアジア文明博物館（ACM）、中国のホンコン中文大学（CUHK）文物館、および日本の国立歴史民俗博物館に散在されている。特に骨董品とした青花磁器の高価値性によって、実はインドネシア国内の所蔵量は海外の諸機関と比べてはるかに及ばない状況になっている。

また、本研究と関連する先行研究については、特に2007年に刊行の『Catalogue of the Chinese Style Ceramics of Majapahit: Tentative Inventory』および、2010年に刊行の『インドネシア・トロラン遺跡発見陶磁の研究 ―シンガポール大学東南アジア研究室保管資料―』が挙げられる。前者は、インドネシア国立考古研究センターが1976年から1990年にかけて実施した、マジャパヒト王国の都であるトロラン遺跡の発掘調査に基づく報告書であり、その中で青花磁器が数多く掲載されている。後者は、専修大学の亀井明德氏を中心とする研究グループによって作成されたもので、シンガポール国立大学（NUS）東南アジア研究室に所蔵される、トロラン遺跡出土と伝えられる青花磁器7199点を対象とした整理調査報告書である。

なお、文献史料としては、14世紀前半に成立した『島夷志略』に「青白花碗」の記載が見られるほか、15世紀前半成立の『瀛涯勝覧』および『西洋番国志』などにも「青花磁器」に関する記録が確認される。これらの記述はいずれも青花磁器を指すものと考えられる。

本研究の調査・整理によって、本資料群の産品様相については、典型的な元代末期のいわゆる「至正型」青花磁器を主体とし、これに加えて、文様表現がやや荒い「延祐型」の青花磁器が一部に含まれることが明らかとなった。この「延祐型」資料の存在は、前述した『島夷志略』の記載と対応でき、つまり14世紀30年代頃には、マジャパヒト王国において既に青花磁器が流通していたことを示唆するものと考えられる。また、少数ではあるが、本資料群の中で元代の釉裏紅や青白磁なども伴出している。

一方、明代前中期の製品については、官窯青花を主体としつつ、少量の卵白釉器やベトナム産青花、さらに年代の特定が困難な白磁や元・明時代の磁州窯磁器の破片などが含まれる。特に明初永楽・宣徳期の官窯青花磁器の存在は、鄭和の西洋下りとの関連を示唆する重要な資料であると考えられる。

さらに、本資料群に含まれる器種は多岐にわたり、碗、皿、盤、匱、杯、高足杯、小壺、扁壺、酒会壺、蓋、梅瓶、玉壺春瓶、器台、盒子、鳥餌罐などが確認される。

4. 研究成果

令和7年度には、国立歴史民俗博物館所蔵の「A-372 インドネシア・バチュアニ遺跡出土中国青花」資料群について初歩的調査・整理し、さらにインドネシア、シンガポール、中国の諸収蔵機関に点在されるトロラン遺跡出土の青花磁器をはじめとするマジャパヒト期資料との比較検討を行い、加えて文献史料の記載を総合的に検討した結果、このスラバヤ市近郊から出土された一群の資料は、マジャパヒト王都のトロラン遺跡における青花磁器とは器形・文様においてほとんど一致することが明らかとなった。つまり、本資料群は当該時期の遺存としての性格は間違いないと考える。また、出土地情報を踏まえると、この資料群は満者伯夷期の四大主要都市の一つであり、王都「満者伯夷」（Trowulan）と繋がる港とした「蘇魯馬益」（Surabaya）に関わる遺存である可能性が指摘できる。さらに、類似資料は、同じくマジャパヒト期の港市であり、多数の華人およびイスラーム教徒が居住していた「杜板」（Tuban）や「新村」（Gresik）においても確認される（図1）。このことから、青花磁器そのものの存在は、当時の東南アジア港市における華人およびイスラーム教徒の生活様式の一部を示すものと考えられる。今後は、本資料群について、特にベトナム産青花と景德鎮産青花の識別に重点を置き、窯跡出土資料に基づくさらなる精査が必要である。また、従来ベトナム産とされてきた資料の中に、中国雲南省産青花が含まれる可能性の有無を検討することも、中世海域交流史の解明に資する重要な課題であると考えられる。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

◎張 睿帆 寧波大学人文・メディア学部 歴史学系 講師

○村木 二郎 本館研究部 考古研究系 准教授

(20) 「古代東大寺領北陸莊園の経営と地域社会」 (研究代表者 村上 菜葉)

1. 目的

本研究は、国立歴史民俗博物館所蔵の「正倉院文書」複製のうち、東大寺領北陸莊園関係史料を中心に分析しつつ、その他関連史料も検討することで、8世紀半ばにおける東大寺が莊園開発のために現地でいかに交渉を進めたのか、莊園経営のための必要労働力をどのように確保したのかを考察する。なかでも、「正倉院文書」に関連史料

が複数残る越前国足羽郡道守荘を主たるフィールドに定めつつ、当該期の東大寺による荘園経営の特質、および東大寺領荘園と地域社会の関係を具体的に明らかにすることを目的とする。

2. 研究経過

当初の計画では、5月に国立歴史民俗博物館において第1回目の「正倉院文書」複製の調査を実施する予定であったが、諸事情により8月4日～6日に実施した。本調査では、「正集 第六巻 複製」「続修 第十七巻 複製」「続修 第二十五巻 複製」「続修 第四十六巻 複製」を実見・観察し、従来の研究に対する疑問点を深めるとともに、今後の作業方針を固めることができた。

また、9月20日～22日にかけて、福井県において荘園故地の現地調査を実施する予定で準備を進めていたが、体調不良により直前で調査を見送ることになってしまった。その後もしばらく体調の様子をみていたものの、遠距離移動と長期の宿泊を伴う調査が困難であったため、当初計画していた調査は1回のみの実施となった。

3. 研究内容・成果

第1回目の調査の事前準備、および同調査によって得られた成果の概略を記す。

「正倉院文書」として残る造石山寺所関係文書の紙背のうち、越前に関係する文書（以下、「越前関係史料」とする）は、安都雄足の私田経営に関する記録とする小口雅史氏の説を詳細に検討した（「安都雄足の私田経営—八世紀における農業経営の一形態—」、『史学雑誌』96巻6号、1987年）。小口氏は、越前関係史料の文書様式が「解」か「啓」で、それらに宛所が記されていないこと、また私印が集中的に確認できることを重視する。さらに、越前関係史料の表面は「造石山院所公文案帳」で、雄足の責任下で一括して反故にされた可能性が高いことから、雄足の一存で処分できる文書であったと指摘する。これらの点を踏まえ、越前関係史料が雄足に宛てられた私的な文書であり、雄足の私田経営に関するものと論じている。

越前関係史料が個人間のやりとりによる文書であり、かつ自明的な内容であることは間違いなく、この点については首肯できる。しかし、氏の指摘は越前関係史料が私的文書という性格を有することを明らかにしたにとどまり、それが雄足の私田経営のために作成された文書であることまでは十分に証明されていない。

小口氏は続いて、東大寺領北陸荘園についてその管理統制機構をメルクマールとして3つの時期区分を行い、これに基づき自説を補強している。例えば、越前関係史料の作成年が第2期の荘園衰退期（天平宝字3〈759〉年頃～同年末）と重なる点に注目し、この時期には造東大寺司に代わって三綱が寺領経営に乗り出しているにもかかわらず、越前関係史料が集中して造東大寺司主典であった雄足に宛てられていることを問題としている。

しかし、筆者の調査によれば、越前関係史料は天平宝字2年7月～同4年3月に作成されたものであり、この時期にはなお造東大寺司の官人が現地に派遣され、荘園経営を担っていたとみられる。同3年12月3日付「越前国足羽郡糞置村開田地図」と同3年11月14日付「越中国諸郡荘園総券」には、「造寺判官外従五位下上毛野公真人」が寺僧よりも先に署名を加えている。さらに、越前関係史料に含まれる同2年7月15日付「越前国田使解」（続修25巻）は、足羽郡の「草原三宅」への進上稲を代納した分の直銭について、「田使」たる「秦忌寸広人」が署名して報告している。「田使」という役職は、越前国東大寺領桑原荘の曾祿連乙麻呂の例が知られるように、造東大寺司の官人であり、寺領経営に直接関与していた。広人が「田使」の立場から署名したからには、「越前国田使解」は東大寺領荘園に関する文書とみなすべきである。とすれば、造石山寺所関係文書の紙背には、東大寺領荘園の経営のために作成された史料が残存していることになる。

秦広人は天平宝字3年4月8日付「生江臣息嶋解」（正集6巻）にもその名が見え、「秦広人所」において出挙活動を行った形跡が認められる。本文書の紙背は同6年5月付の「造石山寺所解移牒符案」であるが、先述の「越前国田使解」と同様に、造石山寺所関係文書の紙背に東大寺領荘園関係文書が含まれるとすれば、石山紙背文書という理由のみから、本文書を雄足の私田経営に関する史料とする小口氏の見解には、再検討の余地がある。

天平宝字4年3月20日付「画師池守解」（正集6巻）についても、小口氏は石山紙背文書であり、かつ雄足の私田経営に関する史料であると判断している。だが、本文書の裏は何も書かれていない。すなわち、本文書が造東大寺司から造石山寺所に移管されたかは不明であり、雄足の私田経営に関する史料と直ちに位置づけることはできない。画師池守もまた秦広人と同様、先述した「生江臣息嶋解」に登場する人物であり、「所」における出挙の実施を窺わせる。

以上のように、「正倉院文書」として残る越前関係史料すべてを雄足の私田経営のために作成されたと結論づけるには、小口氏の論証では十分とは言えない。国立歴史民俗博物館における第1回調査では、越前関係史料の表裏関係を整理するとともに、その他の造石山寺所関係文書の紙背を検討した。その結果、造石山寺所で作成された文書の表面がすべて、雄足の個人文書であると言い切れないことを確認した。すなわち、造東大寺司において反故

となった文書も含まれ、越前関係史料には東大寺領荘園の経営に関わる文書が混在している可能性がある。本年度は研究課題の推進を一時中断せざるを得なかったが、今後も引き続き取り組んでいきたい。

4. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

◎村上 菜葉 岡山大学文明動態学研究所 客員研究員

○三上 喜孝 本館研究部 教授

(21)「近世寺社建築における彫物評価に関する再検討 —天沼俊一旧蔵資料に着目して—」 (研究代表者 松山 奈穂)

1. 目的

本研究は、日本建築史学における近世寺社建築の彫物評価に関する新たな知見を得ることを目的とした。なお、ここでいう彫物とは、簷股・木鼻・手扶み・欄間等の寺社建築部材に施された装飾表現としての彫刻を指す。

一般に、近世寺社建築における彫物装飾は関東地方を中心として発展した建築文化の一つであり、特に近世後期には、建物全体に高密度の彫物を施し、彩色を付さない素木仕上げとする表現が広く展開したことが知られている。これまでに、神社建築形式の観点からその変遷を検討する研究や、彫物大工の系譜・作例を整理する研究が蓄積されてきた。一方で、建築史研究の中で彫物がどのように認識され、位置づけられてきたのかという研究史的視点については十分な蓄積があるとは言い難く、検討の余地がある。この点を検討する上で重要な手がかりとなるのが、日本建築史学黎明期に建築細部研究の基礎を築いた建築史家天沼俊一である。天沼は建築細部意匠の変遷を体系的に整理したことで知られるが、その調査過程において、彫物を含む細部意匠をどのような視点から観察していたのかについては、これまで明らかにされてこなかった。そこで本研究では、国立歴史民俗博物館所蔵の天沼俊一旧蔵資料のうち野帳および写真資料を対象とし、天沼の調査活動における建築装飾観察の実態を検討することを目的とした。とりわけ、天沼の著作内で扱われてこなかった近世後期の彫物に注視しながら、彫物研究の新たな視点を獲得することを目指した。

2. 研究計画

本研究では、天沼俊一旧蔵資料のうち野帳および写真資料を中心に調査を行い、天沼が建築細部意匠をどのような視点で観察していたのかを検討することを計画した。

具体的には、第一に天沼の著作や野帳、写真資料の調査を行い、その記録を精査することで、細部意匠に対する着眼点や評価軸を整理することとした。第二に、写真資料の中で建物名称が未特定のものについて、天沼の著作や野帳記録との照合を行い、対象建築の同定を進めることとした。第三に、必要に応じて現地調査を実施し、写真資料や野帳記録との比較検討を行うこととした。また、資料調査の過程で得られる知見をもとに、今後予定されているデータベース再編を見据え、写真資料の整理方法についても検討することとした。

3. 研究経過

本研究では、天沼俊一旧蔵資料のうち、野帳および写真資料を中心に調査を実施した。

野帳（H-1020-8）は全34冊が確認されている。これまでの所蔵上の配列は時系列や記録内容に基づくものではなく、年紀不明のものも多かったが、今回内容の精査を行ったことで、大正10年（1921）頃から昭和6年（1931）頃までの調査記録が含まれていることが確認された。特に昭和2年（1927）から昭和5年（1930）頃の記録が比較的充実していることが明らかとなった。さらに、天沼の調査記録のうち、年月日と訪問先が特定できるものは269件にのぼり、著作と照合することで、天沼の調査動線を把握する手がかりが得られた。これらの野帳に記録された内容を整理すると、建築の実測図面や組物、木鼻、簷股等の細部意匠に関する寸法記録が多く含まれていることが確認された。そのほか、文様や彫刻像、石塔、燈籠等建築以外の造形物に関する記録も多い。加えて、移動費や昼食の記録といった調査時の行動に関する記述も見られ、当時の調査活動の具体的な実態を示す資料であることが明らかとなった。

次に、8,000点を超える写真資料について、現物の内容把握を行った。とりわけ、天沼の著作では言及されていない近世後期の彫物を有する建築遺構に対しての関心を検討するため、該当資料の抽出を試みた。あわせて、写真の表裏や台紙に記された撮影対象名・撮影年月日に関する情報を収集し、著作や野帳との照合を通じた同定作業を進めた。また、これらの資料調査を補完するため、現地調査を実施した。関東地方周辺を中心に、天沼の調査範囲

を踏まえ、中部・関西地方においても調査を行った。さらに、資料整理の過程において、指導教員である島津美子准教授とともに、今後のデータベース再編を見据えた写真資料の分類方法について検討を進めた。

4. 研究成果

本研究では、天沼俊一旧蔵資料のうち野帳および写真資料を対象とし、天沼の調査活動における建築装飾観察の実態について検討を行った。その結果、天沼の調査動線について、著作等からこれまでに想定されてきた以上に広範囲に及んでいたことが明らかとなった。また、同一の遺構や地域に対して複数回にわたり継続的に訪れている事例も確認され、単発的な踏査ではなく、反復的な調査を通じて理解を深めていた実態が窺えた。特に野帳からは、建築細部意匠に限らず、文様や彫刻像、石塔、燈籠等の建築以外の造形物も含めて、寸法や構成を重視した記録を行っていたことが確認された。これらの記録は、著作において体系化される以前の観察段階における関心の広がりや試行的な視点を示すものとして重要である。一方、写真資料の検討からは、天沼が近世後期の彫物にも関心を向けていた可能性を示唆する知見が得られた。これは、これまでの著作を中心とした理解においては指摘されてこなかった側面であり、天沼の建築観察の射程を再考する手がかりとなった。以上の成果は、天沼の観察視点の再検討を通じて、近世寺社建築における彫物研究の整理に資する基礎的知見を提示するものである。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

◎松山 奈穂 日本女子大学大学院人間生活学研究科・生活環境学専攻2年

○島津 美子 本館研究部 情報資料研究系 准教授

(22) 葬儀用祭壇の意匠研究—歴史的・伝統的様式と現代的事例の比較・考察 (研究代表者 瓜生 大輔)

1. 目的

本研究は、葬儀に対する価値観の変化にともない多様化する葬儀用祭壇に着目し、その歴史的・様式的特徴および変容を分析することを目的として実施した。具体的には、歴博所蔵の葬儀用祭壇および関連資料の網羅的な調査、葬儀専用斎場で使用されている祭壇の調査、そして、現在もなお祭壇に依存せず葬列を重視する与那国島での調査を実施した。これらの多角的な調査を通して、過去と現在の祭壇の意味、差異、共通点、変化の経緯を明らかにすることを目指した。さらに、民俗学的、文化人類学、およびデザイン学的視点から、これらの変化を引き起こした要因の検討に取り組んだ。

2. 研究経過

山田慎也教授の指導のもと、本館所蔵の葬儀用白木祭壇一式、白布祭壇一式、それぞれを組み立て、閲覧した。実物に触れながら、各葬具の名称・役割、意匠の特徴、歴史的意義について解説を受け、写真・音声・映像資料として記録した。

東京都、栃木県、埼玉県、千葉県、福井県、大阪府の葬儀社を訪問し、現在使用されている葬儀祭壇および葬儀空間の調査を行うとともに、葬儀社担当者への聞き取り調査を実施した。例えば、故人の特徴を祭壇の意匠に反映する「オリジナル祭壇」の制作に力を入れている福井県の葬儀社・株式会社アスピカの担当スタッフへのインタビュー調査を行った。あるいは、大阪府河内長野市・富田林市の公営斎場を訪問し、斎場で所有・保管する祭壇の調査を行った。

このような現代的な祭壇の状況を把握した一方で、現在も葬列、土葬（風葬）・洗骨の習慣が残る沖縄県（特に与那国島）の葬具の視察を実施した。とりわけ、葬列の際に遺体（あるいは遺骨）を搬送する輿である龕（ガン）を与那国島および那覇市内にて視察した。与那国島では、現在も各集落ごとに所有している龕について、また直近の使用事例に関する聞き取り調査を実施し、その意匠・機能と文化的意義についての把握を試みた。

これらの調査を通して、当館所蔵の祭壇の歴史・文化的価値と、現在の使用状況、そして現代的な祭壇・葬儀空間との差異を比較・考察した。現代の葬儀では、戦前の葬列中心の儀礼から、徐々に祭壇というプロダクトが主役となっていったと言われる。現在もなお葬列を中心とした葬儀を実施する与那国島の状況は、この儀礼から祭壇というプロダクト中心の移行過程を考察するうえで非常に重要な事例であることを確認した。本研究活動を通して、現在の葬儀祭壇と葬送儀礼空間の成立の背景、理由、意義を考察し、今後の展望を検討した。

3. 研究成果

今日の葬儀の構成要素は、A. 遺体の処置・安置・搬送、B. 儀礼の遂行、C. 故人を偲ぶための／象徴する演出に分類できる。これまでの葬儀祭壇は、主にBを担うためのものであったが、複数の地域での調査を総合すると、徐々にCの機能が重要視される傾向にあることが明らかになった。

山田教授による20年ほど前の研究では、企業・組織が主催する社葬などでCの機能が色濃いオリジナル祭壇の施工例が報告されていた。福井県のアスピカの事例では、ごく普通の一般家庭を施主とする葬儀において、故人の特徴を基調とする祭壇や、遺族の故人への想いを具現化したオリジナル祭壇制作の実態が明らかとなった。前者の例としては、ゴルフ好きの故人をモチーフとした祭壇、鯉の養殖を営んでいた故人をモチーフとした祭壇、あるいは鉄道好きの故人を象徴する「鉄道が走る様子をあしらった花祭壇」などが例として挙げられる。後者の例としては、ハートやリボンをあしらった祭壇などが挙げられる。

本館所蔵の白木祭壇は、土葬時代の葬列に用いられていた輿の名残として、祭壇上部に意匠・装飾として輿があしらわれており、故人を送る儀礼的要素が意匠として色濃く反映されている。大阪府河内長野市の斎場では、依然としてこの型の祭壇がもっとも一般的に使用されていることが確認できた。同市での葬儀では、現在でもほとんどの葬儀を葬家の菩提寺の僧侶が執り行うといい、信仰心の深さと、施主らの伝統的葬儀形態への支持が根強いと推察される。

しかし、東京近郊をはじめとするその他の葬儀場では、モダンな意匠の祭壇が常設され、あしらう生花の量で祭壇の価格が決定される事例が一般的である。モダンな祭壇は、伝統的な儀礼の意味をもつプロダクトは排除され、遺影を中心とした故人の存在が強調される。あるいは、会葬者が故人との別れの時間を過ごすための機能に特化されているとも捉えられる。

今日、ほとんどの葬儀空間では、故人を偲ばせる写真や映像といった展示スペース（Cの機能）が設けられている。僧侶の中は、葬儀空間の中にそのようなメモリアルコーナーを設置することを禁じる者もいるというが、祭壇の対面や横、あるいは葬儀場の受付スペースなどに設置されるのはごく一般的なことである。これは、比較的保守的な大阪府河内長野市の斎場でも同様であった。そして、前述したオリジナル祭壇の事例の場合、祭壇そのものも故人を偲ぶための／象徴する演出として機能する例も見られるようになってきた。

しかし、沖縄県・与那国島の葬儀は例外である。同島では、輿の一種である龕（ガン）と呼ばれる道具が現在もなお使用されている。現在、ほとんどの葬儀では、石垣島で火葬された遺骨が飛行機で島に帰還し、島内を一周してから自宅に戻る。そして、龕に乘せられ、墓地に搬送される。龕は主にAの機能を担うと同時にBの要素も併せ持つ。龕は各集落ごとに保管され、葬儀のたびに使用される。一方、地域住民により手分けして手作りされる造花や旗といった一度きりしか使用しない葬具のすべては、Bの機能を果たすものである。与那国の葬儀では、Cの機能は存在しない。

以上、本研究では、葬儀祭壇の意匠に着目し、館内所蔵の資料の理解と可能な限り幅広い地域での実地調査を通して、歴史的・様式的特徴および変容の分析に務めた。前述の通り、今日の葬儀の構成要素は、A. 遺体の処置・安置・搬送、B. 儀礼の遂行、C. 故人を偲ぶための／象徴する演出に分類でき、これまでの祭壇は、主にBを担うためのものであったが、徐々にCの機能が重要視される傾向にあることが明らかになった。しかし、与那国島のように土葬（風葬）が前提であった時代の儀礼を今もなお現代的な方法で遂行する地域もある。これは、Cの機能が重視されがちな現代日本において、葬儀を行う意味や意義を考えさせる事例でもある。今回の研究期間内において、与那国ではなぜ依然としてBが重要視されるのかの考察は未着であるが、葬儀祭壇の意匠・デザインという切り口で今後の研究を進展させるための一定のデータ収集を達成することができた。

4. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

◎瓜生 大輔 芝浦工業大学デザイン工学部 准教授

○山田 慎也 本館研究部 民俗研究系 教授

(23) 漢代画像石墓の画題配置と墓室構造

（研究代表者 岩崎 志保）

1. 目的

本研究は、漢代画像石墓の構造分類と編年研究を基盤として、墓室内における画像石の配置および画題の分析を通じ、被葬者の階層性ならびに当時の社会・思想のあり方を復元的に解明することを目的とする。

代表者はこれまで、単体の画像石であっても墓室内の配置を推定し得ること、さらに画題内容から原位置の復元が可能であることを指摘してきた。これらの配置と画題は、被葬者の生前の生活や職歴、さらには死生観や思想を反映する重要な手がかりである。

本研究では、歴博所蔵の画像石拓本資料（山東省82点、陝西省北部104点）を対象とし、従来十分に活用されてこなかった原拓資料の精査を行う。原拓は一次資料ではないものの、細部の形状や彫りの深度を観察し得る点で学術的価値が高い。本研究ではさらに、原拓の3D撮影を試み、画仙紙上に残る凹凸情報の可視化・分析という新たな方法論の有効性を検証する。

また、当該資料は現在概要のみが公開されており、体系的整理がなされていない。そこで本研究では、これら拓本の分類および編年の位置づけを行い、詳細な資料リストとして公開することを目指す。

以上の分析を踏まえ、山東と陝西北部における画題選択や配置の差異に注目し、地域間にみられる死生観や表象の違いを明らかにするとともに、漢代説話との関連性を視野に入れつつ、漢代社会の動態の一端に迫る。

2. 研究の経過

本研究では6月・1月・2月の3回、貴館において資料調査を実施した。

令和6年度のA-584資料群撮影時に検討した手法を用い、SfM-MVSによる三次元計測を実施した。6月に31点、1月にA-583資料群の残りの撮影を完了した。この時点で高精細カメラによる撮影データのほうがアーカイブとして利用しやすいという観点から、A-584資料群104点についてもすべて再撮影を実施することとした。1月と2月にA-583・A-584の高精細撮影も完了した。2月にはA-617「沂南漢画像石墓拓本群」について、A-583資料との比較検討のため熟覧を実施した。

3. 内容

以上の計測・撮影と同時に拓本表裏の熟覧を実施し、石材サイズ別に分けたうえで、技法等の特徴から分類を試みた。参考とするのは正式報告書が刊行されているA-617沂南漢画像石墓資料群である。これらと比較してA-583資料群の石材種類をみると墓門および各室の壁面を構成したと想定される横額石・柱石と奥壁等に相当すると考えられる石材に分けることができる。藻井と斗拱は認められない。

ここでは石材種類をほぼ正方形（A・B）・横長の長方形（C・D）・縦長の長方形（E・F）の3種に分け、サイズで細分した。A～Cは墓室あるいは祠堂の壁面・奥壁を想定する。Dは墓門・各室の横額を想定しうる。E・Fは墓室の壁面かつ墓門・室門を構成する支柱・中央柱に対応する石材と考えている。

次に画像の技法と画面構成から、①～⑥の6群にグルーピングを行った。石材タイプA～C・E・F類について、①～⑤は剔地浅浮彫あるいは凸面線刻技法を主とするもの、⑥は剔地浅浮彫を主とするものと、技法により分けた。これらの類例を検討すると⑥は山東省嘉祥県付近の出土である可能性が高い。なかでもA類はそのサイズ感から、宋山画像石群に近似しており、祠堂の壁面材と想定される。B類についても宋山、武氏祠画像石との類似点が認められる。C類は比較的大型の石材であり、墓であれば後室奥壁等に相当するものであろう。

一方①～⑤は山東省北西部、現在の済南市付近に類似資料が多い。より詳細な検討が必要であるが、なかでも両城鎮や泰安の画像石に類似した傾向を認める。今後画題内容の比較や、騎馬や馬車の表現等、個別画像ごとの比較を進めたい。

こうした分類やグルーピングは、墓室の構築材である画像石本来の意義を踏まえ、墓室構造復原の手がかりを得ることに繋がる。他方、画題内容の検討によっても、やはり構造の判明している画像石墓の事例から、本来の位置を想定可能となる。この両方の検討により拓本資料であっても、歴史資料としての評価に繋がると考えている。

4. 成果

本研究では、A-583山東省漢画像石拓本集を対象に原拓の三次元計測を実施し、高精度なオブジェクトデータを取得することで、拓本の立体的分析手法の有効性を示した。さらに原拓の精査とデータ観察に基づき、技法・画像内容の検討および石材分類を進め、複数のグルーピングと出土地点推定の見通しを得た。加えてA-583・A-584資料の高精細撮影を行い、デジタルアーカイブ化の基盤を整備した。

分析の過程ではいくつかの重要な知見も得られた。第一にA-583資料には墓門・室門の門扉画像石が含まれないことが確認された。この点は既知の事例とも共通するが、一方で門扉画像石を有する墓例も存在することから、単純な地域差では説明できない可能性が示唆された。第二に、A-584資料との比較により、壁面材（本研究でいうC類）のサイズに差異が認められ、墓室規模や構造と関連する地域的特徴の可能性が浮かび上がった。

以上の成果により、原拓資料を用いた画像石研究の方法論的展開とともに、資料群の位置づけに関する新たな課題と展望を提示することができた。今後は、出土地点および類例との比較分析を進め、墓室構造の復元と編年の精緻化を図る予定である。

5. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

◎岩崎 志保 岡山大学文明動態学研究所・准教授

○上野 祥史 本館研究部・准教授

(24)「近世社会における雅楽文化の拡がり と 楽家」

(研究代表者 五味 玲子)

1. 目的

本研究は、雅楽を継承する家「楽家」の交流関係を多角的に分析し、特殊な技能集団であった楽家の実態と、その活動と雅楽文化を支える人びとのネットワークを明らかにすることを旨とする。具体的には南都楽所(奈良方)の楽家、左舞・笙を伝える「雅楽」の家である辻家の資料、国立歴史民俗博物館所蔵資料「南都楽人辻家資料」(H-1823)を分析する。一つの楽家に着目し、家が残した史料から交流関係に関わる記述を抽出・分析することで、楽家を中心とする人びとと様相、雅楽文化の拡がりなどがどのようなものであったかを考察する。

本資料群は近世における幕府の儀礼に関するものや諸寺社との関わりを記すものも多く残されており、社会の移り変わりの中で、どのように当時の人びと、そして地域社会が雅楽に関わっていたのかを広く解明することができる貴重な資料群である。

近世期雅楽文化に関する研究史において、日本各地で雅楽の普及状況の実例が報告されている。とくに近年、楽家と武家との交友関係・奏楽伝授のあり方や、町人による雅楽享受の様相が報告されていることは注目に値する。研究が進んでいる武家との関わりについても今後更なる報告が待たれるところであるが、武家以外の人びと、諸寺社や町人・農民層との関係については、より一層の事例報告の蓄積が必要である。

そこで本研究では所蔵資料を用いて、とくに諸寺社や町人・農民層との関わりに注視し分析することで、新たな事例を報告したいと考えた。

また、交流関係は楽家と外部だけでなく内での関わりも意識する。外への拡がりを検証する上でも、楽家内においてどのように奏楽が伝授・継承されていたのか、教習の形などに注目し分析をすすめる。楽家内での受容のあり方についても考察を試みたい。

2. 研究計画

「南都楽人辻家資料」は平安期から昭和期の資料数592件(644点)という膨大な資料群である。特に、日記・覚書類が多く残されていることが本資料群の特徴といえる。本研究では、その中から寛政期(1789年-1801年)から明治初年(1877年頃)までの資料90点の分析を進める。調査工程としては、(1)基礎調査:資料のデジタル撮影と史料翻刻、(2)実態の解明を目的とした記述の抽出・内容分析と調査、(3)他機関所蔵資料との比較検証、以上3点を行うことにした。(1)(2)(3)は同時進行となる。翻刻を行ないつつ関連事項を抽出し、内容の分析・検討を進めていく。

成果としては、①研究資源としての史料翻刻の公開、②交流関係に関わる事項の抽出とデータベース化、③楽家を中心とするネットワークの具体的な復元、新たな事例の報告の3つを考えている。

一つの楽家の交流関係に関わる事項を抽出し事例を公開することだけでも、近世後期における雅楽文化ネットワークの構造と特質を理解する上での新たな事例、新たな知見を提供することになる。またその成果は近代への社会の移り変わりの中でその雅楽文化ネットワークがどう変化していくのかを見通すための手がかりとなると考える。

3. 研究経過

今年度は(1)(2)を重点的に進めることができた。

(1) 基礎調査:資料のデジタル撮影と史料翻刻

資料のデジタル撮影は博物館事業課資料係よりデジタルデータを提供していただいた。よって順調に史料翻刻を進めることができ、今年度は、比較的長期間の記録が残る、辻則正(安政5年8月21日に則察から則正に改名)日記、嘉永2年(1849年)から文久2年(1862年)の日記(内嘉永6年は欠)13点の翻刻を行った。

(2) 実態の解明を目的とした記述の抽出・内容分析と調査

翻刻した日記から記述の抽出、内容分析を進めた。①辻則正への入門の記述、②稽古の記述、③奏楽・奉楽の記述という3つの交流関係に関わる事項の抽出を行った。

(3) 他機関所蔵資料との比較検証

他機関資料として三方楽所の記録「楽所録」(国立国会図書館蔵)の調査を行い、今年度は則正の同居先である兄近陳の日記写真データを入手した。辻近陳家日記の翻刻を進め、比較検証を行っていくと同時に、他家資料との比較検討も行うことが今後の課題と言える。

4. 研究成果

今年度は辻則正の日記13点の翻刻を行い完了することができた。記述の抽出もおおむね順調に進み、交流関係についていくつかの知見を得た。以下に主な知見を報告する。

〈東遊一舞の再興〉

嘉永7年の日記には、天保4年の南祭(賀茂臨時祭)で再興できなかった一舞が、古譜の発見をきっかけに再興された過程が記録されている。則察と兄近陳が古記を参考に唐舞に基づく再興を願い出たが、その後、長持から古譜が発見され、京都方楽人の安倍季資や三条侍従実美と相談しながら再興が進められる。主上や鷹司関白・万里小路中納言・廣橋頭弁の関心を集め、賀茂臨時祭で古譜を用いて一舞が再興され、三条侍従に相伝された。その後、翌年安政2年の賀茂臨時祭でも舞われたが、それ以降は記録がなく、途絶えた可能性が高い。

舞の再興は一楽家や南都方楽家だけでなく、京都方楽家や公家を巻き込んだ重要な事業であったといえる。

〈入門・相伝〉

則察日記には、入門・相伝に関する記録が144件確認されており、そのうち笙の入門・相伝が109件を占める。注目されるのは楽役と呼ばれる社家からの入門で14件確認される。また女性の入門も1件記録されている。安倍季資からの吹挙で入門したお千鶴である。この人物は石井故前中納言の息女で倫宮女藤を勤めており、倫宮の紀州徳川家への興入れに合わせての入門であった。舞の入門は35件で、特に「東遊 駿河舞 求子」の舞入門が26件と多く、主に石清水臨時祭や賀茂臨時祭での舞のための公家の入門であった。入門にあたっての祝儀は笙も舞も「金百疋」「金二百疋」もしくは「銀一枚」が多い。

則正自身の入門記録も2件あった。1つは四辻家への箏の入門である。記述から則正の技芸に優れた様子が記されている。嘉永5年閏2月17日に兄近陳とともに四辻少将へ箏入門、その後則正(安政5年改名)は安政6年10月3日には「箏 輪説 七曲」の許状をもらっている。入門の祝儀「御まな料百疋進上」とあり、ここからも祝儀の相場が伺える。

安政4年5月8日には土州神職宮地伊勢守が、5月25日には土州留守居小森喜八郎が則察の箏聴聞を所望している。また万延元年4月25日からは21回にわたり笙の門弟近衛大納言に箏の下稽古を行っていった。自家の楽器である笙以外にも優れた技芸が伴えば「下稽古」という形で指導をすることがあったことが分かる。

もう1つは神祇道への入門で、「肺氣之病痰咳」の病状が悪化した文久2年8月7日に白川家へ入門している(則正は翌年文久3年1月28日卒去。(楽所録47冊「近陳日記」))。入門には「金五十疋進上」とある。

〈孝明天皇の御笙御師範〉

入門・相伝とは別に特出すべきは文久元年8月23日に行われた孝明天皇の「主上御笙御師範」である。則正が師範として萬歳楽只拍子一通、五常楽急一通の譜面を献上し、御前にて萬歳楽を吹いた。これにより「御笙御師範二付御合力米十石従当酉年生涯被下候」とあり、生涯にわたり合力米十石を賜ることとなった。

以上のように本研究により辻則正への笙・舞楽を通じた交流関係の一端が復元できた。辻則正にとって雅楽を通じた人々との関りは、辻家が師家であったことによるものでもあるが、自身の技芸の成果でもあった。そしてその技芸が辻則正の経済的な安定をもたらしたといえる。

今年度の分析では町人・農民層との関わりを追うことは難しかった。今後辻則正日記の調査を続け、辻則正の交流、雅楽の稽古の様相を通して雅楽文化の中で生きる人びとの交流関係をより具体的に復元していく予定である。また本研究の成果については今後の調査・研究を踏まえ、学術雑誌等での発表を予定している。引き続き調査・研究を続けたい。

5. 研究組織 (◎は研究代表者、○は研究副代表者)

◎五味 玲子 歴史学研究会・事務局員

○工藤 航平 本館研究部 歴史研究系 准教授